

新発田城跡 発掘調査報告書 V

(第19地点)

2008

新発田市教育委員会

例 言

1. 本報告書は、新潟県新発田市大手町6丁目1番地1ほかに所在の新発田城跡第19地点の発掘調査記録である。
2. 発掘調査は、陸上自衛隊新発田駐屯地内の建物建設に伴う本発掘調査であり、新発田市教育委員会が調査主体となり、平成18年7月31日から8月11日に確認調査を実施し、その結果をもとに平成19年5月14日から6月21日にかけて本発掘調査を実施した。整理作業は発掘調査終了後から、平成20年3月まで実施し、調査報告書を作成した。
3. 本発掘調査の経費は、事業主体である北関東防衛局（平成19年8月31日まで東京防衛施設局）が負担した。
4. 遺物・記録類は、新発田市教育委員会が一括保管している。出土遺物の注記は、「S J 19区」とし、グリッド・遺構・層位・日付を続けて付した。
5. 本報告書の執筆は、「第二章1 調査に至る経緯」を鶴巻康志が、その他の執筆と編集を伊藤喜代子が行った。
6. 本書に掲載した写真は鶴巻が撮影した。
7. 第V章 自然科学分析は株式会社パレオ・ラボに金属製品の成分分析を業務委託し、分析結果を掲載した。なお、分析資料の観察は鶴巻が行った。

凡 例

1. 本書に掲載した地図・地形図は、国土地理院発行の1/50,000地形図・1/25,000地形図の「新発田」、陸上自衛隊作成の工事計画平面図1/300で、必要に応じて拡大・縮小している。方位は第1～4図では図の天が真北を、それ以外では、記号の方向が磁北を指す。磁北は真北より西偏約7°20'である。
2. 断面図の位置を示す平面図上のポイントは、各部分図ごとにアルファベットで示した。
3. 遺物の掲載は帰属する遺構単位を基本とし、各遺物に付した番号は挿図・図版とも同一の通し番号である。
4. 土色の観察は、『新版標準土色帖』（小山・竹原1967）を用いた。
5. 遺構図版の縮尺は1/40, 1/50, 1/100で、適宜各図版中にスケールを示した。また、遺構図版中の斜線トーンは、地山であるIV層以下を示し、その他の遺構・遺物図版中におけるトーンは、適宜図版中に凡例基準を示している。
6. 遺物図版の縮尺は1/3を基本としたが、小型の遺物は1/2, 大型の遺物は1/4, 1/8とするなど適宜変え、各図版中にスケールを示した。また、陶磁器の釉の切れる線を一点破線で表現した。須恵器の断面は黒く塗りつぶした。
7. 遺物観察表中の数値は（ ）が復元値、〈 〉が残存値を表す。なお、計測不能なものや、生産地が不明なものは空欄にしてある。
8. 参考・引用文献は巻末に一括し、本文中では著者と発行年を示した。ただし、自然科学分析結果に関するものについては当該章の文末に示している。
9. 出土遺物に記された墨書の釈読は、原直史氏（新潟大学人文学部）、新発田古文書解読研修会、鈴木秋彦氏（新発田市立図書館）に、金属製品については久保智康氏（京都国立博物館）に御教示いただいた。感謝の意を表する次第である。

目 次

第Ⅰ章 遺跡の位置と周辺の遺跡

1 遺跡の位置と立地	1
2 周辺の遺跡と歴史的環境	2
3 過去の発掘調査成果	3

第Ⅱ章 調査の概要

1 調査に至る経緯	5
2 調査体制	5
3 確認調査	6
4 グリッドの設定	6
5 調査の方法	7
6 現地調査の経過	7
7 整理作業	7
8 基本層序	8

第Ⅲ章 遺 構

1 護岸施設・堀	9
2 土坑・溝・ピット	13

第Ⅳ章 遺 物

1 遺物の概要	14
2 護岸施設出土の陶磁器・土器	14
3 土坑・溝・ピット出土の遺物	25
4 玩 具	31
5 木 製 品	32
6 漆 製 品	34
7 金属製品	36
8 銭 貨	40
9 石 製 品	41
10 硝子製品	41
11 瓦	42
12 近世以前の遺物	45

第Ⅴ章 自然科学分析

新発田城跡第19地点出土金属成分分析	46
--------------------------	----

第Ⅵ章 ま と め

1 出土した遺物について	49
2 当該地点の変遷	50
3 小 結	53

参考文献	53
------------	----

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と地形	1	第18図 2号護岸施設の出土遺物 土器(1) ...	24
第2図 周辺の遺跡	2	第19図 2号護岸施設の出土遺物 土器(2) ...	25
第3図 新発田城城郭図	4	第20図 土坑の出土遺物	26
第4図 調査地点の位置	4	第21図 玩 具	31
第5図 確認調査	6	第22図 木 製 品	33
第6図 遺構全体図	8	第23図 漆 製 品	35
第7図 護岸施設分類図	9	第24図 金属製品(1)	37
第8図 基本層序と護岸施設の土層	10	第25図 金属製品(2)	38
第9図 堀・1～5号土坑・溝	12	第26図 銭 貨	40
第10図 2号護岸施設の出土遺物 磁器(1)	15	第27図 石製品・硝子製品	41
第11図 2号護岸施設の出土遺物 磁器(2)	16	第28図 瓦(1)	42
第12図 2号護岸施設の出土遺物 磁器(3)	17	第29図 瓦(2)	43
第13図 2号護岸施設の出土遺物 磁器(4)	18	第30図 近世以前の遺物	45
第14図 2号護岸施設の出土遺物 陶器(1)	19	第31図 新発田城の絵図	51
第15図 2号護岸施設の出土遺物 陶器(2)	20	第32図 2号護岸施設の構築単位図	52
第16図 2号護岸施設の出土遺物 陶器(3)	21	第33図 堀の変遷図	52
第17図 2号護岸施設の出土遺物 陶器(4)	22		

表 目 次

表 1	出土遺物観察表	陶磁器・土器	……	26	表 6	出土遺物観察表	銭 貨	……	40
表 2	出土遺物観察表	玩 具	……	32	表 7	出土遺物観察表	石製品	……	41
表 3	出土遺物観察表	木製品	……	34	表 8	出土遺物観察表	硝子製品	……	41
表 4	出土遺物観察表	漆製品	……	36	表 9	出土遺物観察表	瓦	……	44
表 5	出土遺物観察表	金属製品	……	39	表 10	出土遺物観察表	近世以前の遺物	……	45

図 版 目 次

図版 1	調査区全景・セクション	図版 6	2号護岸施設	出土遺物	陶磁器
図版 2	遺 構	図版 7	2号護岸施設	出土遺物	陶器
図版 3	漆 製 品	図版 8	2号護岸施設	出土遺物	陶器・土器・玩具
図版 4	2号護岸施設	出土遺物	磁器	図版 9	玩具・木製品・瓦
図版 5	2号護岸施設	出土遺物	磁器	図版 10	金属製品・近世以前の遺物・その他

第Ⅰ章 遺跡の位置と周辺の遺跡

1 遺跡の位置と立地

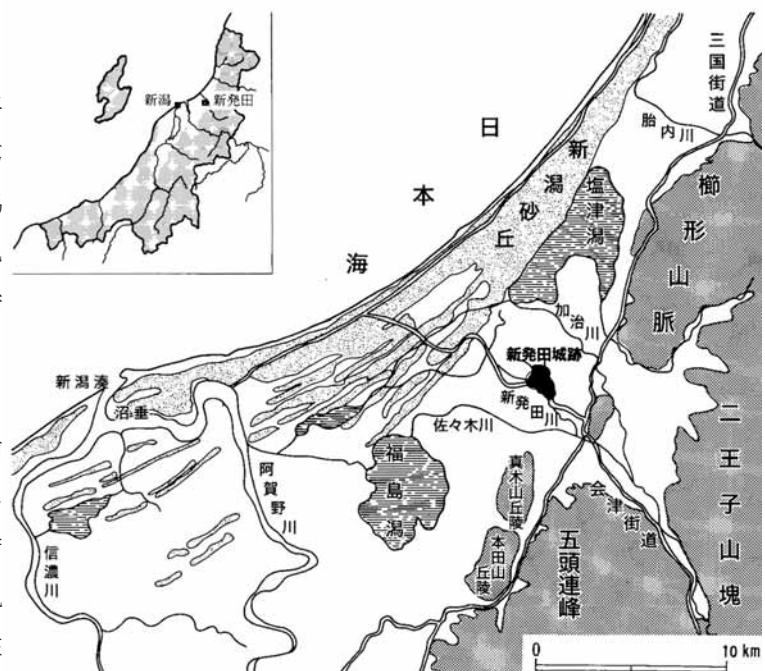
新潟県新発田市は新潟県北部に位置する中核都市で、現在の総面積は532.82㎡、人口は約10万6千人である。東方は櫛形山脈、飯豊連峰、二王子山塊、南東方向の五頭連峰、真木山丘陵等の山地を背とし、これを源とする河川が扇状地を形成し、また扇状地・沖積低地を開析して帯状の自然堤防を発達させた。西方は日本海に平行して砂丘列が並び、河川の直接的な海への流入をはばみ、湖沼と湿地帯を形成していたが、近世以降の砂丘開削による排水・干拓により農村地帯が広がっている。

市街地を流れる新発田川は、飯豊連峰に源を発した加治川の支流で、新発田城の外堀は新発田川本流とその支流を利用したものとされる（小村1980）。扇状地上に築かれた城の構えは、本丸の周囲を二ノ丸が囲み、南側に三ノ丸を配置する。その南端に大手門が、他領からの街道が集中する五十公野に向かって開く、梯郭式の平城である。城の周囲には武家地を配し、城下の南東部に寺町・町屋が形成される（第3図）。

溝口氏による当地方の支配は、豊臣秀吉の命により、慶長3（1598）年、初代新発田藩主溝口秀勝が、加賀国大聖寺から越後国蒲原郡6万石をもつての入封に始まる。江戸幕府の開府後も、明治の廃藩置県に至るまで、藩主が替わることなく一貫して治める。城は上杉景勝との戦いで滅びた新発田重家の館跡を取り入れる形で、新たな構築を始め、承応3（1654）年に城郭全体が完成したとされる。その後、寛文8（1668）年、享保4（1719）年の大火で櫓などを消失し、その都度修復している。このため、時代により櫓の位置や数に変化がみられる。当時の遺構として現存するのは、本丸表門、旧二ノ丸隅櫓、本丸石垣と堀、土橋門付近の土居で、表門と旧二ノ丸隅櫓は昭和32年に国の重要文化財指定を受け、昭和34～35年にかけて解体修理工事が行われた。その際、二ノ丸隅櫓は、二ノ丸北部から本丸鉄砲櫓跡の現在地に移築されている。また、三階櫓と辰巳櫓が平成16年に復元された。

明治維新後の城内の中心部は、明治7年からアジア・太平洋戦争終了まで、歩兵第16聯隊の兵営として使用され、戦後は新潟青年師範学校、新潟大学新発田分校、本丸中学校の校地を経て、昭和28年からは保安隊、翌年に名称を改め陸上自衛隊駐屯地として現在に至る。

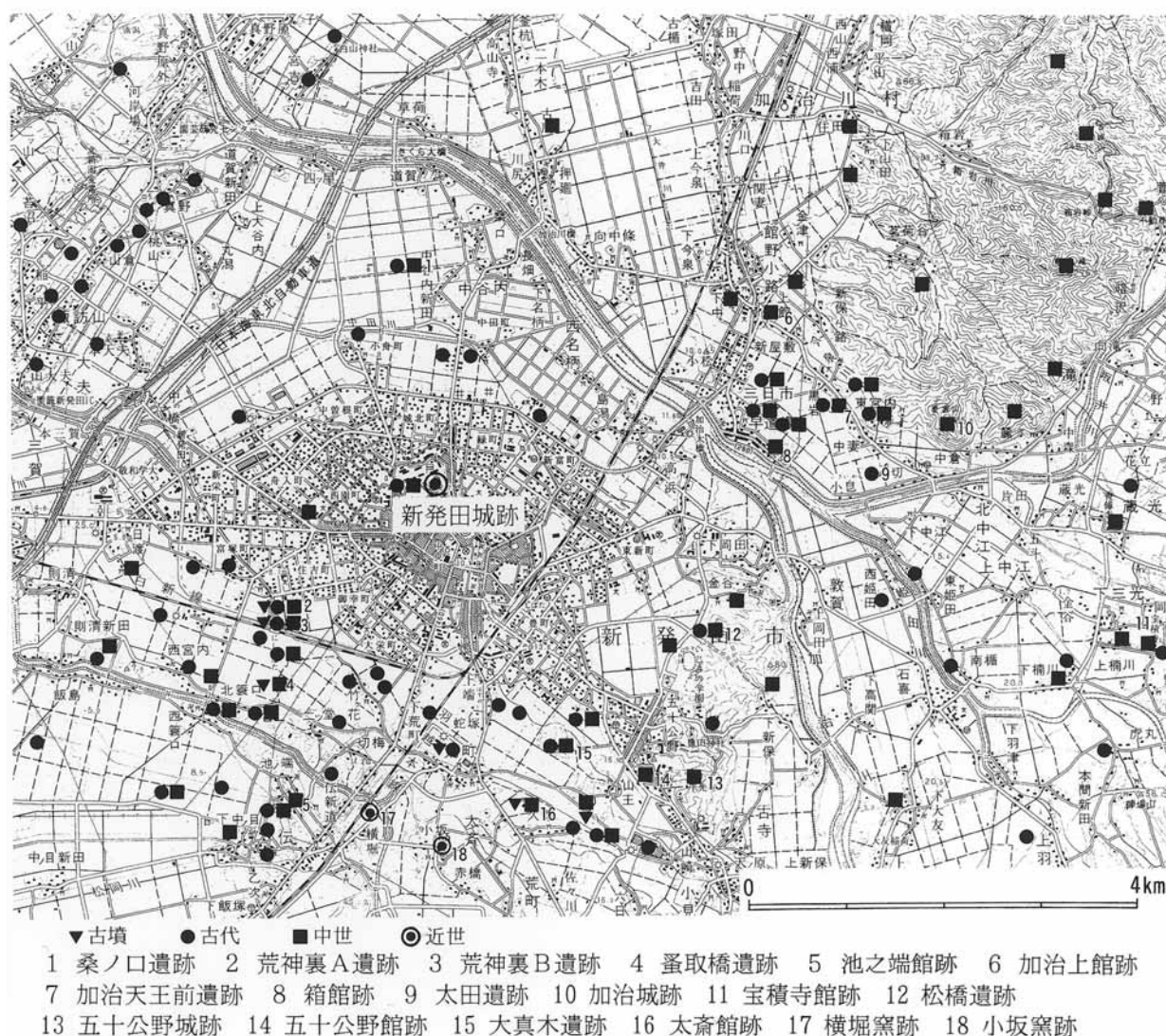
本調査地点周辺は、明治18年に陸軍の営前練兵場が設置され、戦後は、市営野球場として利用されていたが、平成12年に市と防衛庁との間で、市営野球場跡地と営前訓練場（現新発田城址公園）の等価交換が実現し、現在は自衛隊駐屯地として使用されている。



第1図 遺跡の位置と地形

2 周辺の遺跡と歴史的環境

新発田城跡の位置する新発田市街地は、古代においては越後国沼垂郡に属するとされ、10世紀に成立した『和名類聚抄』によれば、沼垂郡に存在した沼垂・賀地・足羽の3郷のうち、賀地郷に比定されている（桑原1980）。古代の遺跡は河川によって形成された扇状地および自然堤防上と海岸砂丘列上に多く分布する。集落遺跡では五十公野丘陵西側微高地に8世紀中葉～9世紀前半に比定される松橋遺跡（鶴巻1998）がある。佐々木川の自然堤防上にある荒神裏A遺跡では8世紀後半～9世紀末、12世紀後半～15世紀前半、16世紀後半～17世紀初頭まで断続的に集落が営まれ（鶴巻ほか2005）、隣接する荒神裏B遺跡でも、8世紀前半～10世紀初頭の畑を伴う集落跡が検出されている。加治川左岸の桑ノ口遺跡では、区画溝を付帯する大型掘立柱建物が検出され、緑釉・灰釉陶器や漆紙文書が出土している。（鶴巻ほか2003）。また、加治川支流の姫田川右岸段丘上に位置する坂ノ沢C遺跡では、竪穴・掘立柱建物を検出し、仏具系を含む9世紀中頃～10世紀前葉の遺物が出土している（渡邊ほか2001）。櫛形山脈南側の扇状地扇端部にある太田遺跡では、5棟の掘立柱建物を検出し、9～10世紀前半の遺物が出土している。生産遺跡は数が多く、須恵器窯は櫛形山脈西麓に8世紀前葉の下小中山窯跡（戸根1973）、



第2図 周辺の遺跡

8世紀末の貝屋窯跡（川上1982）、二王子西麓の丘陵に9世紀前半のホーロク沢A・B窯跡（鶴巻2001）、真木山丘陵には8世紀前半の志村山窯跡（川上1999）、8世紀後半の岡屋敷窯跡（中川1962）、8世紀末の高山寺窯跡（真木山A遺跡）（戸根1986）、9世紀前半の馬上窯跡（真木山D遺跡）（坂井ほか1989）が分布する。製鉄遺跡では万代がなくそ沢遺跡（真木山B遺跡）、五月沢遺跡（真木山C遺跡）（関・本間1981）などがある。

『吾妻鏡』における文治2（1186）年の記述によれば、沼垂郡内には加地荘・豊田荘などが立荘されており、本遺跡を含む新発田市街地は加地荘にあたる（荻野1980）。両荘は在地開発領主である城氏が支配していたが、源平の争乱で鎌倉御家人の佐々木三郎盛綱に滅ぼされた。

鎌倉幕府樹立後は、佐々木氏が加地荘の地頭職となり、以来佐々木加地氏として在地領主化する。建武の新政後の南朝と北朝の抗争の際には、北朝側の越後国の大将を務める程の勢力を有していた。一族は室町期になると加地、竹俣、新発田さらには五十公野氏などに分かれ、惣領家である加地氏は加治川右岸の北西部、竹俣氏が加治川右岸の南東部、新発田氏が加治川左岸を領していたとされる。加地氏は櫛形山脈に位置する加治城跡を本拠とし、櫛形山脈稜線上には麓城跡、滝城跡、鳥屋峰城跡、七曲城跡、菅谷城跡が分布する。館跡としては現在加地氏の菩提寺でもある蔵光館跡や、寺内館跡（鶴巻1999）、小出館跡、菅谷館跡、上寺内館跡などが分布し、発掘調査・旧地籍図などから、いずれも方形居館とされる。竹俣氏は三光館跡、宝積寺館跡（田中・鶴巻ほか1990）、岡塚館跡（鶴巻1998）、東城館跡などの館跡、竹俣城跡、竹俣新城跡などの山城がある。新発田氏は新発田城跡（新発田館跡）を本拠地として、15世紀前半頃には有力化し、戦国期には阿賀北地方有数の豪族として、越後守護代である長尾氏と対抗しうる勢力に至り、豊田荘域にまで支配領域を広げていた時期も存在したとみられる。天文・永禄年間の新発田長敦の頃は、上杉謙信の家臣として重用されるようになり、謙信の没後、後継者をめぐる御館の乱で、長敦と実弟の五十公野重家は上杉景勝方について軍功をあげたが、後に景勝と対立するようになる。長敦の死後、重家が新発田氏を継ぐが、上杉氏との対立は本格化し、天正15（1587）年、上杉景勝により新発田重家の居城は落城、新発田氏は滅亡する。支族と考えられる五十公野氏関連では五十公野館跡、五十公野城跡が新発田城跡の東方3kmにある五十公野丘陵に存在する。周辺には金谷城跡、升瀉山城跡がある。また、佐々木川流域には太斎館跡、池之端館跡が分布している。

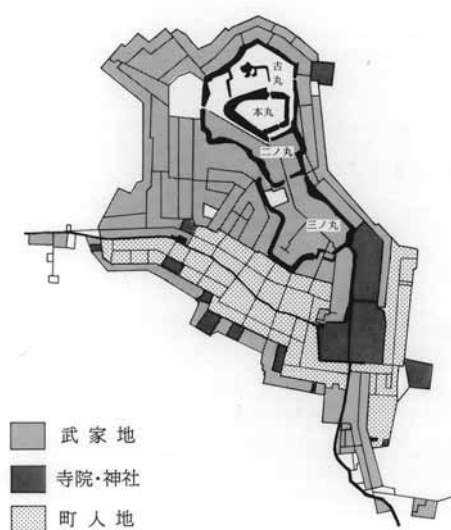
城館跡以外では、塩津潟（紫雲寺潟）の南側潟端に13世紀後半～14世紀前半を主体とする中住吉遺跡・二ッ割遺跡（宮内2002・宮内ほか2004）、住吉遺跡（高橋ほか2006）があり、遺物の様相やその立地から流通拠点との指摘がなされている（水澤2005）。新発田川流域の大真木遺跡からは方形区画墓と推測される遺構が検出され（田中ほか1998）、櫛形山脈南端山麓の加地天王前遺跡では、石組井戸を検出し、大量のかわらけが出土した。

近世については、本遺跡以外に新発田藩の分家である池之端陣屋跡・切梅陣屋跡・二ッ堂陣屋跡があり、中世に加地氏の居館があったと伝えられる加治館跡には三日市藩の陣屋がおかれていた。生産遺跡としては、寛政8（1796）年に開窯した新発田藩御用窯である小坂窯、天保4（1833）年頃には操業していた横堀窯（武田1980）がある。大伝新田窯跡は周知化されているが詳細は不明である。また五十公野山南端の古寺では、新発田城の石垣に用いた「古寺石」と呼ばれている粗粒玄武岩が採掘されている。

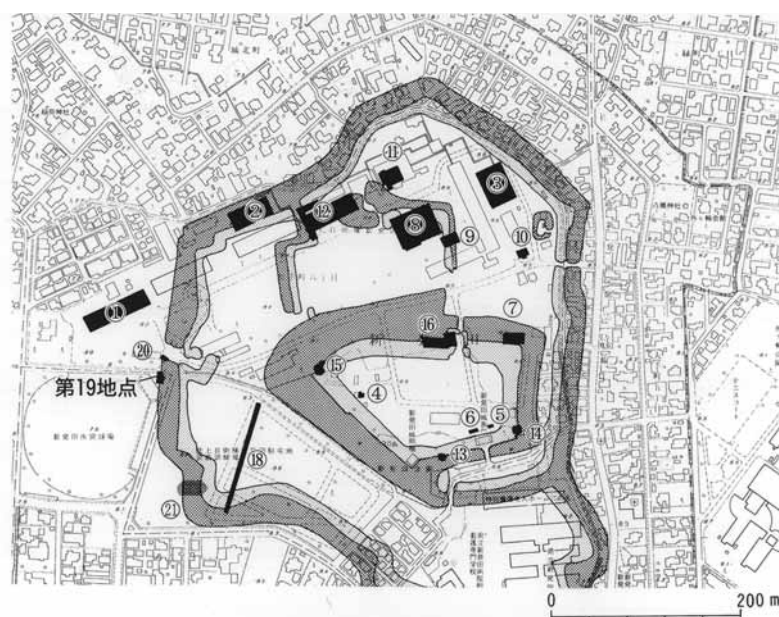
3 過去の発掘調査成果

新発田城跡の発掘調査は昭和61年から行われ、これまでに21の地点において発掘調査を実施し、『新発田城跡発掘調査報告書』Ⅰ～Ⅳを刊行している。以下に調査成果の概略を述べる。

石垣 近世城郭としての新発田城の築城は、慶長7（1602）年頃に始まったとされる。築城当初の石垣は本丸の表門側のみに全面乱積みで石垣が用いられ、他は腰巻石垣や土居であったと考えられている。寛文9（1669）



第3図 新発田城城郭図



第4図 調査地点の位置

年の大地震により石垣が崩壊し、その復旧工事で、古寺石を使用した「切込接布積」に改めたとされる。第16地点の発掘調査や辰巳櫓（第14地点）の復元工事の際に検出された石垣では、石の表面は丁寧に整形してあるが、面取りが不十分な割石による打込接積で築かれている部分もあり、石材・積み方の使い分けがされていた。

堀 第2地点で二ノ丸外堀北西辺の発掘調査が行われている。堀底の標高は約5.6mであった。第8・9地点では、二ノ丸内にある池と接続する堀を検出した。一部で護岸施設が残る。

櫓 江戸時代末期の新発田城には、本丸、二ノ丸、三ノ丸をあわせて11棟の櫓があった。本丸西端にあった三階櫓が天守的な役目を果たしており、三階櫓の棟はT字形で、3つの入母屋それぞれに鯨をあげるのが特徴である。平成16年の2棟の櫓復元に先立ち発掘調査が行われ、辰巳櫓跡（第14地点）では11基の礎石や踏石を検出し、その配置から櫓出入口が現存する絵図とは異なることが判明した。三階櫓跡（第15地点）では建築基礎の遺存度が低く、割栗石と考えられる石群を検出している。

本丸 第16地点の調査で外柵形の石垣を検出し、本丸裏門の位置が確定した。

二ノ丸 第8～12地点の発掘調査で、9世紀前半を中心とする遺物が出土し、先に述べた河川流域に広がる遺跡同様に、新発田川沿いの微高地に集落が形成されていたものと想定される。近世において二ノ丸北部は「古丸」と称され、新発田氏が居館を構えていたとの伝承がある（小村1980）。第8地点では方形居館の北辺と想定される堀と郭内の一部を検出し、堀と土塁は、近世城郭の一部として取り込まれ機能していたと想定されている。また、第11地点で中世の居館北側に隣接する中世の集落を検出した。第10地点は、天保年間頃に作成されたとされる屋敷割図、惣絵図における「御蔵屋敷」に相当し、幕末の木簡が多量に出土している。墨書は「御蔵米」あるいは新発田近隣の旧村名が認められ、城内に持ち込まれた年貢米が城下の農村から納められていたことがわかる。隣接する第3地点では礎石建物を検出した。第12地点では近世新発田城の築城に際して盛られたとみられる土塁、およびその基底部下から近世初頭の一括遺物が出土し、また天保期の絵図面に描かれる池などを検出した。

城下 二ノ丸の西側に位置する御作事場（第1地点）の一部で発掘調査が行われ、絵図に描かれる広小路や御作事所の区画に沿ったピット・杭列が検出されている。しかし、新発田市では主に本丸と二ノ丸、および近世新発田藩の公共施設などを周知遺跡の範囲としているため、発掘調査事例はほとんどない。

第Ⅱ章 調査の概要

1 調査に至る経緯

平成17年10月に、陸上自衛隊新発田駐屯地（以下、駐屯地）より、新発田市教育委員会（以下、市教委）に同駐屯地内の史料館（白壁兵舎）移転工事に伴って、その建物内で保管している器材を入れるための倉庫を新規に建設する計画が示された。市教委は駐屯地敷地の大半が周知の埋蔵文化財包蔵地の新発田城跡にあたるため、建物建設予定地の選定段階から駐屯地側と協議を行い、工事により地下の埋蔵文化財に影響が出ないよう調整した。この協議を踏まえ倉庫の建設予定地が確定したため、平成18年7月～8月に市教委が予定地の確認調査を実施することで合意し、平成18年6月23日付けで事業主体者である東京防衛施設局より土木工事の通知が提出された。

確認調査の結果、工事範囲の東端部で二ノ丸堀の西岸に設けられた護岸の一部を検出し、これを含む西岸から堀の斜面にかけての範囲で本発掘調査が必要であると判明した。なお、堀西岸の西方は城下となるため、本発掘調査の対象には含まれない。この結果を受けて、倉庫予定地のうち発掘調査の対象となる範囲は、建物の東端部に相当する90㎡とし、平成19年度に市教委が主体となって本発掘調査を実施することで合意し、平成19年2月6日付けで東京防衛施設局と新発田市が費用負担契約を締結し本発掘調査に着手した。なお、調査着手前までに実施設計で建物東端の位置が東へ2mずれ、対象面積が増加したこと（合計138㎡）、当初の想定よりも護岸が複雑で、遺物も大量に出土したことから発掘調査費用の増額を協議し、平成20年3月5日付けで費用の変更委託契約を締結した。

2 調査体制

確認調査（平成18年度）

調査主体 新発田市教育委員会（教育長 大滝 昇）

監理	築井 信幸（教育部長）	調査担当	渡邊美穂子（生涯学習課 主任）
総括	土田 雅穂（生涯学習課長）	調査員	西澤 正和（〃 臨時職員）
	田中 耕作（生涯学習課 参事）	庶務	六井 浩子（〃 主事）

本発掘調査・報告書作成（平成19年度）

調査主体 新発田市教育委員会（教育長 大滝 昇）

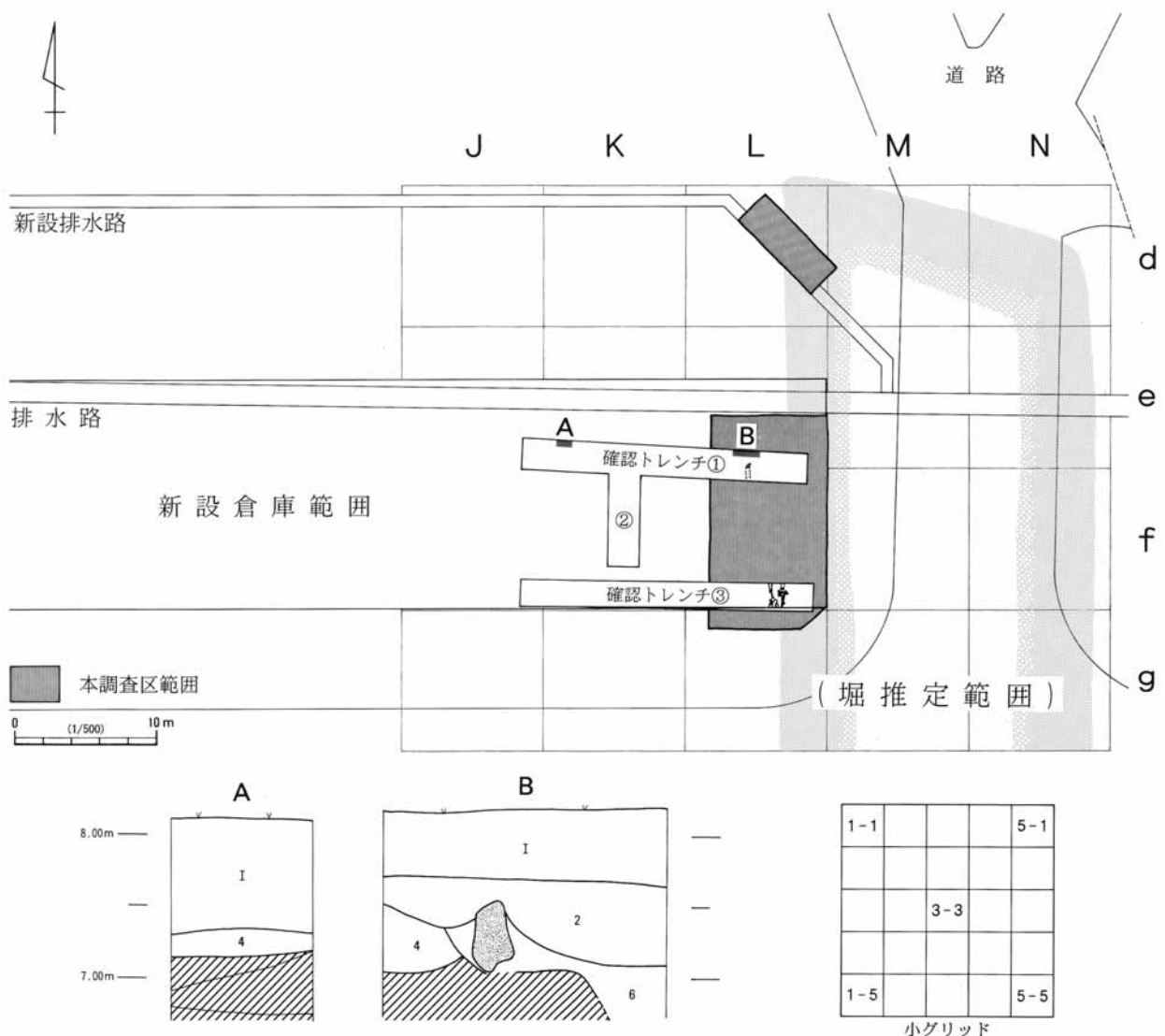
監理	高澤誠太郎（教育部長）		
総括	土田 雅穂（生涯学習課長～5月31日）	調査員	伊藤喜代子（生涯学習課 臨時職員）
	杉本 茂樹（〃 6月1日～）		西澤 正和（〃 〃）
	田中 耕作（〃 参事）	庶務	安達 悦司（〃 主事）
調査担当	鶴巻 康志（生涯学習課 埋蔵文化財係長）		

3 確認調査

19地点の確認調査は20地点の確認調査とともに、平成18年7月31日から8月11日の9日間で実施した。倉庫予定地範囲内の外堀にかかる部分に、堀と直行する方向で2.2×約20mのトレンチ2本と、堀と平行する方向で2.2×7mのトレンチ1本を設定し、約103㎡を掘削した（第5図）。堀外側の壁面に、護岸施設が良好に遺存しており、外堀の範囲を把握することができた。遺物は18世紀後半～19世紀前半の遺物が含まれる。また堀の西側は著しく攪乱を受けていることが判明した。この結果、新設倉庫予定地の東端部分の90㎡（後に138㎡に変更）が本発掘調査対象となった。

4 グリッドの設定

発掘調査のグリッド設定は、自衛隊倉庫建築工事杭を基準とした。1辺10m四方の方眼を大グリッドとして、X軸（東西方向）を大文字のアルファベット、Y軸（南北方向）を小文字のアルファベットで表し、北西を優位として付している。さらに大グリッド内を2mで25分割した小グリッドを設定し、大グリッド同様に、北西を優



第5図 確認調査

位として1～5の座標の組み合わせで表した（第5図）。また標高の原点は、「旧二ノ丸隅櫓」の北西に位置する三等三角点（『本丸』h=12.996m）を基準点として調査区内にレベルを移動した。

5 調査の方法

本発掘調査では、表土であるⅠ層をバックホーにより除去し、Ⅱ層またはⅢ層以下を人力によって掘削した。遺構に付した番号は調査時の検出順としているが、整理作業の段階で若干の修正を加えた。出土した遺物は、基本的に遺構・層位別に、小グリッド単位で取り上げた。

6 現地調査の経過

5月14日 調査地点への器材の搬入や、調査区、グリッド、ベンチマークの設定を行う。

5月15日 重機による表土掘削を開始する。Ⅲ層上面では遺構が検出されないため、メインセクション部分を残し、人力でⅢ層の掘削に入る。近代の遺物が共伴し、19世紀中葉に比定される遺物が出土する。確認調査で検出した護岸構築材の他に、東西方向に延びる木組Cを検出する。並行して調査区内のグリッド設定を行う。

5月18日～21日 確認調査時のトレンチ壁面を利用して土層観察を行い、構築材の位置や堀の落ち込みを確認する。堀埋土である1層の掘り下げに着手し、調査区東壁の観察から、1号護岸施設（木組A₁）によって、Lfグリッド内で堀が立ち上がることが判明した。

5月22・23日 調査区北側に厚く堆積した2層の掘削に着手し、さらに2号護岸施設構築土の掘削、構築材の検出に入る。Lfグリッドでは礫が集中して検出され、検出状況の記録作業に入る。

5月24日～6月4日 調査区南側でも2号護岸施設構築土の掘削に着手する。構築材の検出作業と並行して、メインセクションの記録作業を行う。

6月5日 構築材検出状況写真を撮影し、残りの構築材の記録作業を行う。

6月6日～10日 構築材下部の構築土の掘削に先立ってメインセクションラインでトレンチを設定し、土層の観察を行いながら掘削を進めるとともに、構築材の取り外しを行った。湧水が著しいため水中ポンプで常時排水しながら掘り下げ、堀底面での溝状のプランを検出する。また堀の上端に沿って、小規模の杭列や瓦片集中部を検出し記録作業を行う。

6月11日～13日 2号護岸施設構築土の下部および溝状プラン（2号護岸9～12層）の調査を行う。

6月14・15日 Lfグリッド南西部に位置する土坑・溝の調査を行い、並行して堀、調査区の壁セクションの記録作業を行う。

6月18日～21日 調査区の北側に位置する排水管工事の影響から、調査区北半の埋め戻しを行う。同時に重機によって地山を断ち割り、土層の記録をする。また排水路掘削予定地に設定したトレンチで、木組Eに接続すると思われる護岸施設構築材を検出し、記録作業を行う。併せて器材の搬出を進め、現場作業を終了した。

7 整理作業

整理作業は現場作業終了後の7月から開始し、他の遺跡の発掘調査・報告書作成と並行して、または断続的に実施した。出土遺物の水洗・注記作業、現場写真の整理・遺物台帳の作成、遺物接合作業終了後、掲載遺物の選出・実測作業、各図面のトレースを行った。また金属製品の自然科学分析を、株式会社パレオ・ラボに委託して実施した。12月から遺物の撮影、図版版下の作成、原稿の執筆を行い、報告書を印刷・刊行した。

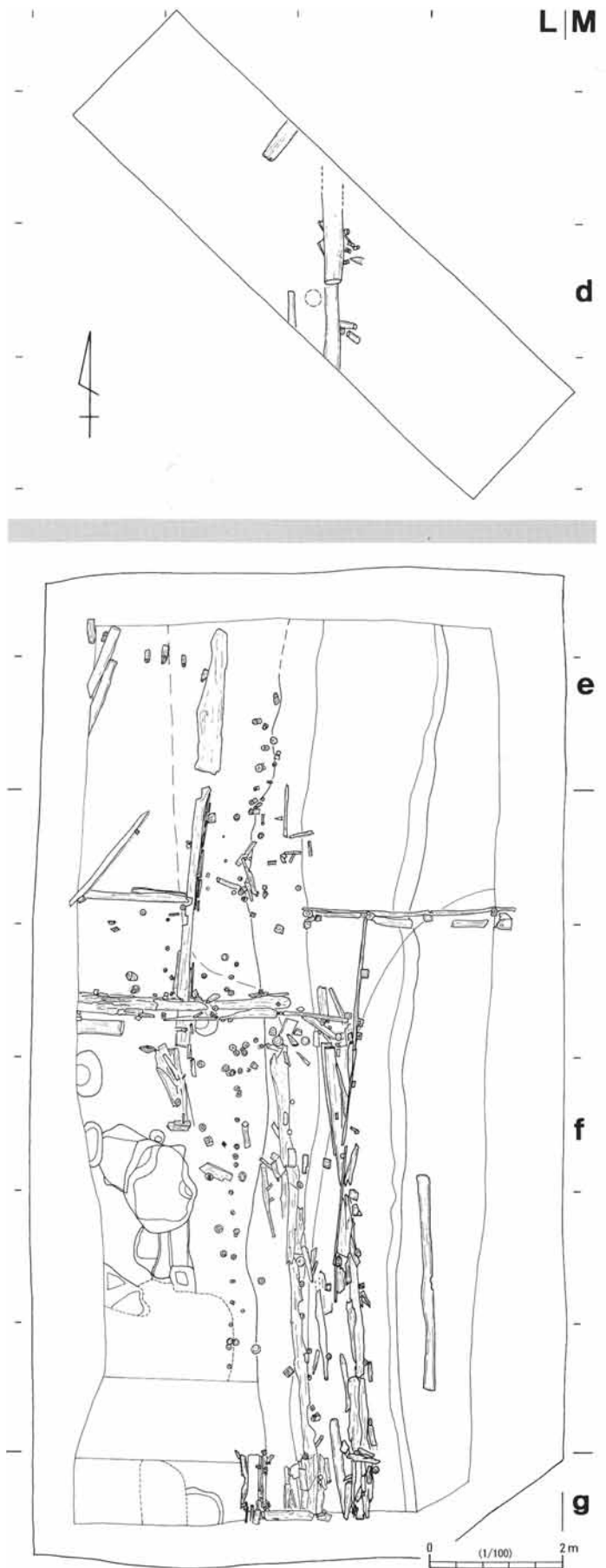
8 基本層序 (第8図)

確認調査の結果、トレンチ①・③で検出したやや主軸の異なる護岸構築材の埋置層位を観察するため、調査区中央に堀と直交するメインセクションを設定した。また全体完掘写真を撮影後に、同セクションラインで地山の断ち割りをを行い、基本層序とした。

I層は現表土。II・III層は近代の整地層である。IV層以下は自然堆積層で、IV層上面は標高7.00m前後である。III層下～IV層直上までが、護岸施設の構築土である。

護岸構築土は確認調査の結果から、調査区から西へ10m以上の範囲で整地層として続いていることが判明しているが、護岸施設が本調査地点での中心的な遺構であるため、土層の記載は「第三章 遺構」で行っている。

- I 層 2.5Y4/2 暗灰黄色土 粘性弱、しまり極強。近現代の整地層である。3層に細分される。
- II 層 2.5Y4/1 黄灰色土 粘性強、しまり弱。粒子が細かい。近代の整地層で、堀b底面でもみられることから、堀bが機能していた時期の堆積である。
- IIIa 層 5Y4/1 灰色土 粘性強、しまり極強。
- IIIb 層 5Y6/2 灰オリーブ色シルト 粘性弱、しまり極強。シルトブロックを主体とし、粗砂・暗灰色土を多く含む。炭粉状の黒色土ブロックを少量含む。
- IIIc 層 5Y5/1 灰色土 粘性強、しまり極強。粗砂・シルト粒を多量含む。
- IV 層 5Y6/1 灰色砂 ～ 2.5Y6/1 黄灰色砂 粘性なし、しまり強。
- V 層 2.5Y6/1 黄灰色砂 細砂主体。粘性なし、しまり強。
- VI 層 5Y6/1 灰色砂質シルト ～ 2.5Y5/1 黄灰色シルト 粘性弱、しまり弱。
- VII 層 5Y6/1 灰色砂 粘性なし、しまり強。
- VIII 層 5Y4/1 黄灰色粘土 粘性強、しまり弱。部分的に黄灰色シルト(2.5Y6/1)が入る。
- IX 層 5Y6/1 灰色砂 粘性なし、しまり強。



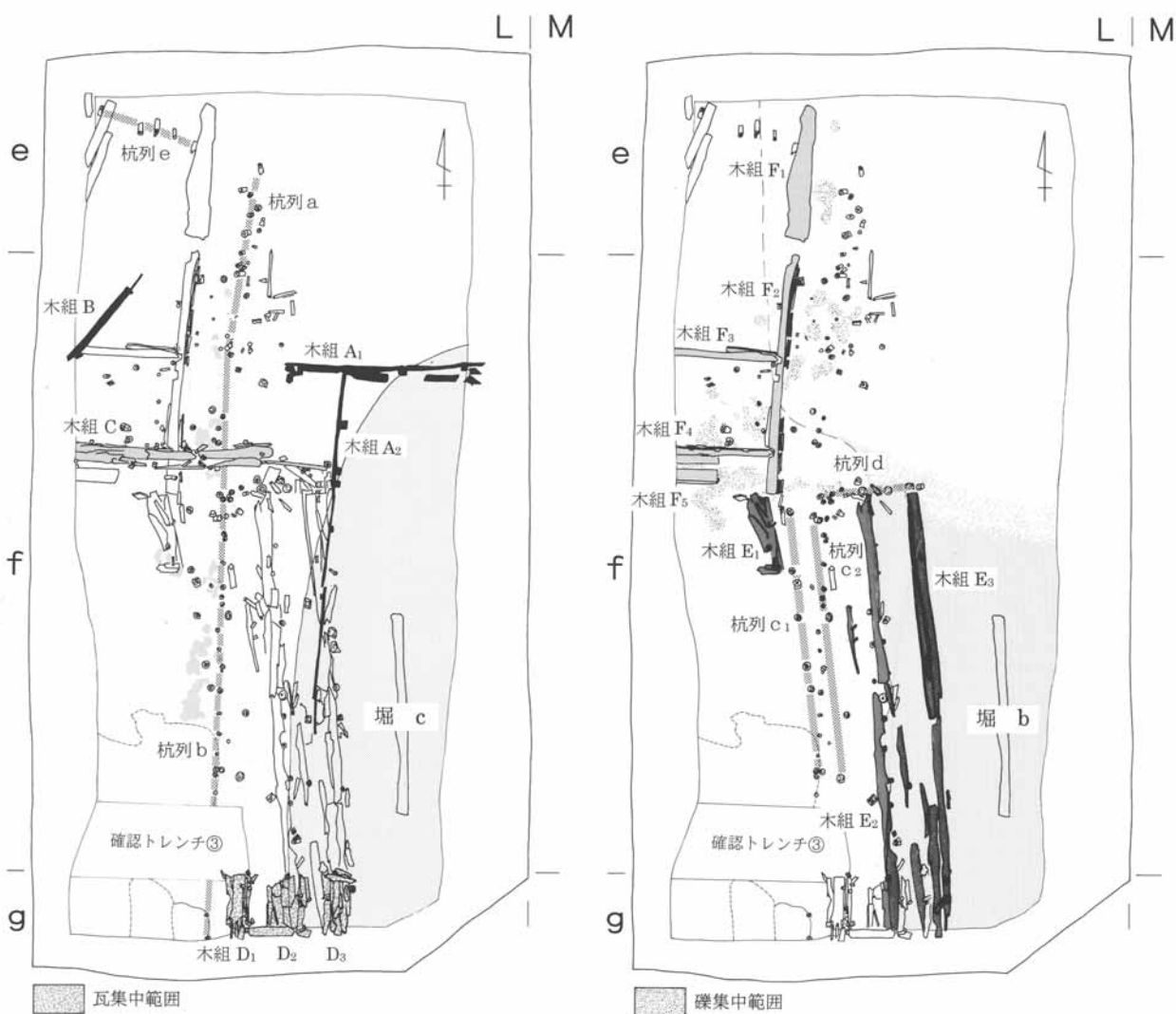
第6図 遺構全体図

第Ⅲ章 遺 構

1 護岸施設・堀

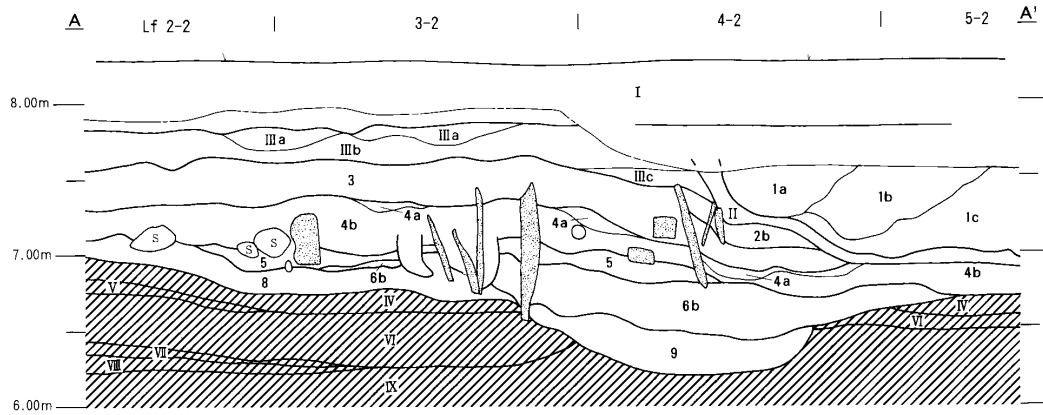
本調査区は二ノ丸の周囲を巡る外堀の西辺に位置する。堀の西岸壁で構築された2基の護岸施設を検出し、その結果、堀の3時期にわたる変遷が追えた。それぞれ新→旧の順に、1号護岸施設の構築による堀c、2号護岸施設構築による堀b、2号護岸施設構築以前の堀aと呼称し、記述はこの順番で行う。護岸施設は主に木組と杭列から構成され、配置と構築法によって木組をA～F、杭列は木組構築に伴うもの以外をa～cとした。

1号護岸施設（第6・7・8図） 木組A・Bによって構成される。木組Aを基礎とした本護岸施設により、堀bを二分割し、北側を埋め立てている。護岸構築土は灰色土および灰色砂で、北西側から一時期に投入されていた。木組Aは堀の壁中段でT字型に設置されており、東西軸の木組A₁は調査区東側へ延びる。規格性の強い

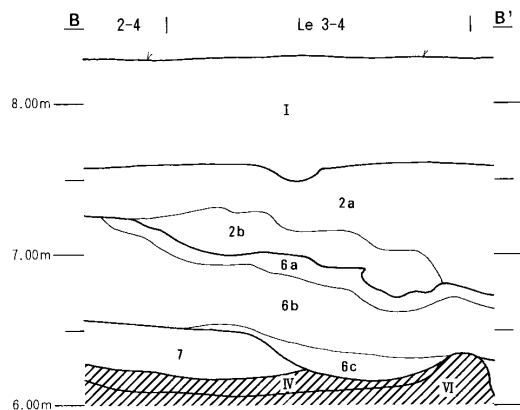


第7図 護岸施設分類図

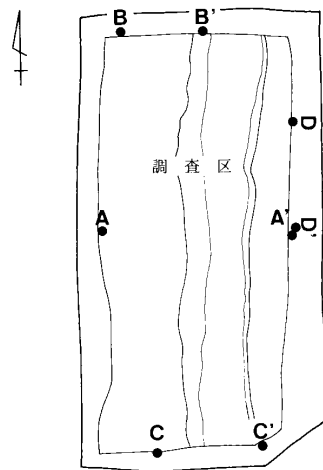
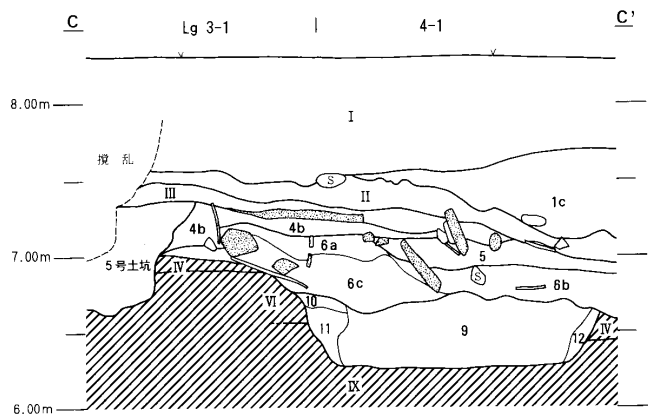
調査区メインセクション (基本土層)



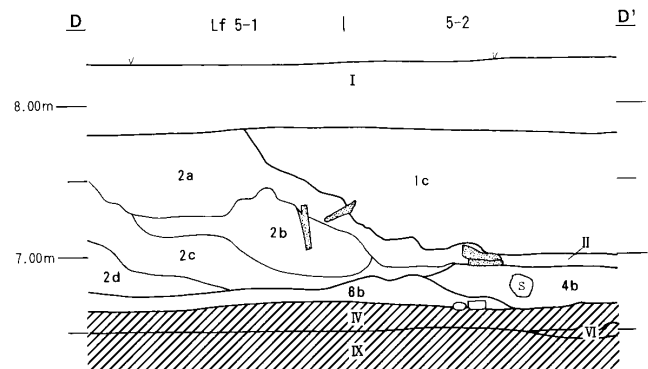
調査区北壁セクション



調査区南壁セクション



調査区東壁セクション



- 堀**
- 1 a 層 7.5Y5/1 灰色土 粘性・しまり強。シルトブロックが部分的に織状を呈す。
 - 1 b 層 5Y3/1 オリーブ黒色土 粘性・しまり強。砂粒を少量、シルト小ブロック・炭化物粒・焼土粒を微量含む。
 - 1 c 層 5Y4/1 暗灰色土 粘性強、しまり弱。白色シルトブロックを多量含む。砂粒を少量含む。

- 1号護岸施設**
- 2 a 層 5Y4/1 灰色土 粘性強、しまり弱。砂粒を少量含む。
 - 2 b 層 5Y5/1 灰色砂 粘性・しまり無し。粒子が細かい。
 - 2 c 層 5Y5/1 灰色砂質土 粘性・しまり強。シルトブロックを少量含む。
 - 2 d 層 5Y6/1 灰色砂質土 粘性・しまり強。砂と明灰色シルトの小ブロックの混合土。

2号護岸施設

- 3 層 5Y4/1 灰色土 粘性強、しまり弱。砂粒を少量含む
- 4 a 層 5Y4/2 灰オリーブ色砂質土 粘性無し、しまり強。粗砂とオリーブ黒色土の混合土。
- 4 b 層 2.5Y4/1 黄灰色土 粘性強、しまり弱。砂粒・シルト粒を少量含む。
- 5 層 2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂 粘性・しまり無し。有機物片を多く含む。
- 6 a 層 2.5Y5/1 黄灰色土 粘性強、しまり弱。シルト粒・有機物片を少量含む。
- 6 b 層 5Y4/1 灰色土 粘性強、しまり弱。シルトブロック・砂粒を少量含む。
- 6 c 層 5Y4/1 灰色土 粘性強、しまり弱。砂粒を少量含む。有機物片を少量含む。
- 6 d 層 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土 粘性・しまり無し。有機物片を多く含む。
- 7 層 2.5Y4/2 暗灰黄色混砂土 粘性弱、しまり無し。黒褐色土と灰黄色粗砂の混合土。有機物片を少量含む。
- 8 層 2.5Y4/1 灰色砂 粘性・しまり無し。φ0.5~1mm程度の粗い砂が主体。
- 9 層 2.5Y3/1 黒褐色土 粘性強、しまり弱。シルトブロック・有機物片を少量含む。部分的に2.5Y6/1 黄灰色砂が筋状に入る。
- 10 層 2.5Y6/1 黄灰色砂質土 粘性無し、しまり弱。有機物片を少量含む。
- 11 層 2.5Y5/1 黄灰色シルト灰色土 明灰色砂を多量に含む。
- 12 層 2.5Y5/1 黄灰色シルト 明灰色砂を含む。

第8図 基本層序と護岸施設の土層

幅約12cmの角材が1 m間隔に打設されており、横板として長さ約2 m、幅約20cm、厚さ約3 cm、および長さ約60 cm、幅25cm、厚さ約6 cmの板材が渡されている。南北方向の軸をもつ木組A₂は、長さ約2 m、幅約34cm、厚さ3～5 cmで断面形状が円弧状の板材によって構築される。従来（2号護岸施設）の堀西岸壁の補強を目的としたものと思われる。

調査区西壁にかかる木組Bは、板材を留める幅5 cm程の角材が、旧堀壁（2号護岸施設）の傾斜に沿って打設されている。木組の南東側に1号護岸構築土が堆積していることから、1号護岸施設構築土を盛る際に、堀の旧壁が崩落するのを防ぐ目的で、構築されたものと考えられる。

堀c（第7図、図版1・2）南北方向に延びた堀b壁に、1号護岸施設を構築して北半を埋め戻し、堀の範囲が狭まる。確認できた堀の規模は長さ10.5m、幅4 mである。確認面からの深さは最深部で0.9m、標高7.00mまで確認でき、さらに南東へ向かって深くなる。堀の西壁が緩やかに立ち上がるのに対し、北壁の傾斜はやや急角度となっている。

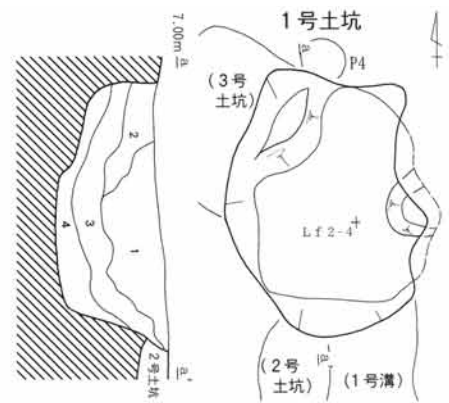
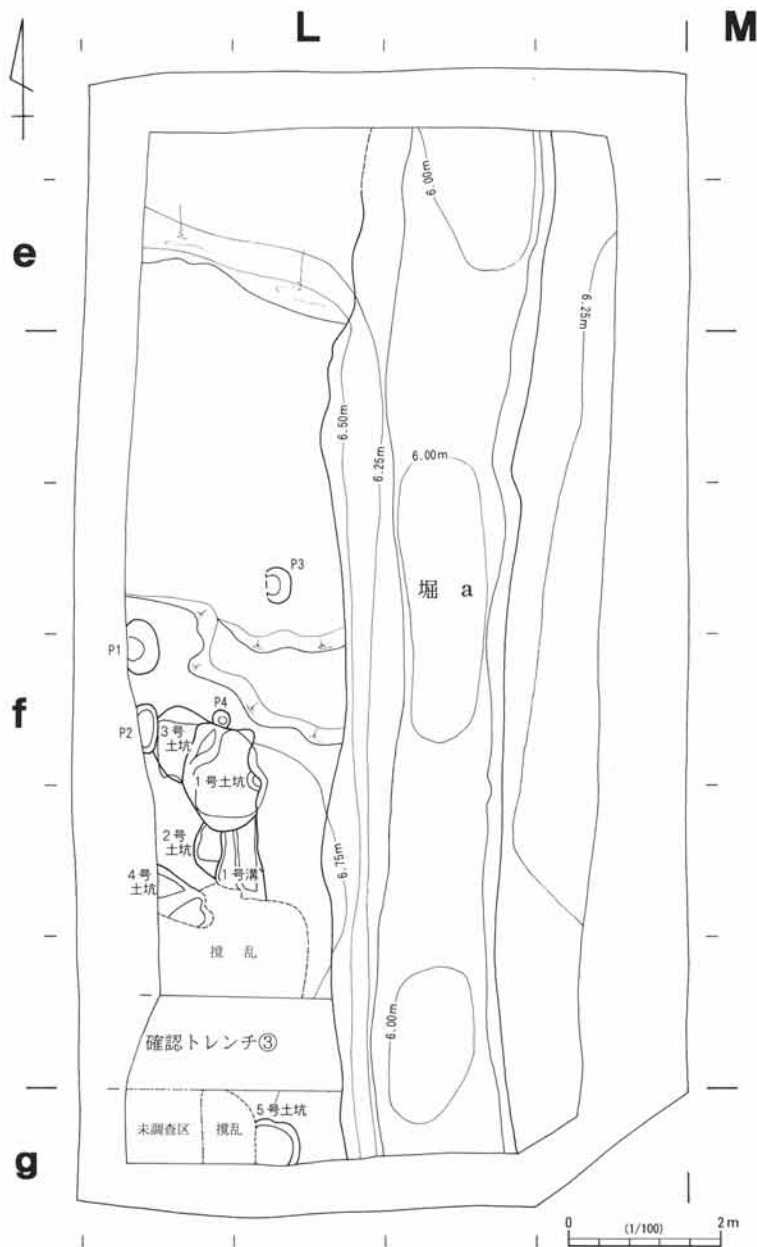
2号護岸施設（第7・8図、図版1・2） 木組C～F、杭列c～eで構成され、堀に対して直交する木組Cおよび杭列dを境として南北に大別できる。北側は木組Fを基礎とし、南側の基礎に先行して構築している。構築材は地山直上に埋置され、主軸方位はN - 3° - E、西側は調査区外に延びる。F₁は自然木を使用し、F₂は長さ3.5m、幅12cmの角材を、直交するF₃・F₄の角材と組ませている。また堀側の角材側面に長さ30～40cm、幅20cm、厚さ1 cmの板材を縦位に打ち込み、西側は90～110cm間隔で径8 cmの丸杭を打設している。F₅は幅20cm弱の角材でF₄に隣接する。角材周辺には10cm大の自然礫が集中して検出される。北側の地山が南側に比べ崩れやすい砂層であるためか、後述する南側の基礎とは、明らかに工法が異なる。杭列eは30cm間隔で径約8 cmの丸杭が打設される。その構築は、杭列a・bが構築される時期に遡る可能性もある。

南側の基礎は、平行した複数列の木組D・E、杭列cと、直交する杭列dによって構成される。主軸方位はN - 9° - Wでまとまる。角材を埋置し両側面に木杭を打ち並べる構造を基本とし、さらに板材などで補強している。木組Dは90cmの等間隔で列をなす。確認できた長さは約1 mで、調査区南側へ延びる。木組Eの南端部分と重複し木組Dが後続する。角材は使用されず、板材も薄いものが用いられている。木組Eは堀側の2列が主体となる。構築距離は7 mにおよぶ。長さ3.2～3.7mの角材を使用し、部分的に1 m強の板材で補強してある。木杭は60cm間隔で、径5 cm程の丸杭を角材の両側面に打設しているほか、堀側の木組E₃の東側面には、約1.2m間隔で径10cm、長さ1.5m以上の丸杭あるいは角杭が打設されている。同軸の杭列cは2列からなり、角材・板材が伴わないものの、配置や木組D₁が同列上に配されていることから、木組Eを意識して打設されたと想定される。木組D・Eに直交する杭列dは木組Eの北端に位置し、杭間隔は50cm、径10cm前後の丸杭を使用していた。

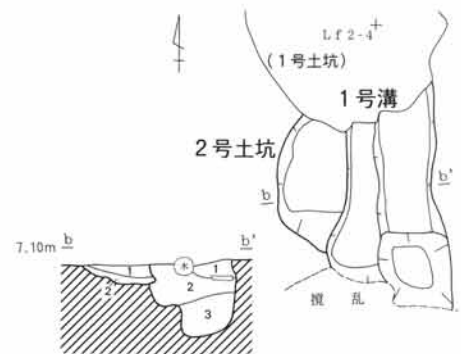
木組Cは北側基礎と南側基礎との境に配される。北側の護岸壁より南側の護岸壁が東に構築されることから生じるクランク部分北端の、補強を目的としたものと考えられる。木組F₂・F₄と重複し木組Cが後続して構築される。木杭の打設間隔は40～80cm、板材は80～100cmの短い材を使用し、自然木も含まれていた。

2号護岸施設の構築材は、建築部材としての加工痕がみられる角材が多く使用されており、横木固定用の木杭は太さや長さバラつきが認められた。

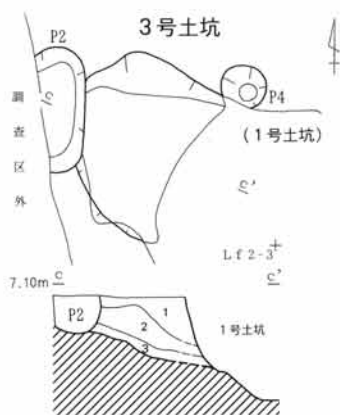
護岸構築土は9層からなり、多量の遺物が出土している。特に4層からの遺物量が突出する傾向がみられた。また、出土遺物の接合結果から、上層から下層にかけての接合関係が著しく、本遺構出土の遺物群は、意図的に廃棄される形で護岸を構築したものと考えられる。遺物の年代は18世紀後葉から19世紀中葉に比定される。



- 1号土坑**
- 1層 2.5Y4/2 暗灰黄色土 粘性強、しまり弱。シルトブロックを少量、炭化物粒を微量含む。
- 2層 2.5Y4/2 暗灰黄色土 粘性強、しまり弱。シルトブロックを多量含む。下部に有機物を多く含む。
- 3層 2.5Y4/2 暗灰黄色土 1層と近似し、上下の層境に有機物を多量に含む。
- 4層 5Y3/1 オリーブ黒色土 粘性強、しまり弱。



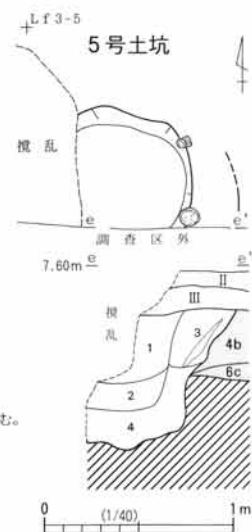
- 2号土坑**
- 1層 2.5Y6/2 黄灰色土 粘性・しまり強。シルト粒を多量含む。
- 2層 5Y3/1 オリーブ黒色土 粘性強、しまり弱。有機物片を多く含む。
- 1号溝**
- 1層 2.5Y3/1 黒褐色土 粘性強、しまり弱。
- 2層 5Y4/1 灰色暗灰色土 粘性強、しまり弱。青灰色のシルトブロックを多量、砂粒を少量含む。
- 3層 5Y3/1 黒褐色土 粘性強、しまり無し。瓦・木片等を多く含む。



- 3号土坑**
- 1層 7.5Y4/1 灰色土 粘性・しまり弱。青灰色シルトブロックを多量含む。
- 2層 7.5Y4/1 灰色土 粘性・しまり弱。シルトブロックを多量含む。
- 3層 5Y4/1 灰色土 粘性強、しまり弱。有機物片を少量含む。



- 4号土坑**
- 1層 2.5Y4/1 黄灰色土 粘性・しまり強。砂粒少量、シルト粒を微量含む。
- 5号土坑**
- 1層 2.5Y5/1 黄灰色土 粘性・しまり強。シルトブロックを多量含む。
- 2層 2.5Y5/1 黄灰色土 粘性・しまり強。シルトブロックを少量含む。
- 3層 2.5Y4/1 黄灰色土 粘性 しまり強。砂粒を少量含む。
- 4層 2.5Y5/1 黄灰色土 粘性強、しまり弱。シルト粒を少量含む。



第9図 堀・1～5号土坑・溝

堀b（第7図，図版1・2） 2号護岸施設の構築によって，堀aの西岸壁が作り替えられる。壁は調査区中央でクランク状に屈曲し，これよりも南側の堀の落ち込み際にあたる上端が，従来（堀a）よりも約1m東へ移動する。一方，北側の堀の上端は，西に約2m移動するが，傾斜が非常に緩やかである。これは，1号護岸施設構築による攪乱の影響と考えられる。確認した堀の規模は北側で幅6m，南側で4m，確認面からの深さは最深部で1mである。

堀a（第9図，図版1・2） 調査区東半を占める。確認した幅は約5mで，確認面からの深さは最深部で80cmである。堀の西端部分では上端幅約2.6m，底面幅約1.7mの溝が付帯する。底面は全体的に平らではあるが，地山が砂層であり，底面レベルでは湧水していることから，若干の凹凸がみられる。溝埋土に相当する9～12層は，現場段階で堀a機能時の堆積と考えていたが，整理作業段階で直上の3～8層との出土遺物の接合関係が著しく，特に南半での堀壁面の形態が整っていることなどから，2号護岸施設構築に先行して浚渫作業を行った痕跡の可能性も考えられる。堀の上端では，ほぼ30cm間隔で杭列a・bが打設される。杭は径3～5cm，確認面からの高さは約6～15cmである。主軸方位はN - 2° - Eだが，北側に位置する杭列aは主軸が若干東へふれ，杭間隔も一定でなくなる。杭列の西には幅50cmの範囲で，帯状に瓦小片が敷かれていた。瓦は施釉された赤瓦が少量含まれるが，主体は黒瓦である。

2 土坑・溝・ピット

1号土坑（第9図，図版2） 堀西側の遺構集中部，Lfグリッドに位置する。平面形状は不整形で規模は長軸 約145cm，短軸115cm，確認面からの深さは最深部で65cmである。多くの遺構と重複しており，新旧関係は2・3号土坑，1号溝より新しく，4号ピットよりも古い。壁の立ち上がりは急で，西側ではオーバーハングする。東壁には小規模なピットのような掘り込みがあり，別遺構の可能性はあるが埋土は共通であった。土層は4層からなり暗灰黄色土が主体となる。19世紀代の遺物が出土している。

2号土坑（第9図，図版2） 1号土坑の南側に位置する。平面形状は不整形，規模は長軸約70cm，短軸40cm弱，確認面からの深さは最深部で10cmである。1号土坑により北側を欠き，1号溝よりも新しい。

3号土坑（第9図，図版2） 1号土坑の西側に位置する。規模は長軸100cm，短軸70cm，確認面からの深さは最深部で約40cmである。重複する1号土坑，2号ピットより古い。平面形状は不整形で，埋土は灰色土を主体とする。土坑底面は平らだが西側に向かって傾斜する。遺物は19世紀代で，2号ピットと接合するものを含む。

4号土坑（第9図，図版2） 土坑集中部の南端に位置する。規模は長軸80cm，短軸50cm，確認面からの深さは最深部で20cmだが，西側は調査区外に延び，東側と遺構中心部に攪乱が入るため詳細は不明である。出土遺物は少量で18世紀代に収まる。

5号土坑（第9図） 調査区北端に位置する。南側は調査区外に延び，西側は現代の攪乱に壊される。確認できた規模は長軸70cm，短軸65cm，確認面からの深さは最深部で70cmである。埋土は4層からなり，黄灰色土が主体となる。2号護岸施設構築土上面から掘り込まれる。構築時期は近代である。

1号溝（第9図，図版2） 1号土坑の南側に位置する。北西側は1・2号土坑に，南側は攪乱によって壊される。規模は長さ110cm，幅約65cm，確認面からの深さは最深部で40cm程である。西壁中段に溝の主軸と平行する平坦面をもち，南東部分はピット状の掘り込みをもつ。埋土は3層で最下層から遺物が出土する。

ピット（第9図） 本調査区内では4基のピットを検出した。ピットの規模は上端径20～70cm，確認面からの深さは16～26cmと浅く，底面標高は6.8m前後である。

第Ⅳ章 遺 物

1 遺物の概要

本調査で出土した遺物は、堀の西岸に構築された護岸施設構築材を除き、総点数約5000点にのぼり、調査面積が狭いものの、多くの遺物が出土した。その8割以上は2号護岸施設からの出土遺物で、陶磁器が大半を占める。遺物の推定年代は18世紀後葉から19世紀中葉に比定され、遺存率が高く、多様な器種が含まれていた。

本報告での陶磁器・土器の分類および編年観は、『シンポジウム江戸出土陶磁器・土器の諸問題』Ⅰ・Ⅱ（江戸陶磁土器研究グループ1992・1996）、『陶磁器・土器分類・計算基準（豊島区遺跡調査会）』（水本1998）、『九州陶磁の編年』（九州近世陶磁学会2000）を参考とした。

また時間の制約等により遺物の掲載量が少ないことから、可能な範囲での遺物の数量的な提示を行うため、文章中で破片数を掲載した。遺物の数量データの掲載は、これまで様々な形で試みられているところだが、今回は破片数の提示に留まった。掲載遺物の詳細は観察表を参照されたい。なお、玩具・木製品・漆製品・金属製品・銭貨・石製品・硝子製品・瓦および近世以前の遺物については別項をたてている。

2 護岸施設出土の陶磁器・土器

1号護岸施設 陶磁器・土器の総出土点数は93点である。磁器は40点出土している。肥前産の厚手碗，小広東碗，小丸碗，皿，変形小皿，蛇の目凹形高台の蕎麦猪口，瀬戸美濃産系の端反碗，小杯，変形型押皿，コバルト染付の急須，徳利，仏飯碗がある。陶器は48点が出土した。変形小皿，刷毛目鉢，播鉢，土鍋，行平鍋，土瓶，壺甕類などがある。生産地は肥前，瀬戸美濃のものもあるが，地方窯と思われる製品が多く含まれている。土器は4点でサナ，角型涼炉などがある。また，明治10年鑄造の一銭硬貨が出土している。1号護岸施設は2号護岸施設に後続し，1870年代以降の製品や銭貨などから，構築年代は近代と考えられるが，遺物については18世紀後半～19世紀初頭のものが多く出土している。

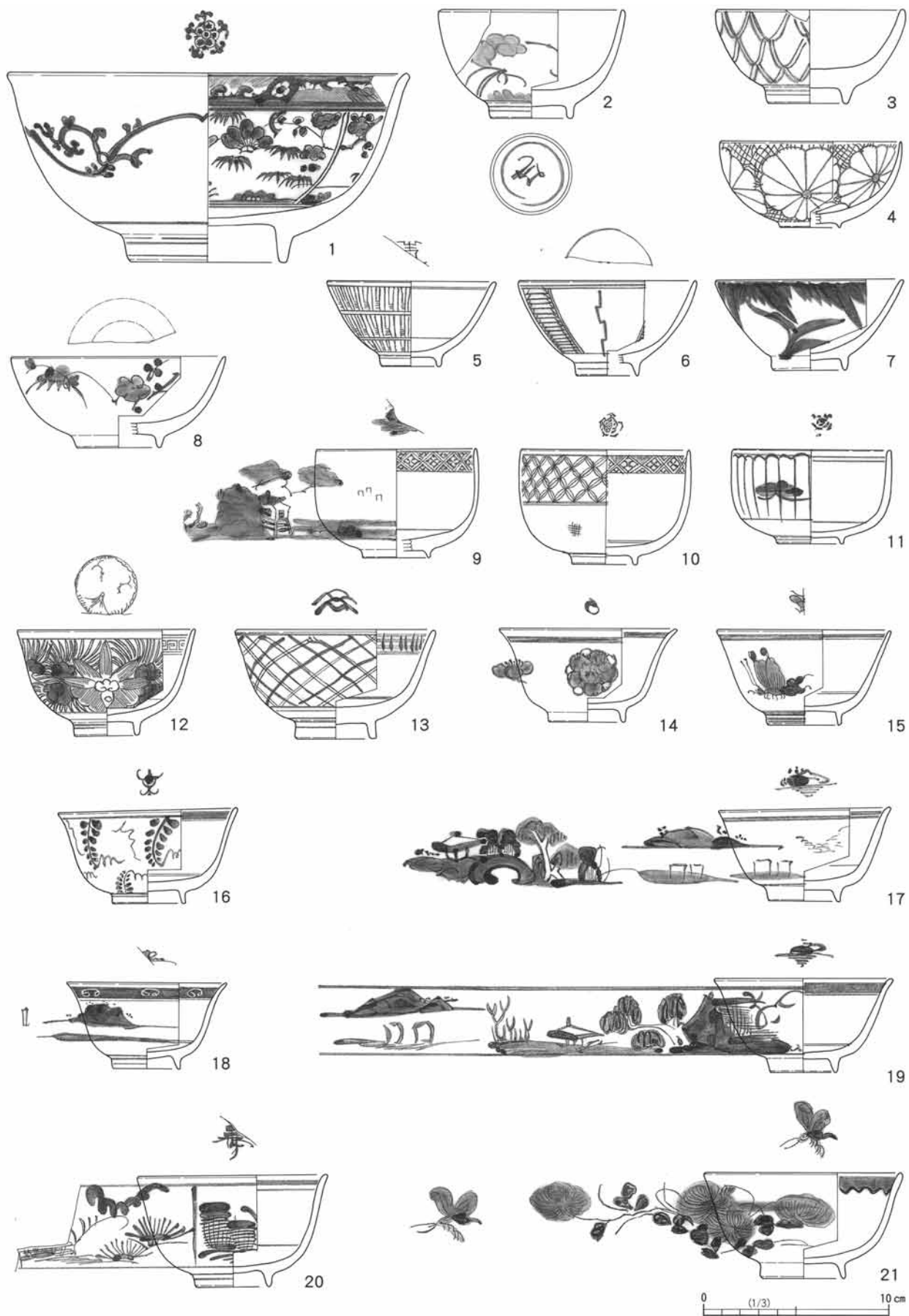
2号護岸施設 出土した陶磁器・土器の総点数は3789点である。

磁 器（第10～13図，表1，図版4～6） 総破片数1336点が出土している。

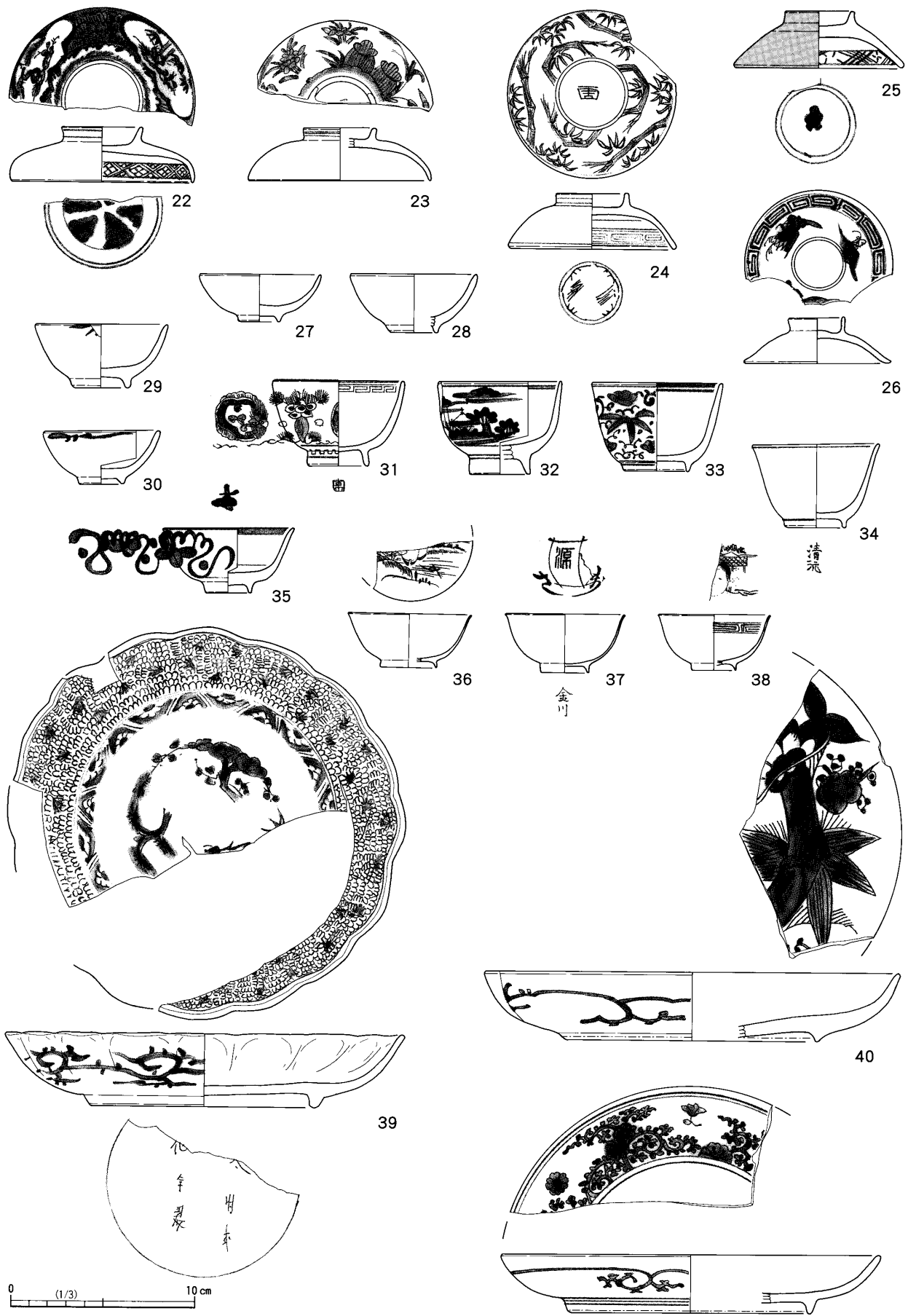
碗 磁器の主体を占める。蓋を含む出土総点数は824点である。丸碗，厚手碗（2・3），半球碗（4），朝顔碗，筒茶碗，小広東碗（5～7），広東碗，小丸碗（9～11），端反碗（12～21）などが出土している。梅樹文，二重網目文が施された厚手碗，小広東碗，小丸碗が多く，瀬戸美濃産の端反碗が次ぎ，広東碗は非常に少ない。碗蓋は丸碗蓋・腰張碗蓋・朝顔形碗蓋（25）・端反碗蓋（24・26）が出土している。小碗・坏類は118点が出土し，口径約7cm以下の丸碗（27～30），湯呑み碗（31～33），端反碗（34・35），薄手酒杯（36～38）がある。

皿 出土量が少なく小片が多い。特に大皿が少なく，主体は口径11～13cmの中皿である。見込みに蛇の目釉剥ぎされた粗雑な皿が目立つ。高台径がやや狭いものもみられるが，高台径の広い18世紀代以降のものが主体を占める。小皿では糸切細工を含む型打ちの小皿が出土している。

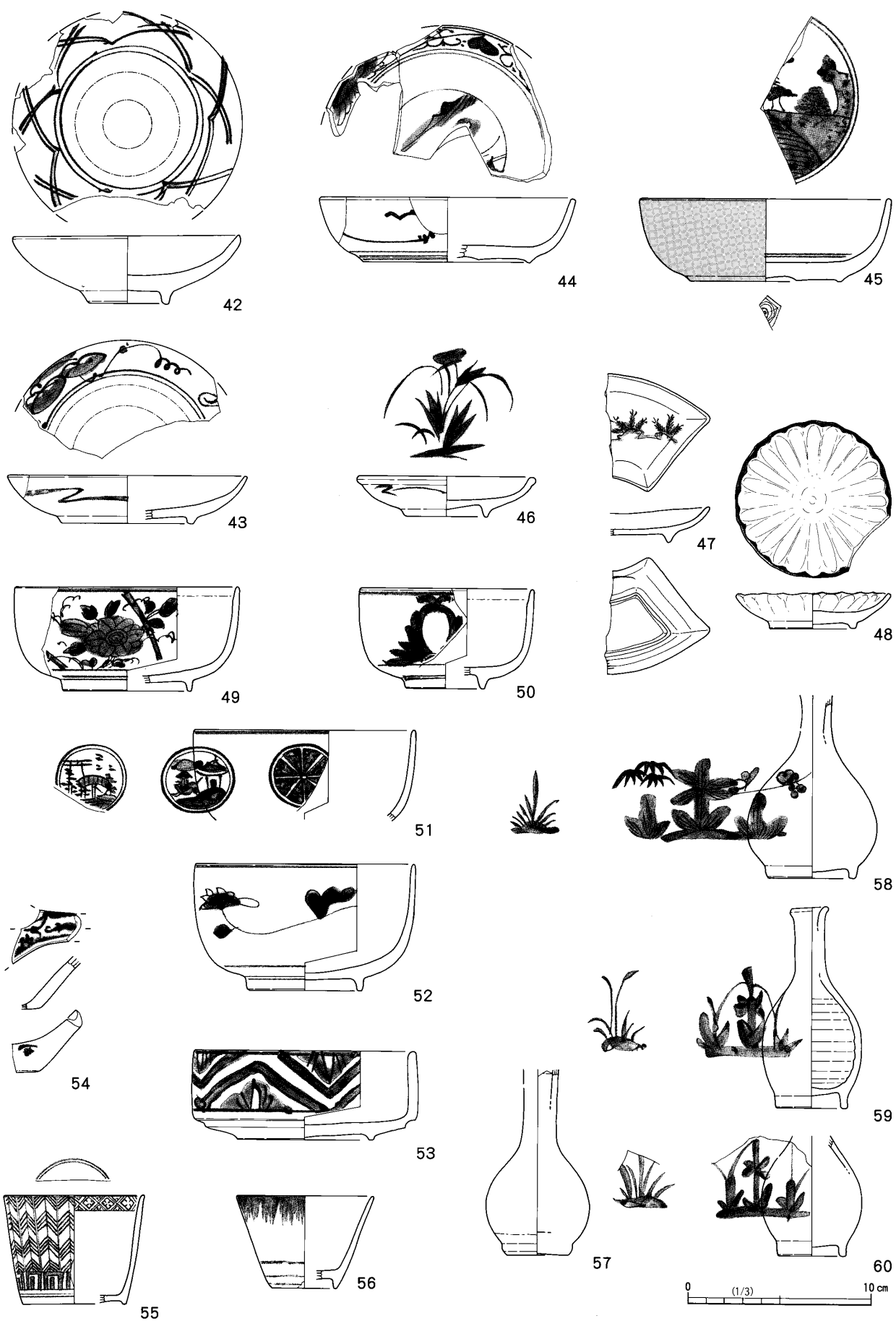
その他 鉢，蓋物が一定量みられ，蕎麦猪口では桶底と蛇の目凹形高台がある。徳利は松竹梅文が施された御神酒徳利の出土量が多く，爛徳利も少量出土している。ほかに段重・蓮華・急須・香炉・仏飯碗・香油壺がある。



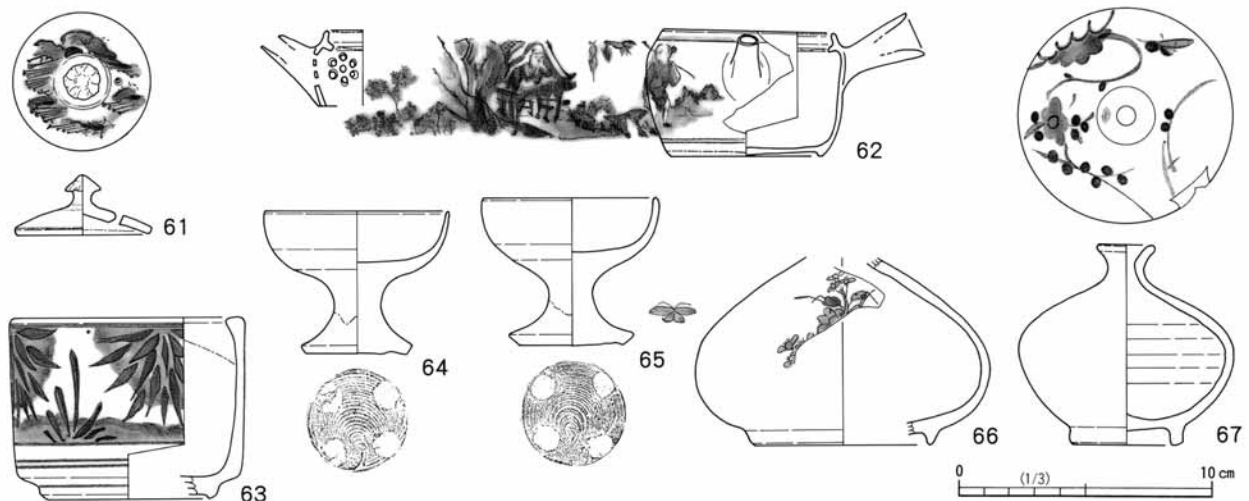
第10図 2号護岸施設の出土遺物 磁器（1）



第11図 2号護岸施設の出土遺物 磁器(2)



第12図 2号護岸施設の出土遺物 磁器 (3)



第13図 2号護岸施設の出土遺物 磁器（4）

陶 器（第14～17図，表1，図版6～8・10）

総破片数は2088点が出土している。器種は多岐にわたり，地方窯の製品と考えられる製品が多く出土している。

碗 456点が出土している。口径9cm前後の碗が大半を占め，生産地では京都・信楽が多い。小杉茶碗（71～79）は呉須・鉄釉を用いた高台径が小さい18世紀後葉のものから，若松文が簡略化された19世紀代中葉のものを含む40点が出土し，灰釉端反碗（80～86）および口縁部に長石釉または緑釉が施されたもの（87～89）が102点，灰釉または透明釉の碗破片139点が出土している。また，色絵・鉄釉で「竹笹文」を描いた半球碗がある。他の生産地では肥前・唐津の刷毛目碗，梅花枝文の端反碗（90・91），萩の藁灰釉開口碗（94），ピラ掛け碗などが少量だが出土している。墨書を有する碗は11点で，判読できるものは用途あるいは氏名を表すものと思われる。

皿・鉢 皿・鉢は小片が多く，出土量も少量である。肥前・唐津産があるほかは地方窯の製品とみられる。鉢では三島手鉢，刷毛目鉢があり，口径30cm程の法量が推定される。

徳利 115点が出土している。ほとんどが薄手の爛徳利で，特に口縁が鷹口状の透明釉に鉄絵を描く，二合徳利が多く出土する。ほかに鉄釉徳利，鉄釉で体部中央が部分的に窪むものや，灰釉徳利，鶴首徳利がある。飲酒に関連する遺物として磁器の薄手酒坏が共存している。

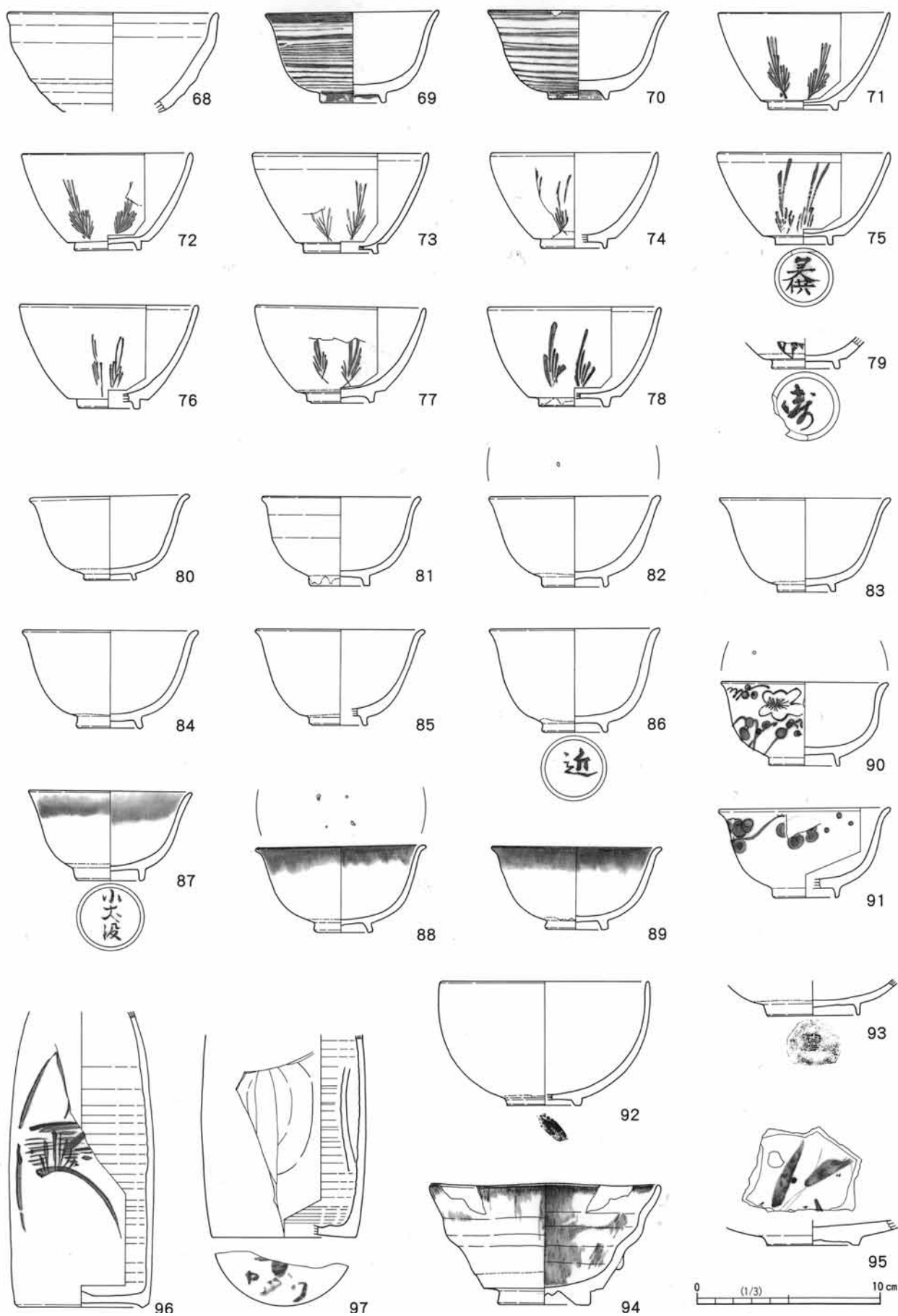
土 鍋 212点が出土した。法量は推定口径11～21cmのものがあるが，12cm前後と18～20cmのものが多く出土している。見込みに5箇所目の痕が残るものが多い。より新しい時期とされる器高の低いものも含まれる。

卸 皿 2点が出土している。104は卸し目が大きく，口縁部から内面にかけて鉄釉が施される。

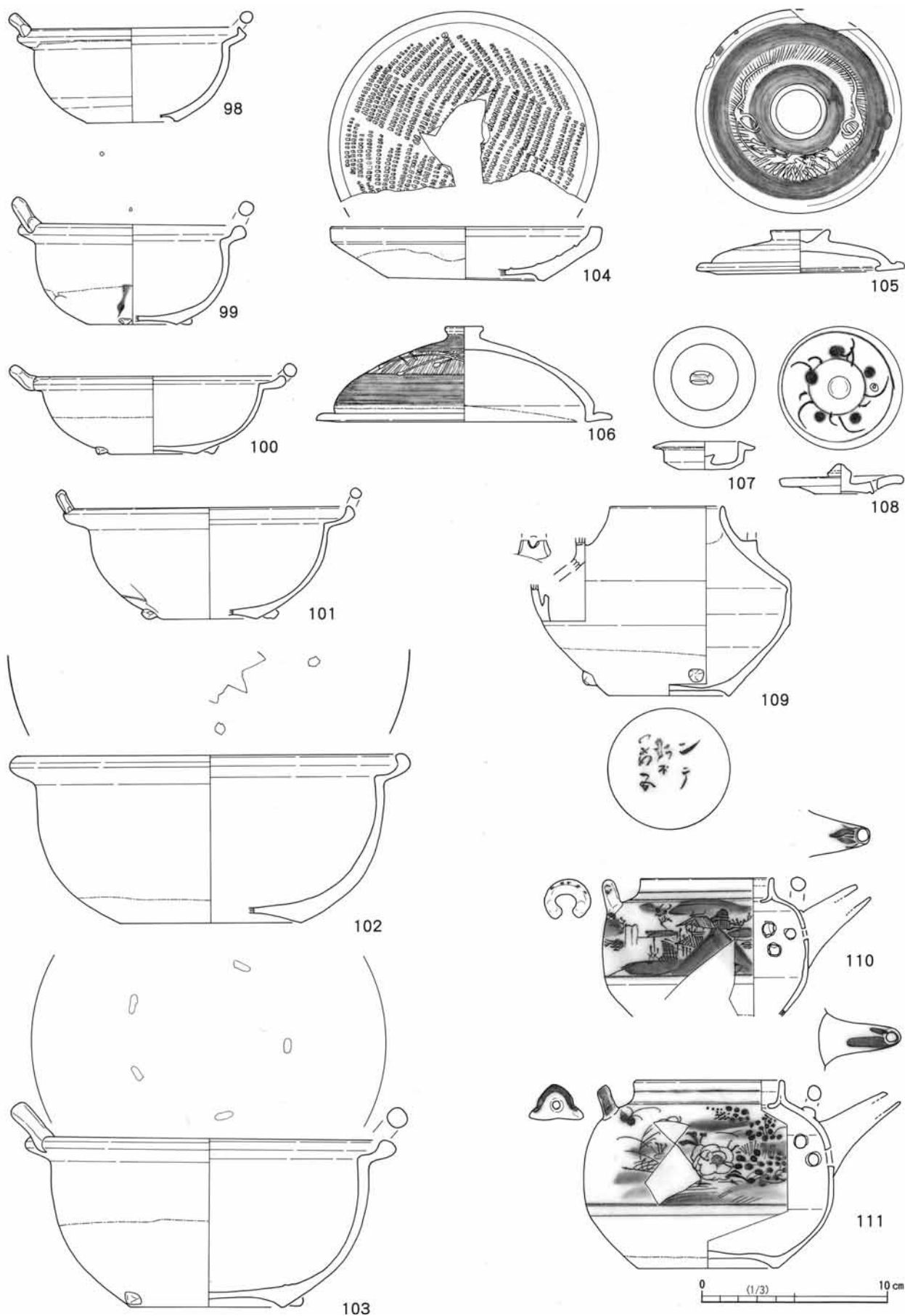
行平鍋 蓋は13点出土している。摘みが付くもの（106）と，高台状のもの（105）とがある。鍋の身は64点出土している。法量は口径11cm前後と16cm前後のものに分かれる。

土 瓶 蓋は32点が出土している。摘みが受け部より低いタイプ（107）あるいは受け部より底面が低いタイプ（108）が全体の2割，時期的に新しいとされる山形を呈するものが8割程度出土している。土瓶の身は282点が出土している。18世紀代後半のS字状の注口を持つものも含まれるが，直線的な鉄砲口の注口が多く出土している。三彩土瓶（110・111），うのふ釉土瓶，白土鉄絵染付け，鉄釉しのぎ土瓶，灰釉，イチチンを用いた土瓶（112）がみられ，19世紀中葉頃のものが多い。底部にはススが付着したものも多くみられる。

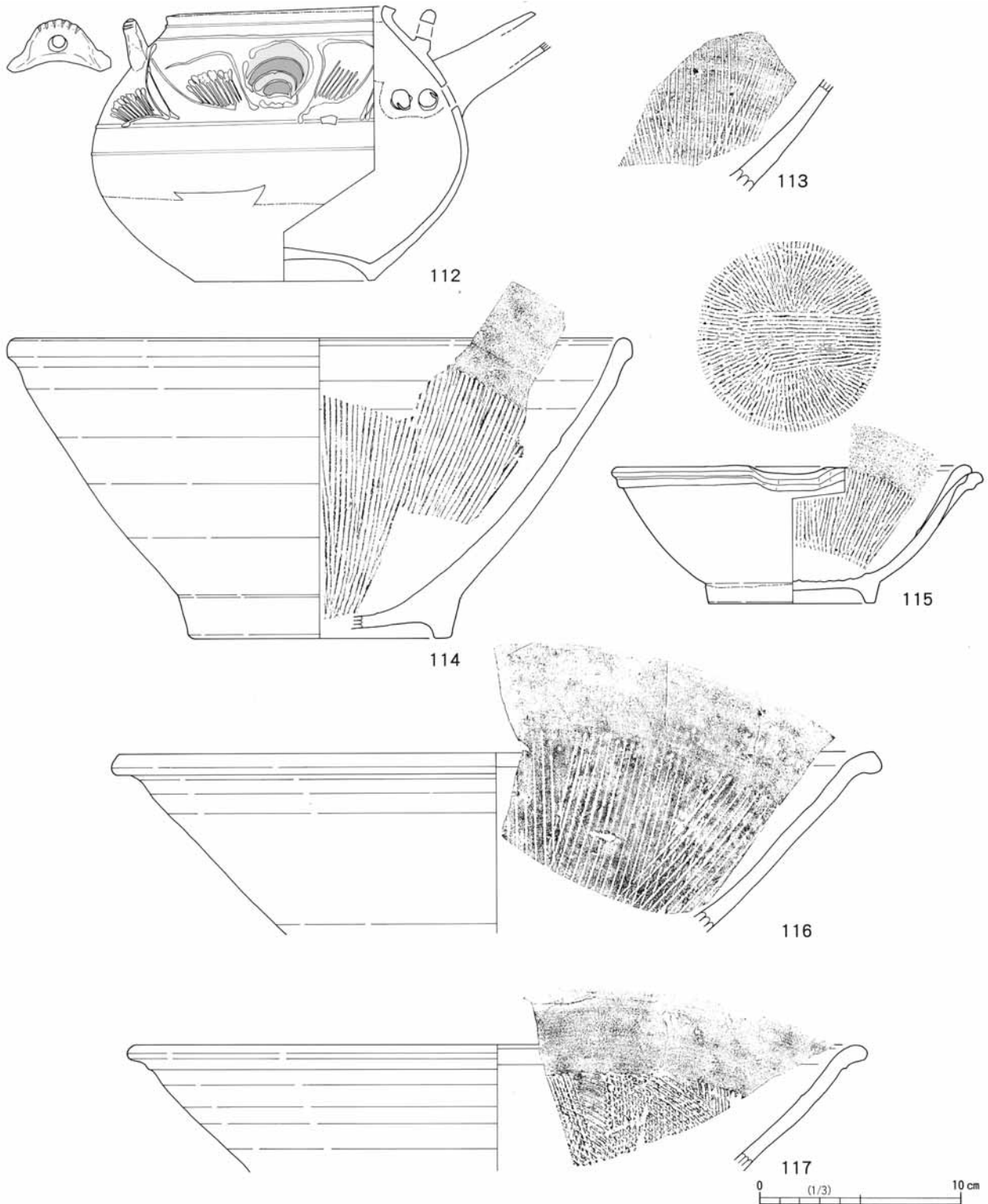
急 須 萬古またはその系譜に連なる19世紀中葉の製品がある。他に把手や受け部に趣向を凝らした装飾が施



第14図 2号護岸施設の出土遺物 陶器 (1)



第15図 2号護岸施設の出土遺物 陶器(2)

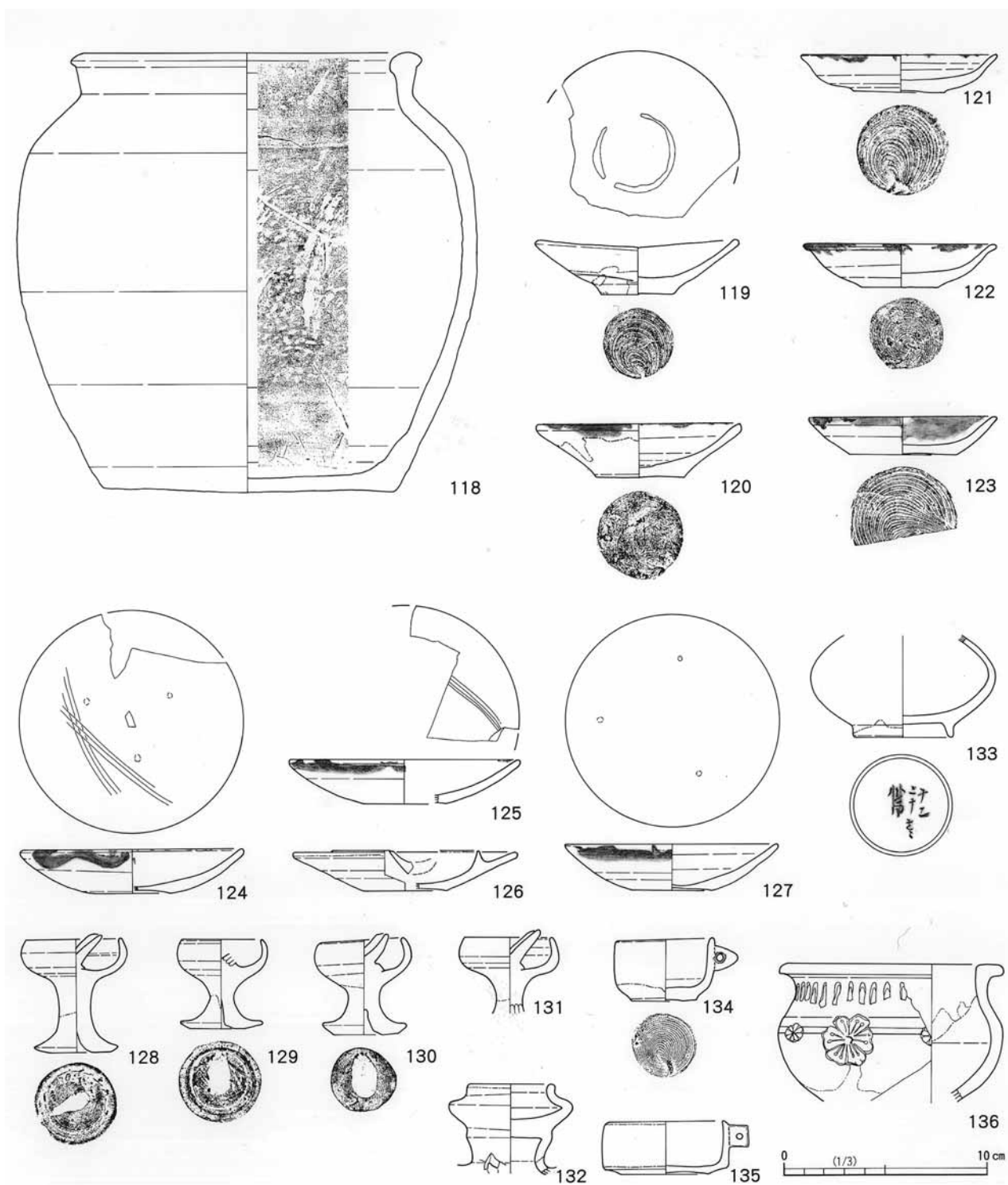


第16図 2号護岸施設の出土遺物 陶器（3）

されているものがあるが、生産地・製作年代は不明である。

擂鉢 108点が出土している。産地は肥前の製品が多くを占めるほか、瀬戸美濃あるいは地方窯の鉄釉が全体に施された製品が一定量含まれる。また、少量だが信楽産と思われるものがある。遺存度の高いものでは、推定口径30～40cm程度のものが中心となる。

壺甕類 貯蔵具類は一定量が出土しているが、小片が多く把握が困難であった。地方窯と思われるものが多い。



第17図 2号護岸施設の出土遺物 陶器（4）

灯火具 灯火具全体で92点が出土している。119～123は鉄釉が施された灯火皿で産地不明のものである。119・120は外面体部下半露胎で底径が小さい。他に3点が出土しているが、見込みに輪トチン痕が残るものが多い、底面の糸切りは右回転である。やや粗雑な印象を受ける。121～123は内外面全体に施釉され、底径が大きく口縁部が端反る。底面は左回転の糸切り痕が残るものが多い。32点が出土している。灯火受付皿は7点が出土している。体部下半で強いケズリ調整が施された稜をもち、油溝がV字状または半月状に切り込まれているものと、灰色の胎土で内面に鉄釉が施されるものがある。124～127は信楽産の灯火具で、3条の櫛書きや目痕が残る灯火

皿は、20点が出土している。126は灯火受付皿で3点が出土している。

乗燭（128～132）は台付きのものが25点出土している。灯芯立て部分が上部の碗中央に斜めに貼り付けられる。内外面に鉄釉が施され脚部は露胎である。脚部底面は右回転の糸切りで面取りされる。また底面中央には固定用の釘穴のような窪みがある。福島県会津本郷の製品と考えられるものが含まれる。132は脚底部も皿状になるタイプと想定される。

その他 水注、香油壺、花生、鳥の餌入れ、香炉の他、植木鉢、尿瓶などが出土している。

土 器（第18・19図、表1、図版8）

総破片数は器種不明遺物を含めて365点が出土している。器種はかわらけ、焙烙、鉢、火鉢・焜炉類がある。

かわらけ 1点（137）が出土している。精製かわらけで、推定口径は12cmである。ススの付着はみられない。

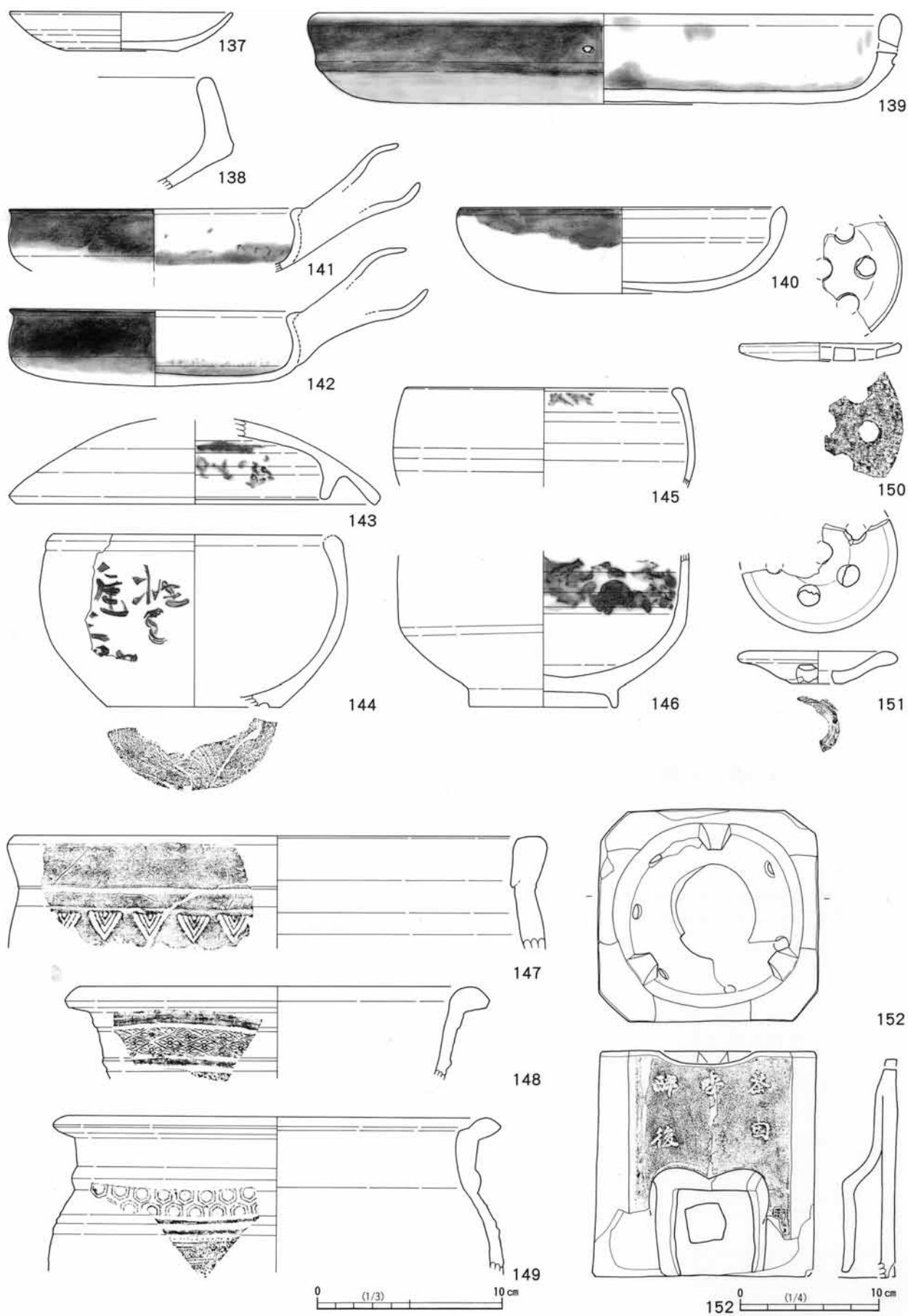
焙 烙 総破片数89点が出土しており、そのうち瓦質土器が3点含まれる。遺存率の高いものが多い。復元口径が30cm以上で、底面に砂目がみられるものと、口径が20cm未満で、把手が付くものとに大別でき、生産地（窯元）の違いによるもの以上に、時期差が起因していると考えられる。

前者は軟質の土師質土器で、体部および口縁部にかけて直立する形状で、体部と底部の境に稜をもつもの（138）が多い。体部側面に一对で穿孔がなされる製品（139）もみられる。また、体部から口縁部までの長さが3cm未満と短く、底部がより丸みを帯びると推測される小片も出土している。後者は、硬質瓦質土器と硬質土師質土器とに細分される。瓦質土器（140）は土師質のものに比べ器高が高く、底部から体部にかけての立ち上がりに丸みをおびる。出土数が少なく把手が付くものかは不明である。土師質土器（141・142）は器厚が薄く、口縁部が強く外反する。本地点出土の焙烙の大半を占める。口径は16～17cmを主体とし、把手部分を含めて規格性が存在する。底部にはケズリ調整が施される。焙烙に付着するススは、外面では体部全体に、内面では底面全体に薄く、あるいは細かな粒状の炭化物が斑らに付くとともに、体部にかけての境目周辺にやや厚く付着する。

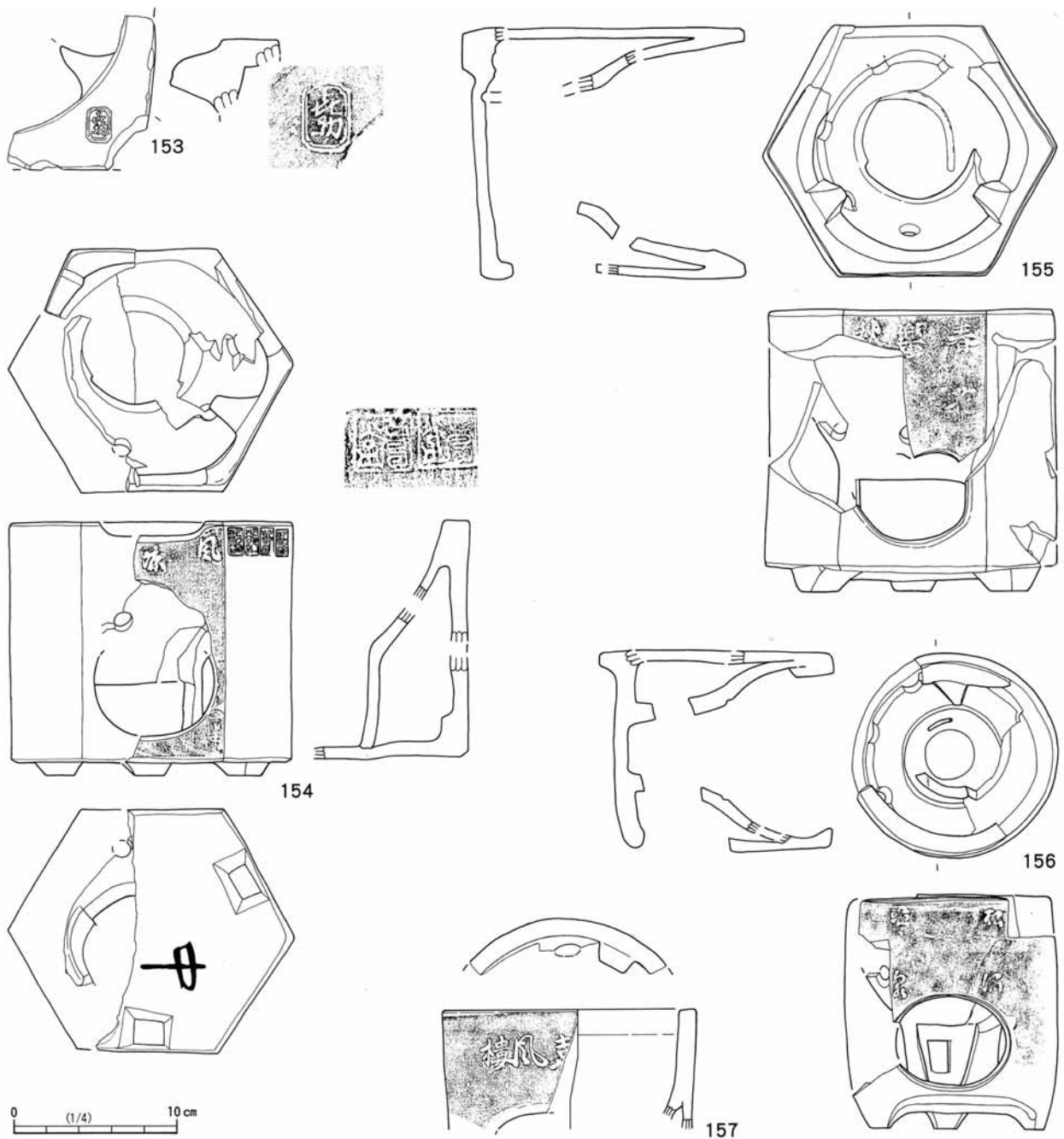
鉢 143および144～146は口径14～15cmの蓋と身である。破片数25点が出土している。蓋は摘みをもたない被せるタイプで、最大径に比べて受け部径が小さい。外面天井部はケズリによる調整がみられ板状圧痕が残る。内面天井部にはススが付着する。身は口縁部が内湾し端部は玉縁状になる。体部下半から底部にかけてケズリ調整が施され、底部は平高台と高台を持つものがある。観察ができた底面の切り離しは、糸切りで右回転である。ススは内面の体部上半で帯状に付着し、火鉢と類似した使用痕を残すものがみられる。小型火鉢あるいは火消し壺等の用途が考えられる。144の外面には墨書が残るが、判読はできなかった。

火鉢・焜炉類 後述のサナ・涼炉を除き、破片数118点が出土している。瓦質と土師質があり、胎土は多様である。瓦質の製品では回転印刻や、沈線や凸帯が巡り文様を区画するものがみられる。サナは44点が出土している。復元径8～10cmのものが主体となる。型打ち成形で扁平な円盤状のもの（150）とロクロ成形の皿状のものと（151）があり、前者の胎土は橙色系で軟質である。底面には布目痕が残る。後者の胎土は白色系で硬質なものも多く、底面には右回転の糸切り痕が残るものがある。

涼炉（152～157）は、個体11点、破片56点が出土している。煎茶道で用いられる炉で、平面形状は円形、方形、六角形のものがあり、底面に3足を有する。側面正面の窓は円形、二山形のものがある。外面にはケズリ・ミガキ調整が施される。幅は16～18cm、高さは16～17cmのものが中心となる。体部は二重構造となっており、内面は円筒形で通風孔が開けられ、上部に漏斗状の多孔皿をもち、上面はボーフラ等をかける3単位の突起状の支えが貼り付けられる。外面の加飾には「茶・因・呼・酔・後」、「風・涼・・」、「春花楽秋□」、「松河(カ)□泉」、「・・喜風樓」などの陰刻、「喜助」、「一峯」などの製作者と思われる印が押されたものがある。



第18図 2号護岸施設の出土遺物 土器(1)



第19図 2号護岸施設の出土遺物 土器（2）

3 土坑・溝・ピット出土の遺物

概要 出土した遺物は少量で小片が多く、出土遺物の傾向や遺構の性格を見出すことはできない。遺物の年代は18世紀後葉～19世紀代中葉で、2号護岸施設の構築土層から出土した遺物と、時期差がほとんどない。また、土坑と2号護岸施設構築土、土坑とピットとに出土遺物の接合関係があることから、2号護岸施設構築時に廃絶した可能性が高い遺構がある。

1号土坑（第20・24・25図，表1・3・5，図版8・10） 磁器6点，陶器15点，土器2点，瓦1点，木製品1点，漆器2点，金属製品5点が出土している。磁器は肥前産の菊花文の半球碗や，コンニャク印判を使用した

厚手碗が、陶器は小杉碗、灯火皿（158）、土瓶、甕、香炉、爛徳利、土鍋、飯事道具の土鍋が出土している。土器・瓦は小片である。金属製品は簪（207）、頭巻釘（230・234）が出土している。

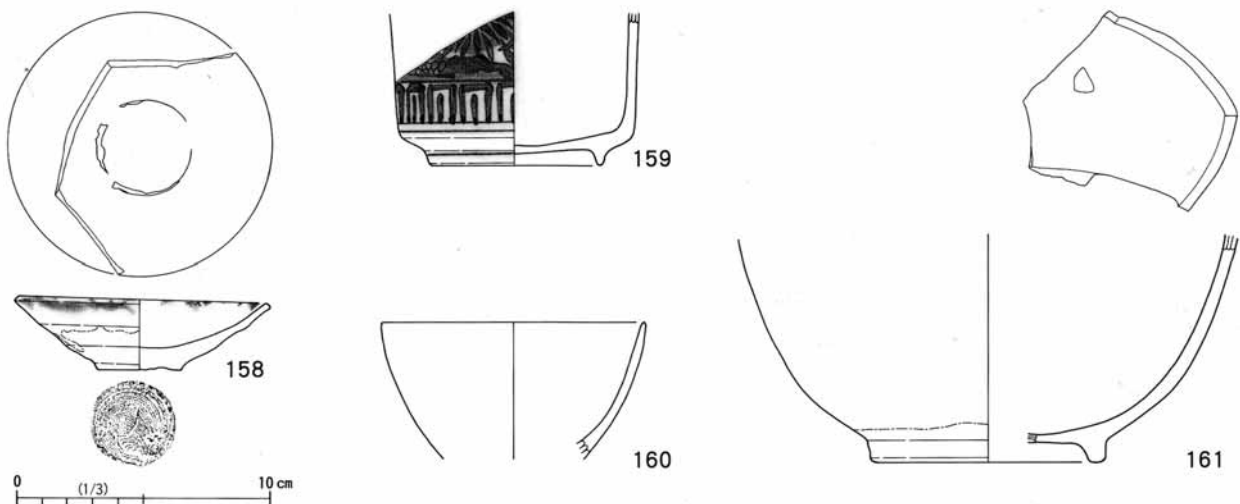
2号土坑 磁器1点、土器1点が出土しているが、いずれも小片で詳細不明である。

3号土坑（第20図、表1・2、図版8） 磁器4点、陶器2点、土製品1点、木製品1点が出土している。159は竹林文、蓮弁文が施された蓋物の身、160は小杉茶碗であるが、遺存部分に「若松文」は見られない。他にコンニャク印判で文様を施した碗の小片が出土している。土製品は玩具で大黒（166）をモチーフとする。

4号土坑（第24・25図、表5、図版10）磁器は二重網目の厚手碗1点、陶器は小杉茶碗1点、土鍋1点、金属製品5点が出土している。金属製品は煙管の吸口（205）、金具（237）、頭巻釘（224）である。

5号土坑（第20図、表1） 磁器5点、陶器6点、瓦1点、金属製品1点が出土している。磁器は肥前産の口鏝を施した型押し小皿、鉢、陶器は白泥の土瓶、瀬戸美濃産挿鉢、捏鉢（161）等が出土している。

1号溝（第22図、表3、図版9） 磁器3点、陶器3点、木製品4点、漆器1点が出土している。磁器は厚手碗、段重、陶器は挿鉢、土鍋、土瓶の蓋がある。



第20図 土坑の出土遺物

表1 出土遺物観察表 陶磁器・土器

2号護岸施設

掲載 番号	土層	グリッド	種類	器種	法 量 (cm)			技 法 ・ 文 様	遺存	生産地	挿図	図版
					口径	底径	器高					
1	4 b層 6層 6層	Lf5-3 Lf4-3・4 Lg2-1	磁器	鉢	(21.4)	8.4	10.2	ロクロ成形、染付、豊付無軸、内面「区画文」、口縁部「波文」 見込み手描き五弁文、外面「如意頭唐草文」、漆継ぎ痕あり	1/2	肥前	10	4
2	9層	Lf3-4	磁器	厚手碗	(9.9)	(4.3)	5.8	ロクロ成形、染付、豊付無軸、外面「梅樹文」、高台底裏銘あり	1/2以下	肥前		
3	6層	Lf5-2	磁器	厚手碗	10.0	4.2	5.0	ロクロ成形、染付、豊付無軸、外面「二重網目文」	2/3	肥前		
4	6層	Lf4-4	磁器	半球碗	(9.7)	(3.2)	4.6	ロクロ成形、染付、豊付無軸、内外面「氷裂菊花文」	1/2	肥前		
5	6層	Lg4-1	磁器	小広東碗	(9.9)	(3.1)	4.6	ロクロ成形、染付、豊付無軸、見込み「寿字文」、外面「暦文」	1/2	肥前		
6	9層	Lf4-3	磁器	小広東碗	(9.4)	(3.3)	5.2	ロクロ成形、染付、豊付無軸、見込み文様あり、外面連続文3単位	1/2以下	肥前		
7	4 b層 9層	Lf4-3 Lf4-2	磁器	小広東碗	10.0	3.8	4.9	ロクロ成形、染付、豊付無軸、外面「雨降り文」、「草花文」	ほぼ完形			
8	4 b層	Lf4-5	磁器	丸碗	(11.4)	4.4	4.9	ロクロ成形、染付、豊付無軸、見込み蛇の目軸ハギ、外面「梅花文」	1/2以下			
9	6層	Lf4-5	磁器	小丸碗	(8.4)	(3.5)	5.8	ロクロ成形、染付、豊付無軸、内面口縁部「四方樺文」 見込みに「岩文」、外面「山水文」	1/2以下	肥前		

掲載 番号	土 層	グリッド	種類	器 種	法 量 (cm)			技 法 ・ 文 様	遺存	生産地	挿図	図版
					口径	底径	器高					
10	3層 4 b層	Lf4-4 Lf4-4	磁器	小丸碗	9.0	3.4	6.2	ロクロ成形、染付、墨付無軸、内面口縁部「四方樺文」 見込み「五弁花」、外面「七宝つなぎと飛餅」	2/3以上	肥前	10	4
11	6層	Lf3-3	磁器	小丸碗	(8.3)	3.5	5.1	ロクロ成形、染付、墨付無軸、見込み文様あり、外面「虫籠文」	1/2以上	肥前		
12	4 b層	Lf4-3	磁器	端反碗	(9.4)	3.4	6.7	内面口縁部「雷文」、見込み「松竹梅環」、外面「唐花文」	1/2以上	肥前		
13	4 b層 8層	Lf4-4 Lf2-2	磁器	端反碗	10.4	4.2	5.9	ロクロ成形、染付、墨付無軸、見込み文様あり 内面口縁部「連続文」、外面「斜格子文」	2/3以上	肥前		
14	4 b層	Lf3-3	磁器	端反碗	(9.5)	4.1	5.0	ロクロ成形、染付、墨付無軸、見込み「宝珠文」、外面「花文」	1/2	瀬戸・美濃		
15	2層 6層	Lf5-1 Lf3-2	磁器	端反碗	(9.2)	(3.8)	5.1	ロクロ成形、染付、墨付無軸、見込み「花文」、外面「蝶文」	1/2	瀬戸・美濃		
16	6層	Lg4-2	磁器	端反碗	9.4	3.9	5.1	ロクロ成形、染付、墨付無軸、見込み文様あり、外面「藤文」	ほぼ完形	瀬戸・美濃		
17	4 b層	Lf3-3	磁器	端反碗	9.1	3.8	5.1	ロクロ成形、染付、墨付無軸、見込み「岩文」、外面「山水文」	ほぼ完形	瀬戸・美濃		
18	4 b層	Lf4-5	磁器	端反碗	(8.5)	(3.6)	4.6	ロクロ成形、染付、墨付無軸、見込み「岩文」 内外面口縁部墨弾まで「如意頭文」、外面「山水文」	1/2	瀬戸・美濃		
19	4 b層 6層	Lf3-4 Lf4-4	磁器	端反碗	9.5	3.6	5.0	ロクロ成形、染付、墨付無軸、見込み「岩文」、外面「山水文」	ほぼ完形	瀬戸・美濃		
20	4 b層	Lf4-4	磁器	端反碗	(10.1)	(3.9)	6.0	ロクロ成形、染付、墨付無軸、見込み「舟文」、外面「山水文」	1/2	瀬戸・美濃	11	5
21	4 b層	Lf5-2	磁器	端反碗	10.5	4.2	5.7	ロクロ成形、染付、墨付無軸、内面口縁部「連続文」、見込み「蝶文」 外面「草花文・蝶文」、硝子焼き継ぎ痕あり	完形	瀬戸・美濃		
22	4 b層	Lf3-4	磁器	碗蓋	受部径 9.7	摘み径 4.3	3.0	ロクロ成形、染付、墨付無軸、内面口縁部「四方樺文」、見込み「葉文」 外面窓絵に「松竹梅文」	1/2	肥前		
23	4 b層	Lf5-5	磁器	碗蓋	受部径 (9.7)	摘み径 (3.8)	2.9	ロクロ成形、染付、墨付無軸、外面「草花文」、高台底裏銘あり	1/2以下	肥前		
24	4 b層	Lg4-1	磁器	端反碗蓋	受部径 8.7	摘み径 3.8	3.0	ロクロ成形、染付、墨付無軸、内面口縁部「雷文」 見込み「松竹梅環文」、外面「竹文」 高台底裏銘「一角杵「青」字崩れか」	ほぼ完形	肥前		
25	8層 9層	Lf3-2 Lf4-3	磁器	朝顔形碗蓋	受部径 (9.0)	摘み径 3.4	3.1	ロクロ成形、青磁染付(外青磁)、墨付無軸、内面口縁部「四方樺文」 見込み「五弁花」崩れか	1/2以上	肥前		
26	4 b層 8層	Lf2-2 Lf2-2	磁器	端反碗蓋	受部径 (7.7)	摘み径 3.0	2.5	ロクロ成形、染付、墨付無軸、外面口縁部「雷文」「鳥文」	1/2以上	瀬戸・美濃		
27	4 b層	Lf4-4	磁器	小碗	(6.4)	2.0	2.6	ロクロ成形、墨付無軸	2/3	肥前		
28	8層	Lf2-2	磁器	小碗	(6.7)	(2.5)	3.2	ロクロ成形、墨付無軸	1/2以下	肥前		
29	6層	Le4-5	磁器	小碗	(7.1)	(2.9)	3.5	ロクロ成形、染付、墨付無軸、外面口縁部「笹文」	1/2以下	肥前		
30	4 b層	Lf4-3	磁器	小碗	6.2	2.4	2.9	ロクロ成形、染付、墨付無軸、外面口縁部「笹文」	完形	肥前		
31	4 b層	Lg4-1	磁器	湯呑み碗	(6.9)	(3.1)	4.6	ロクロ成形、染付、墨付無軸、内面口縁部「雷文」 外面「団龍と唐草文」、高台部「連続文」	1/2以上	肥前	12	5
32	4 b層	Lf5-4	磁器	湯呑み碗	(6.5)	(3.2)	5.0	ロクロ成形、染付、墨付無軸、外面「山水文」	1/2以下	肥前		
33	3層 4 a層 6層 II層 III層	Lf3-4 Lf4-2 Lf3-1 Lf4-5 Lf3-3	磁器	湯呑み碗	6.9	3.4	4.8	ロクロ成形、染付、墨付無軸、外面「唐草文」	1/2以下	肥前		
34	4 b層	Lf4-4	磁器	小碗	6.7	3.1	4.6	ロクロ成形、染付、墨付無軸、高台底裏銘「清玩」	完形	肥前		
35	6層	Lf4-3	磁器	小碗	6.9	2.4	3.5	ロクロ成形、染付、墨付無軸、見込み・外面「花文」	完形	瀬戸・美濃		
36	6層	Lg4-2	磁器	薄手酒环	(6.6)	(3.0)	2.9	ロクロ成形、上絵付、墨付無軸、見込み青絵「山水文」	1/2以上	瀬戸・美濃		
37	4 b層	Lf4-3	磁器	薄手酒环	6.3	2.5	3.2	ロクロ成形、上絵付、口縁端金色釉、墨付無軸、見込み青絵「舟文」 高台底裏銘赤絵「金川」	2/3以上	瀬戸・美濃		
38	4 b層	Lf4-4	磁器	薄手酒环	(5.9)	(2.3)	3.0	ロクロ成形、上絵付、墨付無軸、内面口縁部「雷文」 見込み青絵「おかめ」	1/2	瀬戸・美濃		
39	3層 攪乱	確2トレ Lf3-4	磁器	輪花皿	(21.4)	12.1	4.0	ロクロ成形、染付、輪花16単位、内面「みじん花唐草文」 見込み「松竹梅環」、裏文様「如意頭唐草文」 高台底裏銘「太明年化製」崩れ、硝子焼き継ぎ痕あり	1/2	肥前		
40	4 b層	Lf4-4	磁器	皿	(22.3)	(13.6)	3.7	ロクロ成形、染付、墨付無軸、内面「竹梅文」、外面「如意頭唐草文」	1/2以下	肥前		
41	4 b層	Lf3-4	磁器	皿	(20.4)	(13.0)	3.1	ロクロ成形、染付、墨付無軸、内面「花唐草文」、外面「如意頭唐草文」 漆継ぎ痕あり	1/6	肥前	12	5
42	6層	Lf4-4	磁器	輪禿皿	12.2	4.4	3.7	ロクロ成形、染付、墨付無軸、見込み釉ハギ内に溶着痕あり 内面「二重網目文」	3/4	肥前		
43	8層	Lf2-2	磁器	輪禿皿	(12.9)	(7.1)	2.6	ロクロ成形、染付、墨付無軸、内面「蔓草文」、外面文様あり	1/3	肥前		
44	4 b層 6層 9層	Lf4-3 Le4-5 Lf4-1	磁器	蛇の目凹形 高台皿	(13.7)	(9.0)	3.5	ロクロ成形、染付、内面「菊唐草文」、見込み「山水文」 外面「如意頭唐草文」	1/3	肥前		
45	6層	Lf3-2	磁器	蛇の目凹型 高台皿	(13.3)	(8.1)	4.5	ロクロ成形、青磁、染付、釉ハギ部分砂付着、見込み「山水文」 高台底裏銘「二重角杵「満福」	1/2以下	肥前		
46	4 b層	Lf4-2・3, 5-3	磁器	小皿	9.3	4.5	2.2	ロクロ成形、染付、王緑、墨付無軸、内面「水草文」、外面文様あり	ほぼ完形	肥前		
47	9層	Lf4-1	磁器	変形小皿			2.0	型打成形糸切細工、染付、墨付無軸、見込み「若松文」、裏文様あり	1/2以下	肥前		
48	4 b層	Lf4-4	磁器	小皿	8.3	4.7	2.0	ロクロ成形、口縁、菊花、墨付無軸	ほぼ完形	肥前		
49	6層	Lf5-2	磁器	蓋物	(12.0)	(6.9)	5.6	ロクロ成形、染付、口縁部・墨付無軸、外面「花唐草文」 漆継ぎ痕あり	1/2以下	肥前		
50	6層	Lf4-3	磁器	蓋物	(9.3)	(4.1)	5.4	ロクロ成形、染付、口縁部・墨付無軸、外面「草花文」	1/2以下	肥前		
51	6層	Lf4-5	磁器	蓋物	(12.0)		<4.9>	ロクロ成形、染付、口縁部無軸、外面「丸文」	1/3	肥前	12	5
52	9層	Lf4-3	磁器	蓋物	(11.8)	6.0	6.9	ロクロ成形、染付、口縁部・墨付無軸、外面「花文」、漆継ぎ痕あり	1/2以下	肥前		
53	3層 4 b層 5層 6層	Lf4-2 Lf4-2・3 Lf4-2 Lf5-2	磁器	段重	11.8	7.4	4.8	ロクロ成形、染付、受け部・段重ね部無軸、外面「鋸歯文」	ほぼ完形	肥前		

掲載 番号	土 層	グリッド	種類	器 種	法 量 (cm)			技 法 ・ 文 様	遺 存	生産地	挿図	図版
					口径	底径	器高					
54	6層	Lf4-4	磁器	散蓮華	長 <3.8>		幅 <3.4>	型打成形、染付、底面無釉	破片	瀬戸・美濃	12	5
55	9層	Lf4-1	磁器	蕎麦猪口	(7.6)	(5.6)	5.9	ロクロ成形、染付、蛇ノ目高台、内面口縁部「四方櫨文」 見込み二重圏線、外面「矢羽根文」、下部「連弁文」、漆継ぎ痕あり	1/2以下	肥前		
56	9層	Lf3-4	磁器	蕎麦猪口	(7.3)	(3.5)	5.0	ロクロ成形、染付、畳付無釉、外面口縁部「雨降り文」	1/2以下	肥前		
57	4 b層	Lf4-3	磁器	小瓶		3.3	10.1	ロクロ成形、緑釉	2/3以上			
58	4 b層		磁器	御神酒徳利		4.7	<9.9>	ロクロ成形、染付、畳付無釉、内面無釉、外面「松竹梅文」	2/3以上	肥前	13	6
59	4 b層 6層 6層	Lf4-3・4 Lf4-3・4、5-3 Lg4-1	磁器	御神酒徳利	1.9	3.9	10.9	ロクロ成形、染付、畳付無釉、内面無釉、外面「松竹梅文」	ほぼ完形	肥前		
60	6層	Lf4-5	磁器	御神酒徳利		3.6	<6.5>	ロクロ成形、染付、畳付無釉、内面無釉、外面「松竹梅文」	1/2以上	肥前		
61	4 b層	Lf5-3	磁器	急須蓋	受部径 5.2	摘み径 1.4	2.3	ロクロ成形、摘み花形型押し貼付け、染付、受部無釉、外面「岩文」	完形	瀬戸・美濃		
62	4 b層	Lf4-4・5、5-4	磁器	急須	6.6	5.9	5.0	ロクロ成形、注口貼付け・穴6、把手貼付け、染付 底部・蓋受け無釉、外面「人物楼閣文」	2/3以上	瀬戸・美濃	13	6
63	3層	Lf2-3	磁器	香炉	(8.9)	(6.4)	7.1	ロクロ成形、染付、内面・畳付無釉、蛇の目凹形高台、外面「竹文」	1/2以下	肥前		
64	6層	Lf4-5	磁器	仏飯碗	7.2	3.9	5.6	ロクロ成形、透明釉、糸切底(右)、脚部無釉、窯道具痕か(4)	2/3以上			
65	3層 4 b層 6層 6層	Lf3-2 Lf4-2 Lf4-3	磁器	仏飯碗	6.7	4.0	5.8	ロクロ成形、透明釉、糸切底(右)、脚部無釉、窯道具痕か(4)	ほぼ完形			
66	2層 6層 6層	Lf5-2 Lf3-2	磁器	香油壺		(6.8)	<7.4>	ロクロ成形、染付、畳付無釉、外面「草花文・蝶文」	1/2	肥前	14	6
67	3層 4 b層 II層 排土	Lf2-3、3-5 Lf2-4 Lf2-3 確2トレ	磁器	香油壺	2.0	4.0	7.9	ロクロ成形、染付、内面無釉、外面「梅文」	ほぼ完形	肥前		
68	2層	Lf5-1	陶器	天目茶碗	(11.2)		<5.4>	ロクロ成形、鉄釉、高台無釉、(中世)	破片	瀬戸		
69	4 b層	Lg4-1	陶器	刷毛目碗	9.3	3.4	5.0	ロクロ成形、灰釉・白土、高台無釉、外面刷毛目	2/3以上			
70	4 b層	Lf4-2	陶器	刷毛目碗	9.7	3.2	4.8	ロクロ成形、灰釉・白土、高台無釉、外面刷毛目	1/2		14	6
71	4 b層 6層 9層 9層	Lf3-4 Lf4-5 Lf4-5	陶器	小杉茶碗	9.2	3.7	5.4	ロクロ成形、透明釉、鉄・呉須絵、高台無釉、外面「若松文」	2/3以上	京都・信楽		
72	6層 8層 8層	Lf4-3・4 Lf3-3	陶器	小杉茶碗	9.1	3.5	5.3	ロクロ成形、透明釉、鉄・呉須絵、高台無釉、外面「若松文」	2/3以上	京都・信楽		
73	4 b層 6層 9層 9層	Lf3-4 Lf4-5 Lg4-1	陶器	小杉茶碗	(9.4)	(4.0)	5.4	ロクロ成形、透明釉、鉄・呉須絵、高台無釉、外面「若松文」	1/2以下	京都・信楽		
74	4 b層 6層 8層 9層	Lf2-4 Lf3-3・4 Lf2-2、3-1・2 Lf4-2	陶器	小杉茶碗	(9.0)	(3.4)	5.2	ロクロ成形、透明釉、鉄絵、高台無釉、外面「若松文」	1/3	京都・信楽	14	6
75	4 b層 6層	Lf4-3 Lf4-4	陶器	小杉茶碗	9.2	3.1	5.0	ロクロ成形、透明釉、鉄絵、高台無釉、高台底裏墨書「冥供」 外面「若松文」	2/3以上	京都・信楽		
76	6層	Lf4-3	陶器	小杉茶碗	(9.5)	(3.2)	5.6	ロクロ成形、透明釉、鉄絵、高台無釉、外面「若松文」	1/2以下	京都・信楽		
77	4 b層	Lf4-5	陶器	小杉茶碗	9.1	3.2	5.3	ロクロ成形、透明釉、鉄絵、高台無釉、外面「若松文」	2/3以上	京都・信楽		
78	3層 4 b層 5層 6層	Lf3-2 Lf3-3 Lf3-2 Lf3-1	陶器	小杉茶碗	(9.3)	(3.8)	5.4	ロクロ成形、透明釉、鉄絵、高台無釉、外面「若松文」	1/2以下	京都・信楽	14	6
79	4 b層	Lf2-4	陶器	小杉茶碗		3.6	<1.8>	ロクロ成形、透明釉、鉄絵、高台無釉、高台底裏墨書「寿」	小片	京都・信楽		
80	6層	Lf4-5	陶器	灰釉端反碗	8.3	2.6	4.6	ロクロ成形、灰釉、高台無釉	2/3以上	京都・信楽		
81	4 b層	Lg4-1	陶器	灰釉端反碗	(8.4)	3.1	4.9	ロクロ成形、灰釉、高台無釉	1/2以上	京都・信楽		
82	9層	Lg4-1	陶器	灰釉端反碗	(9.1)	(3.4)	4.9	ロクロ成形、灰釉、高台無釉、見込みに目痕1	1/2以上	京都・信楽	14	6
83	9層	Lf4-1	陶器	灰釉端反碗	9.1	3.0	5.1	ロクロ成形、灰釉、高台無釉	1/2以下	京都・信楽		
84	8層	Lf2-2、3-2	陶器	灰釉端反碗	(9.4)	3.4	5.3	ロクロ成形、灰釉、高台無釉	1/2以上	京都・信楽		
85	3層 6層 8層 攪乱	Lf2-3 Lf2-3 Lf2-3 Lf3-4	陶器	灰釉端反碗	(9.1)	(2.9)	5.1	ロクロ成形、灰釉、高台無釉	1/2以上	京都・信楽		
86	6層	Lf4-5	陶器	灰釉端反碗	(9.2)	3.4	5.6	ロクロ成形、灰釉、高台無釉、高台底裏墨書「近」、漆継ぎ痕あり	1/2以下	京都・信楽	14	6
87	3層 4 b層	Lf4-4 Lf4-4	陶器	端反碗	8.7	3.5	4.9	ロクロ成形、灰釉、口縁部長石釉、高台底裏に墨書あり	ほぼ完形			
88	4 b層 6層 II層	Lf5-3 Lf4-4、5-2 Lf5-3	陶器	端反碗	9.0	2.8	4.8	ロクロ成形、透明釉、口縁部緑釉、見込み目痕4、高台無釉	2/3以上	京都・信楽		
89	6層	Lf4-4	陶器	端反碗	(9.0)	3.1	4.5	ロクロ成形、透明釉、口縁部緑釉	1/2以上	京都・信楽		
90	4 b層 6層 攪乱	Lf3-4 Lf3-2 Lf2-4	陶器	端反碗	(8.9)	(3.8)	4.6	ロクロ成形、鉄釉、白土、内面白土掛け、外面「梅花枝文」 見込みに目痕(残1)	1/2		14	6
91	3層 4 b層	Lf3-3 Lf4-3・4	陶器	端反碗	(9.2)	(3.3)	4.9	ロクロ成形、灰釉、白土・鉄絵、内面白土掛け、外面「梅花枝文」	2/3	肥前		
92	4 b層 6層	Lf3-4 Lf3-4、4-4・5	陶器	碗	10.2	4.0	6.7	ロクロ成形、透明釉、高台無釉、高台底裏に刻印銘あり「寶か」	1/2以上	京都・信楽		
93	8層	Lf2-2	陶器	碗		4.9	<1.9>	ロクロ成形、灰釉、高台部無釉薬、高台底裏刻印あり	破片	京都・信楽		

掲載 番号	土 層	グリッド	種類	器 種	法 量 (cm)			技 法 ・ 文 様	遺 存	生産地	挿図	図版
					口径	底径	器高					
94	4 b 層 6 層 8 層 9 層	Lf4-2 Lf2-3, Lg3-1 Lf2-2 Lf4-3	陶器	藁灰釉 開口碗	(12.3)	4.8	6.6	ロクロ成形、白釉・飴釉流し掛け、渦巻高台、高台無釉	1/2	萩	14	6
95	8 層	Lf2-2	陶器	皿		(5.0)	<1.4>	ロクロ成形、鉄絵、見込みに目痕(残1)	破片	唐津		7
96	4 b 層	Lf4-2・3	陶器	爛徳利		6.6	<16.0>	ロクロ成形、内外面透明釉、鉄絵、底部無釉、外面「山水文」	1/3			
97	9 層	Le5-4	陶器	爛徳利		(7.8)	<11.0>	ロクロ成形、鉄釉、底裏墨書あり	破片			
98	4 b 層	Lf4-5, Lg4-1	陶器	土鍋	11.6	4.9	5.9	ロクロ成形、把手紐作り貼付け、鉄釉、外面体部無釉、スス付着	2/3以上		7	
99	4 a 層 4 b 層 6 層 9 層	Lf4-2 Lf4-2 Lf3-2 Lf3-2	陶器	土鍋	11.4	4.8	6.9	ロクロ成形、把手紐作り貼付け、三足貼付け、鉄釉、底部無釉 見込み目痕2、体部スス付着	ほぼ完形			
100	4 b 層 9 層	Lf5-3 Lf4-2	陶器	土鍋	13.6	4.6	4.9	ロクロ成形、把手紐作り貼付け、三足貼付け、鉄釉、底部無釉 底部少量のスス付着	ほぼ完形			
101	3 層 6 層	Lf3-3 Lf3-3	陶器	土鍋	15.0	5.1	7.0	ロクロ成形、把手紐作り貼付け、三足貼付け(残1)、鉄釉 遺存部分全面施釉、外面体部に溶着痕あり	1/3			
102	3 層 5 層 6 層 8 層 9 層	Lf3-2 Lf3-2 Lf3-2, 2・4-3 Lf2-2 Lf3・4-2	陶器	土鍋	(20.8)	(9.8)	9.1	ロクロ成形、灰釉、見込み目痕(残2)、把手貼付け部分欠損 三足貼付け(残2)	1/2		15	
103	6 層	Lf4-3	陶器	土鍋	19.0	8.3	10.9	ロクロ成形、把手紐作り貼付け、三足貼付け、鉄釉、底部無釉 見込み目痕5	完形			
104	4 b 層 6 層	Lf4-3・4 Lf3-2, 5-3	陶器	御皿	14.3	8.4	2.9	ロクロ成形、鉄釉、高台無釉	1/2			
105	4 b 層	Lf4-4	陶器	行平鍋蓋	受部径 8.0	摘み径 3.0	器高 2.3	最大径 11.1	ロクロ成形、鉄釉、外面体部トビカンナ、イッチン描	完形		
106	6 層	Lf4-3	陶器	行平鍋蓋	受部径 12.8	摘み径 2.0	器高 5.2	最大径 15.8	ロクロ成形、鉄釉、摘み貼付け、外面体部トビカンナ、 イッチン描	完形	7	
107	6 層	Lf4-5	陶器	土瓶蓋	受部径 4.3		器高 1.5	最大径 5.5	ロクロ成形、摘み貼付け、鉄釉、内面無釉	完形		
108	6 層	Lg2-1	陶器	土瓶蓋	受部径 2.8	摘み径 1.3	器高 1.6	最大径 6.1	ロクロ成形、焼成前穿孔、白泥、緑釉、鉄絵、裏面無釉 文様あり	完形		
109	6 層 9 層	Lf5-2 Lf4-2	陶器	土瓶	6.0	6.5	10.3	最大幅 <14.0> 口縁部・底部・内面下半無釉、底面に墨書あり	2/3以上			
110	4 b 層	Lf4-4	陶器	土瓶	7.1		<7.5>	最大幅 <14.4> 口縁部・底部・内面下半無釉、底面に墨書あり	2/3以上		16	
111	4 b 層 6 層 9 層 II 層	Lf4-5 Lf2-3-2 Lf3-2 Lf4-5	陶器	土瓶	7.8	7.5	10.2	最大幅 17.0 口縁部・底部・内面下半無釉、底面に墨書あり	2/3			
112	4 b 層 6 層	Lf3・4-3, 4-4 Lf3-1・2	陶器	土瓶	10.2	8.8	13.7	最大幅 <22.5> 蓋受け釉拭き取り、底部内外面無釉、外面イッチン描	2/3以上			
113	8 層	Lf3-3	陶器	播鉢				ロクロ成形、旋焼無釉、櫛目12本単位	破片	肥前		10
114	6 層	Lf3-3, 4-4・5	陶器	播鉢	(30.0)	(12.4)	15.0	ロクロ成形、錆釉、櫛目8本単位	1/3以下		7	
115	6 層	Lf4-3	陶器	播鉢	17.2	8.2	6.9	紐作りロクロ成形、鉄釉、播り目10本単位、播目上部ナデ消し 見込みに輪トチン痕か	完形			
116	6 層	Lf3-2	陶器	播鉢	(37.4)		<9.0>	ロクロ成形、暗褐色釉、櫛目19本単位	1/3以下	肥前		
117	6 層	Lf4-5	陶器	播鉢	(35.6)		<6.3>	ロクロ成形、鉄釉、櫛目23本単位	1/3以下	肥前		10
118	6 層 8 層 9 層	Lf3・4-4, 4-5 Lf2-2 Lf3-4	陶器	壺	16.0	14.2	21.7	ロクロ成形、鉄釉、外面タタキ、内面アテ具痕、外面下半にスス付着	3/4		17	
119	8 層	Lf3-3	陶器	灯火皿	(9.6)	3.5	2.7	ロクロ成形、鉄釉、糸切底(右)、外面底部無釉 見込みに輪トチン痕あり、外面に溶着痕あり	1/2以上			
120	6 層	Lf3-3	陶器	灯火皿	9.8	4.3	2.7	ロクロ成形、鉄釉、糸切底(右)、外面底部無釉 内外面口縁部スス付着	2/3以上			
121	5 層	Lf5-3	陶器	灯火皿	9.5	4.4	1.9	ロクロ成形、鉄釉、糸切底(左)、全面施釉 内外面口縁部スス付着	完形			
122	6 層	Le5-5	陶器	灯火皿	9.0	3.7	2.2	ロクロ成形、鉄釉、糸切底(左)、全面施釉 内外面口縁部スス付着	2/3以上		7	
123	5 層 6 層	Lf4-2 Lf5-2	陶器	灯火皿	(9.0)	5.2	1.8	ロクロ成形、鉄釉、糸切底(左)、全面施釉 内外面口縁部スス付着	1/2以上			
124	6 層 9 層	Lf3・4-3 Lf4-2	陶器	灯火皿	10.8	4.9	2.2	ロクロ成形、灰釉、外面底部無釉、内面櫛目文2条、目痕3 口縁部スス付着	2/3以上	信楽		
125	8 層	Lf2-2	陶器	灯火皿	11.3	4.0	2.2	ロクロ成形、灰釉、外面無釉、内面櫛目文3条、外面口縁部スス付着	1/3以下	信楽		
126	4 b 層	Lf3・4-4	陶器	灯火受付皿	受部径 (7.2)	(4.1)	1.9	最大径 11.0 ロクロ成形、灰釉、受部・底部無釉、油溝半月形	1/2以下	信楽	7	
127	5 層	Lf3-2	陶器	灯火皿	10.3	4.0	2.3	ロクロ成形、灰釉、外面無釉、内面目痕3、外面口縁部スス付着	完形	信楽		
128	4 b 層	Lf5-3	陶器	台付秉燭	4.6	2.9	5.9	ロクロ成形、糸切底(右)、鉄釉、灯芯抑え貼付け、脚部露胎 底部に焼成前穿孔	ほぼ完形			
129	4 b 層	Lf4-4	陶器	台付秉燭	4.0	2.8	4.4	ロクロ成形、糸切底(右)、鉄釉、灯芯抑え貼付け、脚部露胎 底部に焼成前穿孔	2/3以上			
130	6 層	Lf4-5	陶器	台付秉燭	4.0	3.2	5.0	ロクロ成形、糸切底(右)、鉄釉、灯芯抑え貼付け、脚部露胎 底部に焼成前穿孔	完形		7	
131	4 b 層	Lf4-4	陶器	台付秉燭	4.2		<4.2>	ロクロ成形、鉄釉、灯芯抑え貼付け、脚部露胎 底部に焼成前穿孔	1/2		7	
132	4 b 層	Lf5-3	陶器	台付秉燭	4.0		<4.4>	ロクロ成形、鉄釉、口縁部から内部にかけて露胎 胴部に焼成前穿孔(2ヶ所)、口縁部がU字形に切り欠かれる形状	1/2以下			
133	1 層 4 b 層 6 層	Lf5-4 Lf4-4 Lf4-4, Lg3-1	陶器	香油壺		4.8	<5.0>	ロクロ成形、灰釉、内面高台無釉、高台底裏に墨書あり	1/2以上	京都・信楽		8

掲載 番号	土 層	グリッド	種類	器 種	法 量 (cm)			技 法 ・ 文 様	遺 存	生産地	挿図	図版
					口径	底径	器高					
134	6層	Lf3-3	陶器	鳥餌入れ	4.6	3.2	3.1	ロクロ成形、把手貼付け、白土、糸切底(右)、底部無釉、焼成前穿孔	完形		17	8
135	4 b層	Lf4-4	陶器	鳥餌入れ	5.7	4.3	2.6	ロクロ成形、把手貼付け、灰釉、口縁端・底部無釉、焼成前穿孔	完形			
136	6層	Lf3-4	陶器	香炉	(10.0)		<6.8>	ロクロ成形、緑釉、内面体部下半無釉、外面「印花文」、沈線あり	1/2以下	瀬戸・美濃		
137	6層	Lf2-3, 4-4	土師質土器	精製かわらけ	(12.0)	6.0	2.1	ロクロ成形、糸切り、外面ケズリ調整、底部内外面黒色(黒斑)	1/2以上		18	8
138	9層	Lf3-2	土師質土器	焙烙			<6.0>	底部型打後体部ロクロ成形、外面底部砂目 外面体部及び内面底部にスス付着	1/10			
139	3層 4 b層 4 b層 8層 II層	Lf3-5 Lf4-4・5 Lf5-5 Lf2-2 Lf4-5	土師質土器	焙烙	30.8		4.9	底部型打後体部ロクロ成形、底面砂目、外面体部・内外面スス付着 焼成前穿孔(2ヶ所)	2/3以上			
140	4 b層 5層 6層	Lf4-5 Lf3-2 Lf4-3・4	硬質瓦質土器	焙烙	(17.4)		4.7	ロクロ成形、内面口縁部・外面ケズリ調整、内底面スス付着 外面口縁部帯状にスス付着、内外面体部黒色化	1/3			
141	4 b層 6層	Lf4-4・5 Lf4-3・4	硬質土師質土器	把手付焙烙	15.7		6.9	ロクロ成形、把手貼付け、外面ケズリ調整、体部帯状にスス付着	1/2以上			
142	1層 4 b層 4 b層 6層	Lf5-5 Lf4-5 Lg4-1 Lf4-4・5	硬質土師質土器	把手付焙烙	15.5		7.5	ロクロ成形、把手貼付け、外面ケズリ調整、体部帯状にスス付着 内底面にスス付着	2/3以上			
143	3層 5層 6層 II層	Lf4-5 Lf3-2 Lf4-4 Lf4-4・5	硬質土師質土器	鉢 (火消壺か)	受部径 (14.0)		器高 <4.6>	最大径 (20.1)	ロクロ成形、外面ケズリ調整、内面スス付着	1/2以上		
144	4 a層 5層 9層	Lf2-2 Lf2-2 Lf3-2	硬質土師質土器	鉢 (火消壺か)	(15.0)	(9.4)	9.3	ロクロ成形、糸切底(右)、外面ケズリ調整、外面墨書あり	1/2以下			
145	5層 6層	Lf3・4-2 Lf3-1, 5-2	硬質土師質土器	鉢 (火消壺か)	14.8		<5.4>	ロクロ成形、ケズリ調整、内面口縁部スス付着	1/3以下			
146	4 b層	Lf4・5-2	硬質土師質土器	鉢 (火消壺か)		8.0	<8.2>	ロクロ成形、外面ケズリ調整、内面体部に帯状にスス付着	2/3以上			
147	8層	Lf3-2	瓦質土器	火鉢	28.2		<6.1>	ロクロ成形、頸部に連続文、外面スス付着	破片		19	8
148	6層 6層	Le4-5 Lf3-2・3	硬質瓦質土器	風炉	21.2		<5.0>	ロクロ成形、外面黒色処理、口縁部内面から外面にかけてミガキ調整、頸部に「菱文」	破片			
149	6層	Le3・4-5	硬質瓦質土器	風炉	22.5		<8.4>	ロクロ成形、外面黒色処理、口縁部内面から外面にかけてミガキ調整、頸部に「亀甲文」、内面スス付着	破片			
150	6層	Lg4-1	土師質土器	サナ	(8.4)	(4.6)	1.0	型打成形、焼成前穿孔(残4)、底面布目痕	1/3以下			
151	4 b層	Lf4-5	土師質土器	サナ	(7.6)	2.9	1.8	ロクロ成形、糸切り底、焼成前穿孔(残5)				
152	3層 4 b層 6層	Lf4-5 Lf3-3, 4-5 Lf4-5	土師質土器	涼炉 (方形)	長 15.8	幅 16.5	奥行 15.4	板作り成形、受け部内部構造貼付け、風口窓ハート形、受け部3内部風口窓方形2、サナ部穿孔7、外面スス付着、外面ケズリミガキ調整、陰刻「茶因呼醉後」、一重角枠「清口」	2/3以上			
153	8層	Lf2-2	土師質土器	涼炉 (方形)				板作り成形、受け部貼付け、外面ケズリ調整、外面スス付着 陰刻二重枠「喜助」	破片			
154	3層 4 b層 6層 II層 排土	Lf5-5 Lf3-3, 4-5 Lf4-5 Lf4-5	土師質土器	涼炉 (六角形)	長 <15.7>	幅 (17.4)	奥行 15.1	板作り成形、受け部・内部構造貼付け、受け部3(残1) サナ部穿孔(残3)、外面スス付着、外面ケズリ、ミガキ調整 陰刻「風・涼・・・」、一重丸枠「一峯」 正面以外の側面上部に陰刻文4ヶ1単位 高台底裏墨書「中」	1/2以下			
155	3層 4 b層 6層 9層 排土 確2トレ	Lf4-4 Lf4-4・5 Le4-5 Lf4-2	土師質土器	涼炉 (六角形)	長 17.5	幅 (18.0)	奥行 15.6	板作り成形、受け部内部構造、三足貼付け、風口窓ハート形 受け部(残2)、内部風口窓方形2(残1)、サナ部穿孔7(残6) 内・外面スス付着、外面ケズリ、ミガキ調整、陰刻「春花楽秋口」	2/3以上			
156	3層 4 b層 6層 8層 II層	Lf3-5 Lf4-5, Lg4-1 Lf4-5 Lg3-1 Lf4-5	硬質土師質土器	涼炉 (円形)	長 14.5	最大径 (13.0)		ロクロ成形、受け部内部構造、底部三足貼付け、風口窓楕円形 受け部(残1)、内部風口窓方形、サナ部穿孔推定7 外面・内面壁スス付着、外面ケズリ、ミガキ調整、陰刻「松河口泉」	2/3			
157	2層 9層	Lf5-1 Le4-5	土師質土器	涼炉 (円形)	長 <7.3>	最大径 (15.4)		ロクロ成形、受け部・内部構造貼付け、外面ケズリ、ミガキ調整 陰刻「・・喜風樓」	破片			

土坑・ピット

掲載 番号	土層	グリッド	種類	器種	法 量 (cm)			技 法 ・ 文 様	遺 存	生産地	挿図	写真 図版
					口径	底径	器高					
158	1号土坑 2号護岸	1層 6層	Lf2-3 Lf4-3	陶器	灯火皿	(9.7)	3.3	2.9	ロクロ成形、暗褐色釉、糸切底(右)、外面底部無釉、見込みに輪ト チン痕あり、高台周縁に溶着痕あり、内外面口縁部にスス付着	1/2以上	20	8
159	3号土坑 2号護岸 2号護岸	1層 3層 6層	Lf2-3 Lf2-3 Lf3-4 Lf4-3	磁器	蓋物か		6.6	<6.0>	ロクロ成形、染付、畳付無釉、外面「竹林、連弁文」	1/2以下		
160	3号土坑 P 2	1層 Lf2-3 Lf2-3	陶器	小杉茶碗	(10.2)		<5.5>	ロクロ成形、透明釉	1/2以下	京都・信楽		
161	5号土坑	Lg3-1	陶器	鉢		8.8	(8.9)	ロクロ成形、灰釉、見込みに目痕(残1)	破片			

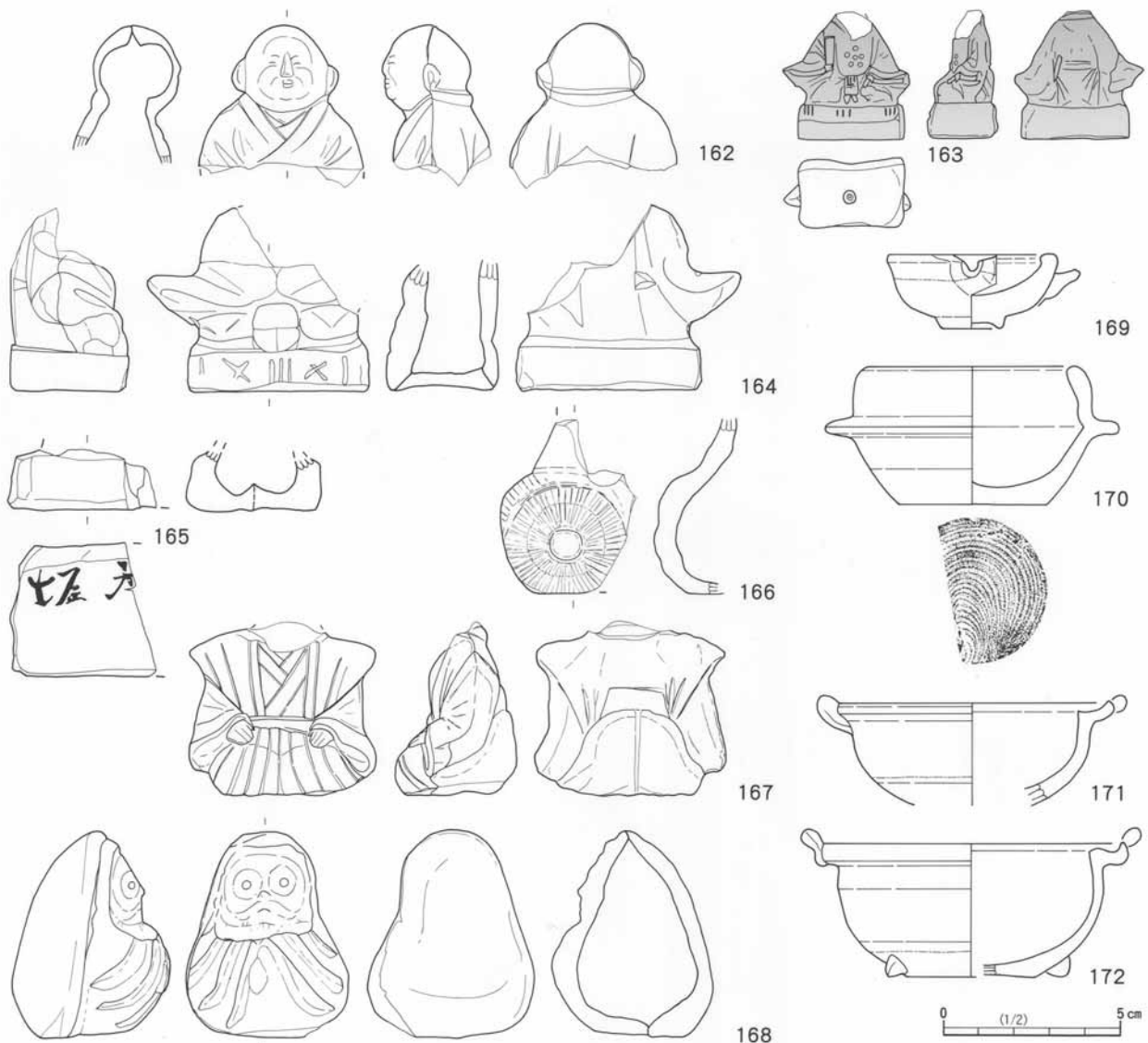
4 玩 具 (第21図, 表2, 図版8・9)

総破片数60点が出土している。その内訳は磁製品1点, 陶製品10点, 施釉土製品4点, 土師質土製品44点, 瓦質土製品1点である。土師質土製品の胎土は白色系, 橙系, 赤褐色系の3種類が認識できる。白色系は京都系製品の可能性が高い(安芸2001)が, 橙・赤色系を呈する製品は, 在地産か搬入品なのかは不明である。出土した総点数44点の胎土の内訳は, 白色系が最も多く破片数29点, 橙色系13点で, 赤褐色系2点である。

人形類 162は西行, 163~165は天神で, 163は黄色釉を全体に施し, 衣に緑釉が施される。165の底裏には「堀大・」の墨書が残し, 所有者を記したものであると思われる。166は大黒天の俵の一部である。167は袴雛で中空の体内部に土玉が入った土鈴, 168は達磨である。他にぶら人形, 狛犬などの小片が出土している。

飯事道具 169は施釉土器の片口鉢で, 内面と外面口縁部から体部にかけて緑釉が施される。170は瓦質の羽釜で底面は右回転の糸切り底である。171・172は陶器の鍋で内面, 外面の口縁部から体部にかけて鉄釉が施される。他に口径2.4cmの磁器碗, 緑釉を施した瓶が出土している。

その他 黄・緑釉で施釉された宝珠形のガラガラや, 橙色の胎土の鯛山車が出土している。



第21図 玩具

表2 出土遺物観察表 玩 具

掲載 番号	土 層	グリッド	種類	器種	法 量 (cm)			観 察 所 見	遺存	挿図	図版
					口径	底径	器高				
162	2号護岸 3層	Lf 4-4	土製品	人形 西行	高<4.6>	幅<4.7>	厚<3.1>	型押成形、前後合わせ、中空 胎土 10YR7/2 にぶい黄橙色、銀雲母を含む	1/2 以下	21	8
163	2号護岸 4 b層	Lf 4-4	土製品	人形 天神	高<3.7>	幅 3.6	厚 2.0	型押成形、前後合わせ、中実、塗彩(緑・茶色釉) 底部穿孔 胎土 10YR7/2 にぶい黄橙色	2/3 以上		
164	2号護岸 4 b層 6層	Lf 4-3 Lf 4-3	土製品	人形 天神	高<5.3>	幅<6.3>	厚 3.4	型押成形、前後合わせ、中空 胎土 10YR6/3 にぶい黄橙色	1/2 以上		
165	2号護岸 3層	Lf 4-4	土製品	人形 (天神)	高<1.2>	幅<4.2>	厚 3.8	型押成形、前後合わせ、中空、底裏に墨書「堀大・」	破片		
166	3号土坑 1層	Lf 2-3	土製品	人形 大黒	高<5.0>	幅<3.8>		型押成形、前後合わせ、中空 胎土 10YR6/4 にぶい黄橙色 銀雲母含む	破片		
167	2号護岸 4 b層	Lf 4-4	土製品	人形 袴男雛	高<5.0>	幅 5.4	厚 3.4	型押成形、前後合わせ、中空、内部に土玉が入る 胎土 2.5Y8/2 灰白色 銀雲母含む	2/3 以上		
168	2号護岸 6層	Lf 3-2	土製品	人形 達磨	高 5.9	幅 4.7	厚 4.5	型押成形、前後合わせ、中空 胎土 10YR7/3 にぶい黄橙色	ほぼ 完形		9
169	2号護岸 4 b層	Lf 4-2	土製品	飯事道具 片口鉢	(4.8)	1.7	2.1	ロクロ成形、塗彩(緑釉)、外面底部無釉	2/3 以上		
170	2号護岸 6層	Lf 4-4	土製品	飯事道具 羽釜	(5.8)	(4.2)	3.9	最大径 8.4 ロクロ成形、糸切底(右)、瓦質土器	1/2 以下		
171	2号護岸 4 b層 8層	Lf 4-2 Lf 2-2	陶製品	飯事道具 土鍋	(7.7)		<3.1>	ロクロ成形、紐作り貼付け、鉄釉、底部無釉	1/2 以下		
172	2号護岸 4 b層	Lf 4-4	陶製品	飯事道具 土鍋	(8.6)	(3.6)	4.2	ロクロ成形、紐作り貼付け三足貼付け(残2) 鉄釉、底部無釉、見込み目痕(残2) 内外面スス付着(二次的)	1/2 以下		9

5 木製品 (第22図、表3、図版9)

本調査地点は、標高が低く地下水が豊富で、堀またはそれに伴う護岸施設を中心とした調査であったため、埋土に含まれる水分が多く、調査面積に比べ木製品の出土量も多い。衣関係では下駄・傘が、食関係では漆器碗・皿類・箸・匙、容器では柄杓や法量の異なる多量の曲げ物・桶・栓、住関係では燭台や調度品とみられる構造部材が出土した。札類には町名や年齢が判読できる迷子札や鑑札がある。他に鍬、刷毛などが出土している。なお、漆製品については別項を立て記述している。

下駄は35点が出土した。構造上、一木下駄と差歯下駄である構造下駄に大別できる。一木下駄は連歯下駄と割り下駄に細分され、構造下駄は露卵下駄はなく、陰卵下駄が出土している。

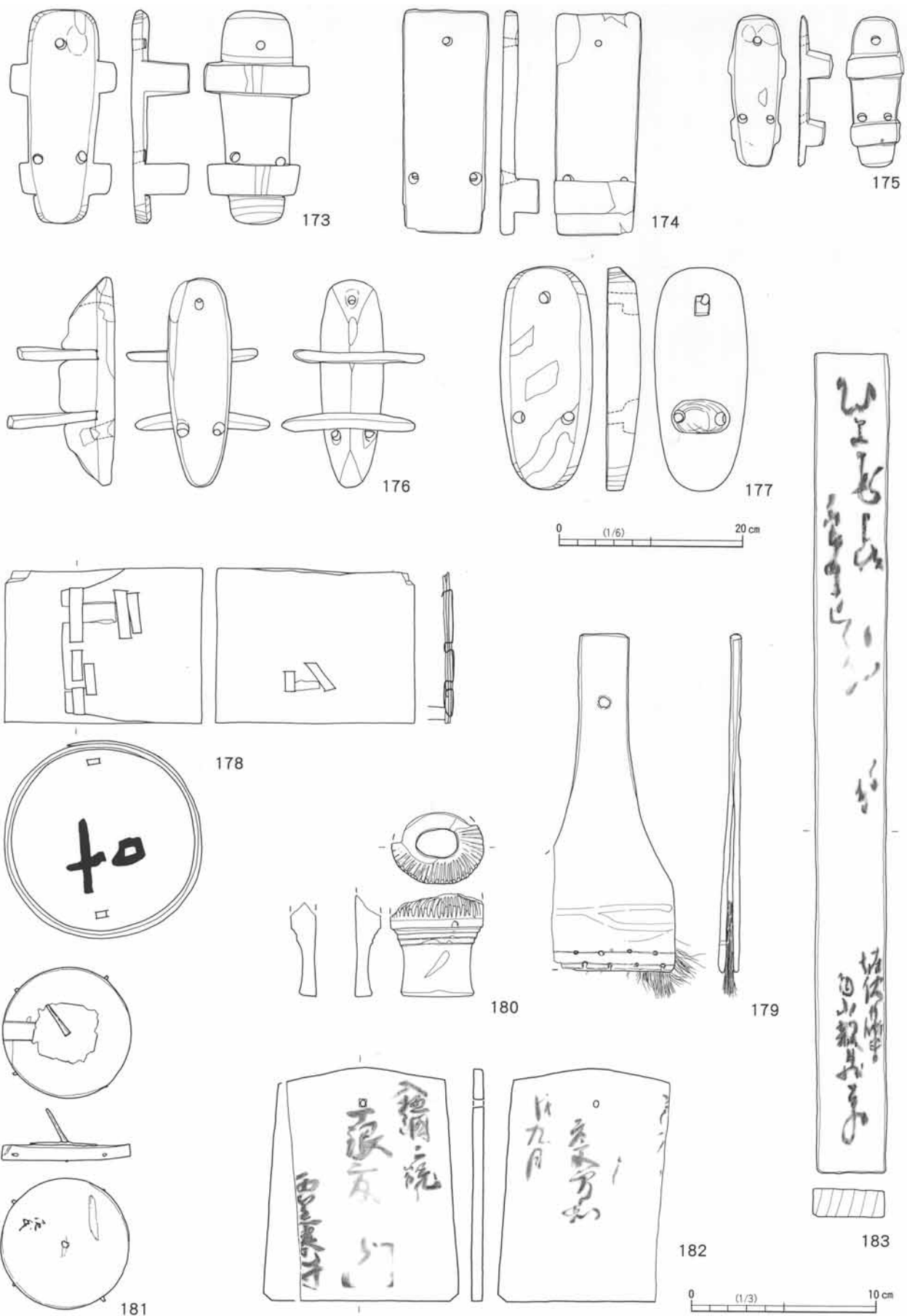
一木下駄では連歯下駄(173～175)が13点出土している。台部の形状は方形と楕円形のものがあり、全体幅は前方に比べ後方が狭く、横緒孔は後歯の前方に穿たれるものが多い。歯部の形状は台形で接地面の幅が広い。断面形状は長方形だが、逆断面のものもみられる。割り下駄は前方のみ「コ」の字状の歯が割り出され、後歯は連歯下駄と同様のものが5点出土した。また、台裏の鼻緒孔周囲部分のみを1段割り込むタイプの下駄が4点出土し、割り込みが円形で下駄の厚みが後方に減じるもの(177)と、割り込みの形状が方形でやや広く歯が周縁を巡り、下駄の厚さが前方に向かって減じるものがある。

構造下駄の陰卵下駄(176)は13点が出土した。台部の形状は方形と楕円形があり、断面形状は逆三角形を呈する。台部の長さに対して幅・横緒孔間が非常に狭い。歯部は薄いものが多くみられ、形状は台形で接地面に向かって極端に幅が広がる。

本調査地点から出土した下駄は、様相を把握できるだけの出土量に達しないまでも、連歯下駄の出土量が一定の割合を占める。陰卵下駄の割合が高く、露卵下駄が出土していないことなどの特徴が挙げられる。

江戸遺跡における発掘調査の成果では、①連歯下駄は明暦以降、急激に普及し江戸後期に入っても増加していく。②陰卵下駄は少なくとも18世紀後葉以前にはほとんど使用されていなかった。③露卵下駄から陰卵への変換は、1800年前後に急速に進んだ(古泉1987・2001)とされており、本調査地点の帰属時期において、江戸遺跡とほぼ同様の様相を呈していたものと考えられる。

下駄以外の木製品については、遺存率が高く情報量の多いものを図化した。178は柄杓で、曲げ物側板に直接



第22図 木製品

柄を差し込むタイプである。合わせ留め箇所には方形の柄装着孔が、対面に柄先端装着孔が開けられる。側板の合わせ、装着孔の補強、底板の接合は木皮で綴じられる。底裏には「叶」と墨書される。179は刷毛で、板を上方に向かって途中まで半割にして毛を挟む。綴部には2条の沈線に孔を連続して開け、糸でかがり綴じ合わせている。180は傘の部品である手元クロクロである。181は燭台の部材で、表面に他部材を差し込み、装着したと考えられる溝を持つ。中央には方形の鉄板が乗せられ、底面から釘が突き立ててある。板側面には4箇所均等に木釘が留めてあり、円形板周縁と別部品とが接合されていたものと思われる。底面には「□氏」と墨書され、所有者あるいは使用者が記されていると思われる。182は五角形の板の表面に「入極網□統／丁銀三刃／西笠巻村」、裏面に「□・・／□（多力）宮曾兵衛㊦／戊九月」と墨書が残る。西笠巻村は現在の新潟市南区にあたる。信濃川支流の鷲ノ木大通川流域に位置し、近世においては新発田藩領であった。本札は漁労における鑑札で、網一統分の役銀が丁銀3刃であったことが判る。183は板の片面に「□□・・（比力）・／・・・／堀沢□□／□山□蔵□」と墨書されるが、ほとんどが判読不能である。字配りや法量からみて、短冊にみたて句などを詠み、習書とした可能性がある。下方には作者名が記されたものと思われる。（※）

（※）182・183の墨書の判読および解釈は原直史氏の御教示による。

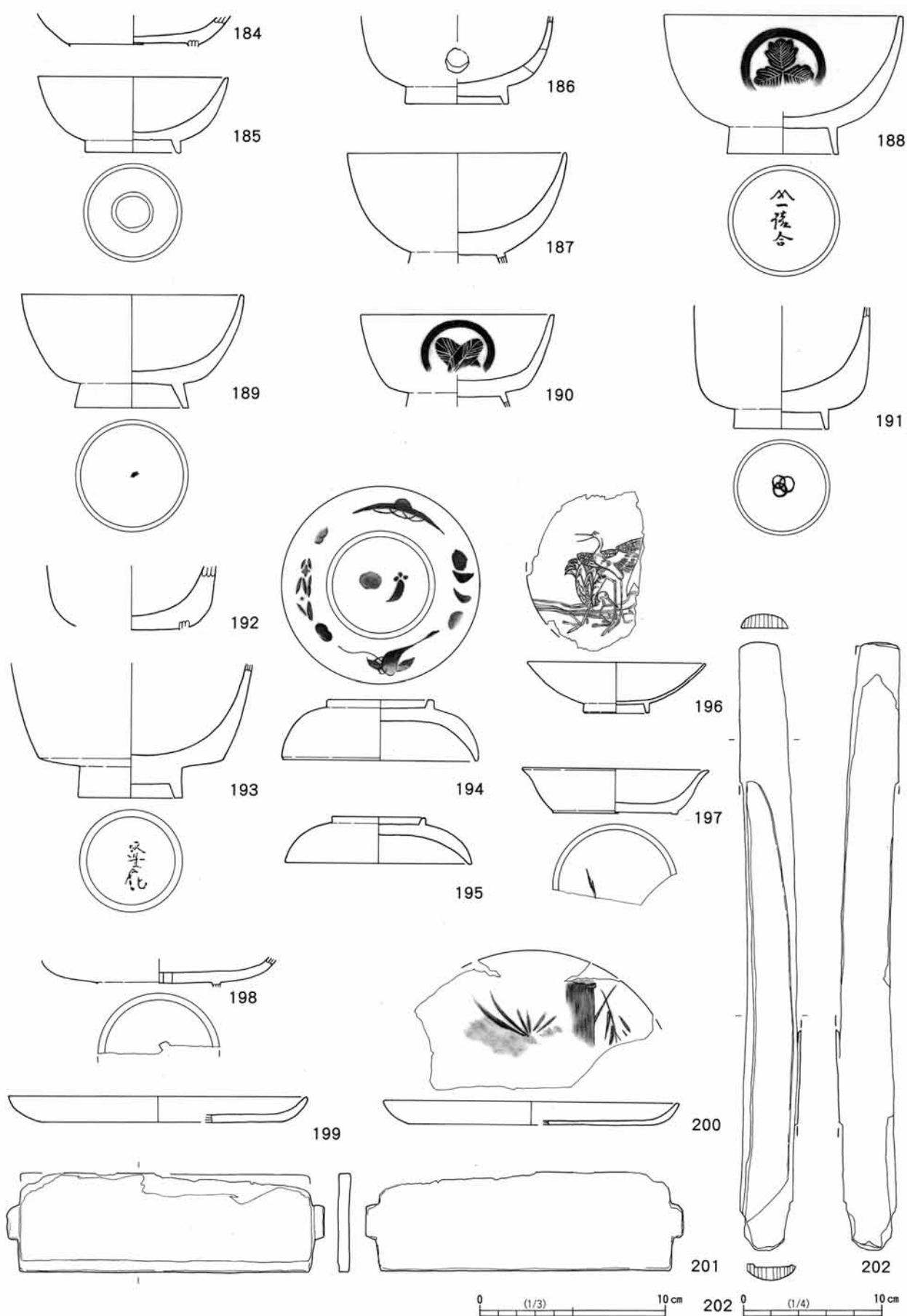
表3 出土遺物観察表 木製品

掲載 番号	土 層	グリッド	器種	法 量 (cm)			技 法 ・ 文 様	挿図	図版
				長	幅	厚			
173	2号護岸 6層	Lf 4-2	下駄	23.0	11.4	6.3	連歯下駄 横緒孔後歯前方、台表前方指圧痕	22	9
174	2号護岸 9層	Lg 3-1	下駄	24.1	9.2	4.1	連歯下駄 横緒孔後歯前方(前歯なし。欠損の可能性あり)		
175	2号護岸 9層	Le 4-5	下駄	16.2	6.2	3.6	連歯下駄 横緒孔後歯前方、台表前方指圧痕		
176	2号護岸 9層	Lf 4-2	下駄	22.5	14.4	11.5	陰卯下駄 横緒孔後歯後方、歯下方広がり、台裏断面山型		
177	1号溝 3層	Lf 2-4	下駄	24.1	10.0	3.6	削り下駄		
178	ビット	Lf 2-3	柄杓	高 8.2	径 10.6		曲げ物:一重、木皮留め、合せ留め個所に方形孔(柄装着部)、対面に孔(柄先端装着部) 底裏墨書「叶」		
179	2号護岸 9層	Lf 4-5	刷毛	19.7	<6.6>	0.6	柄上部有孔、綴部2条、綴溝上に各4ヶ(計8ヶ)有孔、刷毛装着切り込み挟み		
180	2号護岸 9層	Lf 4-2	傘	高 5.6	長径 4.9		部材:手元クロクロ		
181	2号護岸 9層	Lf 4-3	燭台	高 2.8	径 7.0		表面:方形鉄板装着、部材差し込み溝 裏面:墨書「□氏」、側面4単位の鉄釘留め		
182	2号護岸 6層	Lf 5-1	札類	12.6	10.5	0.6	五角形、上部有孔、墨書表「入極網□統／丁銀三刃／西笠巻村」 裏「□・・／□（多力）宮曾兵衛㊦／戊九月」		
183	2号護岸 6層	Lf 3-1	札類	44.3	3.9	1.5	墨書「□□□□（比力）／・・・／堀沢□□／□山□蔵□」	9	

6 漆製品（第23図、表4、図版3）

総点数53点が出土した。出土位置の内訳は、2号護岸施設から45点、1号土坑から2点、1号溝1点、Ⅰ～Ⅲ層、堀aなどから5点である。器種は椀・椀蓋・皿・箸・重箱・刀鞘・構造部材片が出土している。

椀では、緩やかに内湾ぎみに立ち上がる腰丸椀（184～188）と、やや腰が張る椀（189・190）、腰が張り器壁が垂直に立ち上がる壺椀（191・192）、腰部に稜をもつ腰椀（193）がある。加飾については、無文のものが多く出土しているが、外黒内赤の塗り分けの椀に家紋を3単位配したものがみられ、家紋には金色の漆で「丸に三ツ葉」、「丸に違い鷹の羽」がある。高台裏には2点（188・193）に銘が記されおり、判読できる188は「△請合」とあることから、製作者を示すものであろう。191には「㊦」文が施される。189には中心に点が付され、同様のものが本遺跡第8地点堀1から出土している。185の高台内には二次的な円形の削りがみられる。皿では復元口径10cm未満の小皿と10cm以上の皿がある。小皿には器壁の薄い196と、口縁が外反し高台の低い197が出土している。



第23図 漆製品

皿では高台を持つ198と、復元口径約16cmの高台を持たない199・200がある。加飾では碗蓋の194、皿類196・200では、金色・黒色・赤色漆を使用し、細かく丁寧な絵付けが施されている。また、186の体部下半に径1cm程の、198の見込み中心には径5mm程の孔が穿たれており、何らかに転用したものと考えられる。201は組み手の重箱、202は刀鞘で先端に鐳の装着痕が残る。外面には黒色漆が厚く塗られる。

本調査地点出土漆器における器面の塗りは、外面が黒色漆で、内面が赤色漆の「外黒内赤」がほぼ半分の割合を占め、次いで内外面黒色漆、内外面赤色漆となる。これは一定量の漆器が出土した、二ノ丸に位置する第8地点の堀1と同様の傾向を示す。また第8地点の堀1、これに接続する池2（第12地点）の出土遺物は、分析結果（四柳1997・2001）から炭粉渋下地であり、本調査地点においても同様に、安価な炭粉渋下地が使用されている可能性があるだろう。陶磁器で飯碗とされる広東碗の出土量が、非常に少ないことから日常器の飯碗として、漆器碗が使用されていたものと考えられる。

表4 出土遺物観察表 漆製品

掲載 番号	土 層	グリッド	器種	法 量 (cm)			外	内	文様	技 法 ・ 文 様	遺存	挿図	図版
				口 径	底 径	器 高							
184	1号土坑 4層	Lf 2-3	碗			1.7	黒	赤	無		1/2以下		
185	2号護岸 6層	Lf 2-3	碗	10.2	5.0	4.1	黒	黒	無	高台内に塗布後、円形の削り	ほぼ完形		
186	2号護岸 4 b層	Lg 3-1	碗		5.5	<4.8>	黒	赤	無	体部に二次的な穿孔あり	2/3以上		
187	2号護岸 4 b層	Lf 3-3	碗	11.8		5.9	黒	赤	無	内面に黒色物付着	2/3以上		
188	2号護岸 4 b層	Lf 2-3	碗	12.7	5.8	7.5	黒	赤	有	外面に金色漆で「三葉文」を3単位配す 高台裏銘赤色漆で「叡請合」	ほぼ完形		
189	2号護岸 9層	Le 4-5	碗	11.8	6.0	6.1	黒	黒	無	高台裏銘赤色漆で「・」	ほぼ完形		
190	2号護岸 4 b層	Lf 2-4	碗	(10.2)		<5.0>	黒	赤	有	外面に「丸に違い鷹の羽紋」を3単位配す	2/3以上		
191	攪 乱	Lf 2-5	碗		5.0	<6.7>	黒	赤	無	高台裏銘あり	1/2以上		
192	2号護岸 6層	Le 3-4	碗			<3.5>	黒	黒	無		1/2以下		
193	2号護岸 6層	Lf 2-2	碗		5.5	<7.2>	赤	赤	無	高台部内外面に黒色漆を施す。高台裏銘を赤色漆で記す	2/3以上		
194	2号護岸 4 b層	Lf 2-4	蓋	受部径 10.4	摘み径 5.6	3.3	黒	赤	有	金色漆・赤色漆で「草花文」を施す	2/3以上		
195	2号護岸 6層	Lf 3-2	蓋	受部径 9.9	摘み径 5.0	2.5	黒	黒	無		2/3以上		
196	2号護岸 4 b層	Lf 2-4	小皿	(9.5)	(3.4)	2.8	赤	赤	有	見込みに黒色漆、金色漆で「鶴文」を施す	1/2以上		
197	2号護岸 4 b層	Lg 4-1	小皿	(9.9)	(6.6)	2.4	赤	赤	有	高台内外面に黒色漆を施し赤色漆で文様を施す	1/2以上		
198	2号護岸 6層	Lf 4-4	皿			<1.4>	黒	赤	無	二次的に穿孔あり	1/2以上		
199	2号護岸 9層	Lf 4-4	皿	(16.0)	(13.1)	1.4	黒	黒	無		1/2以下		
200	2号護岸 3層	Lf 2-3	皿	(15.8)	(13.2)	1.3	黒	黒	有	金色漆等で「竹文」を施す	1/2以下		
201	2号護岸 3層	Lf 4-3	箱 (部材)	幅 <17.0>	長 <5.3>	厚 0.6	黒	赤	無		破片		
202	2号護岸 5層	Lf2-2	鞘	最大長 <43.9>	最大幅 <4.0>	最大厚 <1.2>	黒		無	鐳装着痕が残る	1/2以上		

7 金属製品 （第24・25図 表5，図版10）

金属製品は、鉄製品、銅製品および銅と亜鉛の合金である真鍮製品があるが、肉眼では判断が難しいものも多い。出土した遺物の用途は、広範で多様な器種が認められる。出土総点数は102点で、2号護岸施設からは72点が出土している。特に木組F₂～F₅周辺から出土する傾向がみられる。

203～206は煙管である。図化分を含め8点が出土し、内訳は雁首1点と吸口7点である。推定生産年代は、古泉氏の編年（古泉2001）によれば、18世紀以降である。203は火皿内にヤニ（炭化物）が付着しており左側に敲打痕が残る。204～206は吸口で、206には羅字の一部が残存している。

装身具では、簪（207～209）が3点出土した。208は「雀と笹」をモチーフとした装飾部品を装着するタイプで、材質は真鍮に渡銀される。209は桜花が装飾されている。210は筭の可能性もある。銅板を丸めて端部を鐳附

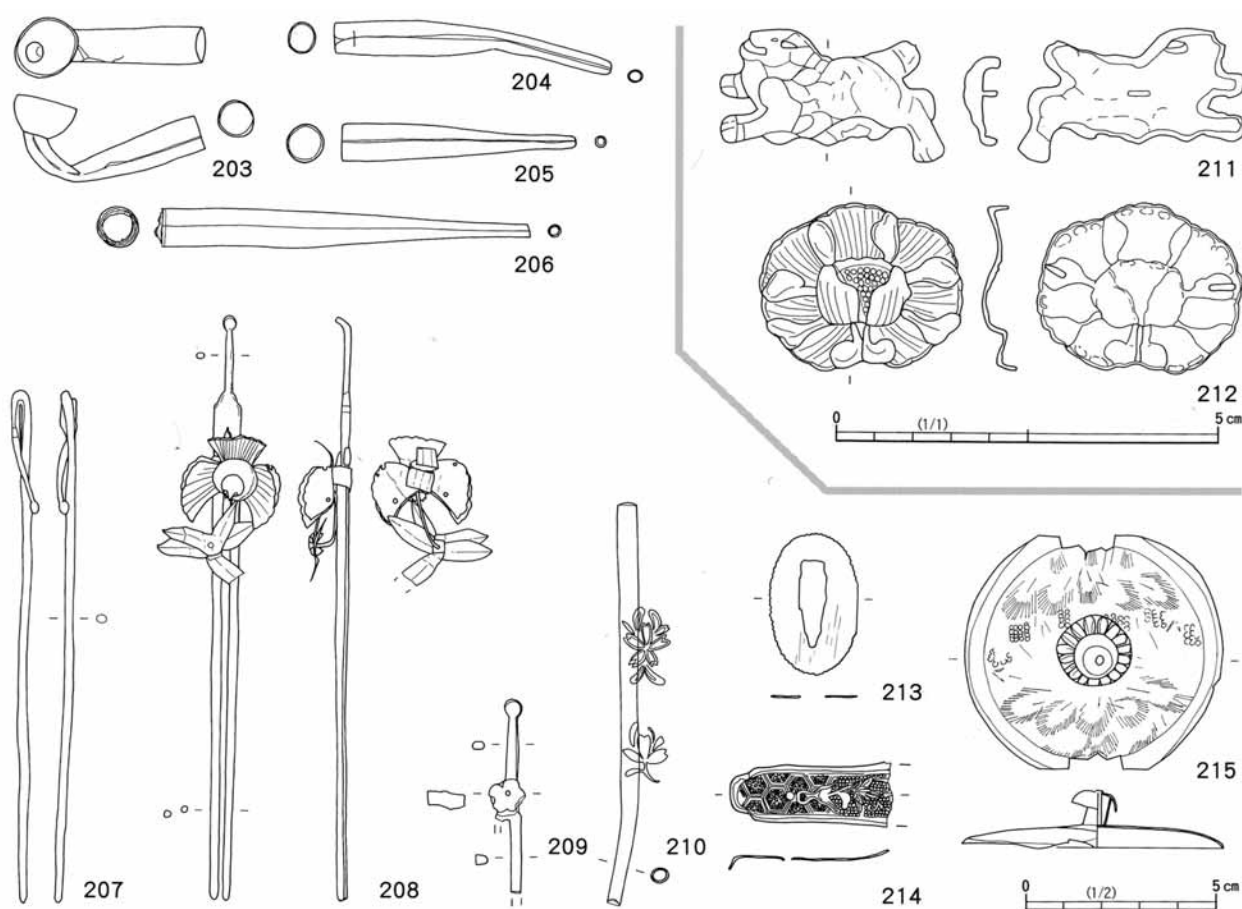
し、文様部分に薬品保護剤を塗布後、薬品を掛けて文様周囲の金属表面を腐らす「クサラシ」技法を用いて、桜文が施される。刀装具は5点が出土し、211は鑄造で「獅子」を、212は鍛造で「牡丹」をモチーフとする。212は裏面の左右両端に留め金具が残存している。213は切羽で周縁に刻み目が巡る。またⅡ層出土遺物に二重鑑（第Ⅴ章分析資料②）がある。外面は飾り鑢目が施され、折り込まれた端部には刻みが入る。

214は調度品の飾り金具と考えられる。線刻で「唐草文」、「亀甲繋ぎ文」が施され、地文は魚々子文である。釘穴が1箇所遺存する。215は蓋で外面に松文が施される。

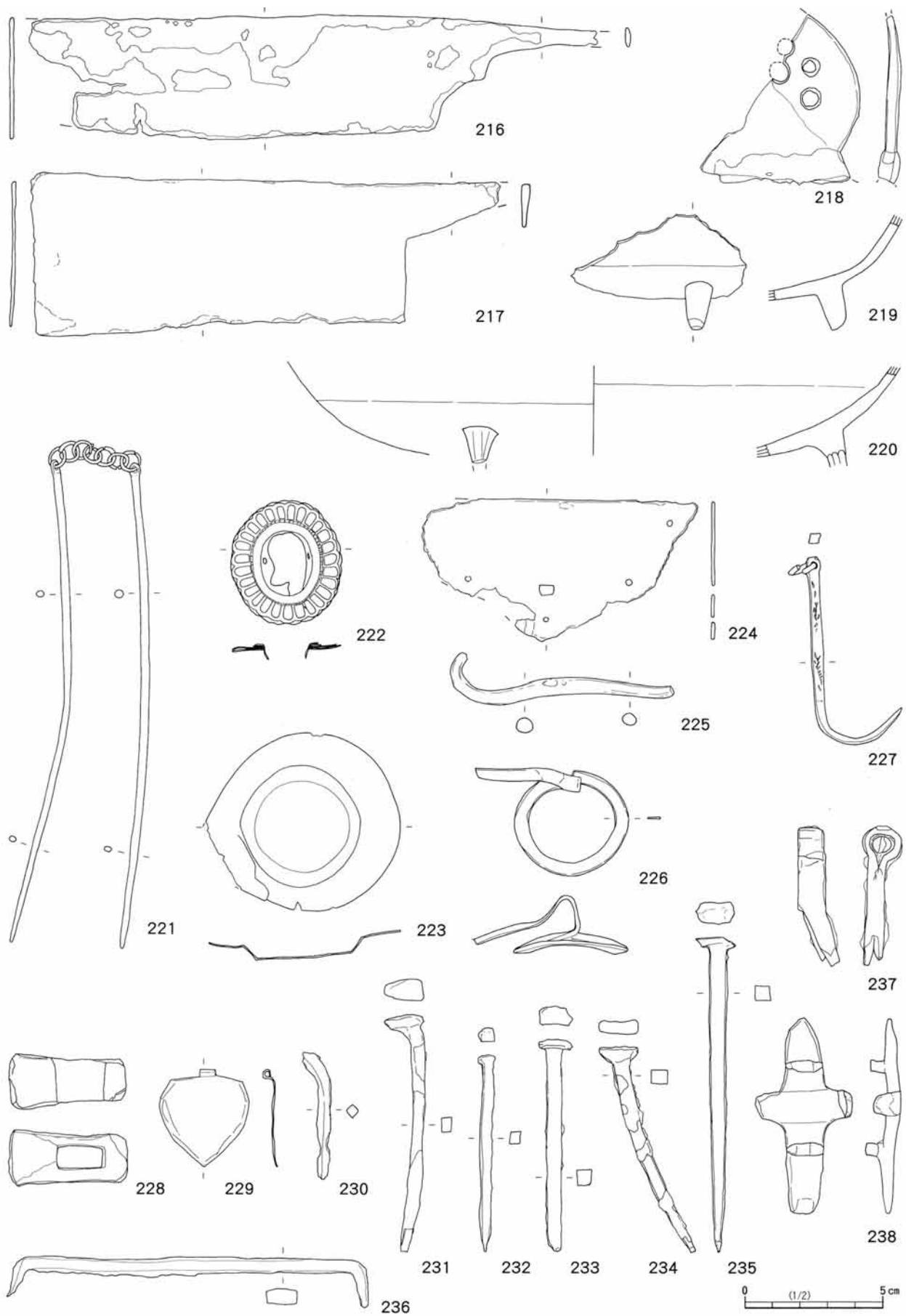
調理道具では、包丁（216・217）が5点、鍋（218～220）が3点出土している。221は火箸と考えられるが、長さが短いため小型の加熱具に使用されたものと考えられる。

222・223は襖等に使用される引き手金具。222は三枚の部品からなり、周縁に刻みや菊花弁状の透かしが施されている。223は表面全体に「クサラシ」技法によって魚々子文が施される。用途については茶托の可能性も考えられる（※1）。224は釘穴が4箇所確認でき、厚さが1mmと薄いことから簞笥の飾り金具、225は簞笥の引き手と思われる。226は灯芯押えである。227は釣り針状の金具で、側面は線刻で装飾され、上端に穿孔し径1cmの輪金具が装着される。

工具類では、小型の金槌（228）、接合具として蝶番の部品（229）、釘が出土している。釘（230～235）はⅠ～Ⅲ層中から12点、2号護岸施設から25点の計37点が出土している。この内訳は頭巻釘15点、その他は折釘等で、頭巻釘の頭部が欠損しているものも含まれる。長さは1寸～2寸が主体となる。他に瓦釘が1点出土している。錠（236）等も含めて建築部材が、護岸施設構築材として転用された際に、同時に構築土に埋まったものと考え



第24図 金属製品（1）



第25図 金属製品 (2)

られる。

また、237・238などの用途不明金具のほか、板状製品、棒状製品が出土している。板状製品の中には部材片を板状に伸ばしたもの（第Ⅴ章分析資料①・③）がみられ（※2）、再利用目的と思われるものが含まれていた。

（※1・2） 久保智康氏の御教示による。

表5 出土遺物観察表 金属製品

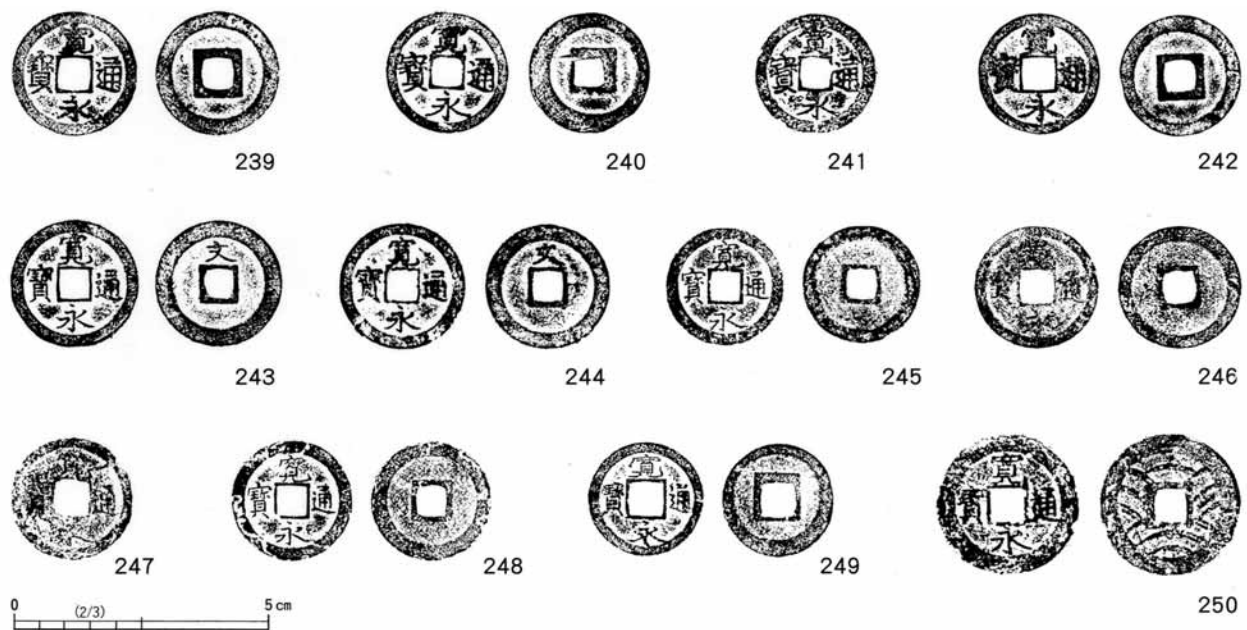
掲載 番号	土 層	グリッド	器種	法 量 (cm)				重 量 (g)	観 察 所 見	材 質	遺 存	推定年代	挿図	図版
				最大長	最大幅	最大厚	火皿径							
203	2号護岸 9層	Le 5-4	煙管・雁首	<5.0>	羅字径 1.4	最大高 <2.2>	火皿径 1.6	6.1	火皿内にヤニ（炭化物）付着 雁首左側面に打点	真鍮か	完形	18世紀以降	24	10
204	2号護岸 8層	Lf 3-2	煙管・吸口	<7.3>	羅字径 0.8	吸口径 0.3		4.9	羅字一部残存、緑青付着	銅か	完形	18世紀以降		
205	4号土坑 1層	Lf 2-4	煙管・吸口	6.2	羅字径 1.0	吸口径 0.3		5.1		真鍮か	完形	18世紀以降		
206	2号護岸 3層	Lf 3-4	煙管・吸口	9.8	羅字径 1.0	吸口径 0.3		7.0	羅字一部残存	真鍮か	完形	18世紀以降		
207	1号土坑	Lf 2-3	簪	<13.5>	<0.5>			4.8	耳搔き付	銅	1/2以上			
208	2号護岸 5層	Lf 3-2	簪	15.4	0.7	0.4		9.6	耳搔き付、装飾部品取り外し可 装飾部長3.8cm、装飾部幅3.2cm 装飾部厚1.4cm、(雀と笹)	真鍮	完形			
209	2号護岸4 b層	Lf 4-5	簪	5.2	1.0	0.5		2.2	耳搔き付、装飾部(桜)	銅	1/2以下			
210	2号護岸 3層	Lf 4-4	筭	<10.7>	—	0.5		5.2	陽刻で「桜」、「クサラシ」技法	銅か				
211	2号護岸 8層	Lf 3-2	刀装具	長軸 2.9	短軸 1.8	0.5		4.6	鋳造、「獅子」か	銅か	完形			
212	2号護岸4 b層	Lf 4-5	刀装具	長軸 2.7	短軸 2.3	0.5		2.9	鍛造、左右両端に留具残存、「牡丹」か	銅か	完形			
213	2号護岸 8層	Lf 2-2	切羽	3.7	<2.3>	0.1		2.3	穿長2.3cm、穿幅0.7cm、縁部刻み	銅か	ほぼ完形		25	10
214	2号護岸 6層	Lf 3-5	飾金具	<4.3>	1.7	0.4		1.7	針穴(残存1)、線刻で「唐草文」 「亀甲繫ぎ文」、地「魚々子」	銅か				
215	2号護岸 6層	Lf 4-5	蓋	受部径 6.8	摘み径 1.1	器高 1.5		12.3	外部線刻で「松文」、渚子の蓋か	銅	完形			
216	2号護岸 6層	Lf 4-4	包丁	<20.5>	4.5	0.2		42.0		鉄	2/3以上			
217	2号護岸 6層	Lf 4-5	包丁	<17.0>	6.0	0.3		77.1		鉄	2/3以上			
218	2号護岸 8層	Lf 2-2	鍋	<6.2>	<5.7>	<0.8>		32.9	把手(耳部分)、穿孔(残4)	鉄	破片			
219	2号護岸 6層	Lg 4-1	鍋			器高 <4.2>		35.5	足(残1)	鉄	破片			
220	2号護岸 9層	Lf 4-2	鍋			器高 <3.7>		112.3	足(残1)、炭化物付着	鉄	破片			
221	2号護岸 3層	Lf 4-5	火箸	17.6	箸径 0.3	環径 0.8		14.2		銅	完形			
222	2号護岸 3層	Lf 4-4	金具	4.5	4.0	0.6		4.6	側部釘穴2、引手金具か	銅	ほぼ完形			
223	2号護岸 6層	Lf 3-1	引手金具	長軸 7.0	短軸 6.6	1.1		6.6	地文「魚々子」、「クサラシ」技法	銅	2/3以上		25	10
224	4号土坑 1層	Lf 2-4	金具	5.2	<10.0>	0.1		15.8	針穴(残4)、穿孔1	鉄	2/3以上			
225	2号護岸 8層	Lf 3-2	把手	<8.1>	<1.9>	0.6		13.9		鉄				
226	2号護岸 8層	Lf 3-2	灯芯押え	径 4.1		器高 <2.1>		7.9	底部環状、(推定高5.3cm)	銅	完形			
227	2号護岸 3層	Lf 3-2	釣針状金具	6.8	3.2	0.3		6.2	輪金具(φ1.0cm)、線刻文様あり	銅	完形			
228	2号護岸 3層	Lf 2-3	金槌	2.0	4.4	2.1		51.9		鉄	頭部完形			
229	2号護岸 8層	Lf 2-2	蝶番凸形	3.5	3.3	0.6		4.2		銅	破片			
230	1号土坑 1層	Lf 2-4	和釘 切釘	<4.6>	0.5	頭奥行 0.5	頭幅 0.3	2.6		鉄	完形			
231	5号土坑 4層	Lg 3-1	和釘 頭巻釘	8.6	0.5	頭奥行 0.8	頭幅 1.4	9.8		鉄	完形			
232	2号護岸 8層	Lf 3-2	和釘 頭巻釘	7.2	0.5	頭奥行 0.5	頭幅 0.6	5.0		鉄	完形			
233	2号護岸4 b層	Lf 4-5	和釘 頭巻釘	7.7	0.5	頭奥行 0.7	頭幅 1.2	11.4		鉄	完形			
234	1号土坑 1層	Lf 2-3	和釘 頭巻釘	<7.4>	0.6	頭奥行 0.5	頭幅 1.4	6.9		鉄	完形			
235	2号護岸 6層	Lf 5-3	和釘 頭巻釘	<11.5>	0.6	頭奥行 0.8	頭幅 1.4	16.4		鉄	完形			
236	2号護岸 6層	Lf 3-2	錠	1.8	13.1	1.1		43.4		鉄	完形		25	10
237	4号土坑 1層	Lf 2-4	金具	<5.0>	<1.6>	1.5		8.3	蝶番の部品か	鉄				
238	2号護岸 5層	Lf 3-2	金具	<7.1>	<3.5>	<1.3>		18.4		鉄				10

8 銭 貨 (第26図, 表6)

近世の銭貨の出土総点数は12点で、2号護岸施設全体に分散して出土している。寛永通寶の銭座、鑄造時期については諸説あり、明確ではない。また、銭貨の成分分析を実施していないため、観察表の初鑄年、推定生産地は参考程度にとどめた。

出土した銭貨の内訳は、古寛永通寶4枚、文銭2枚、新寛永通寶5枚、四文銭・11波1枚である。出土状態から、陶磁器・土器類を中心とした家財に混入して廃棄されたものと考えられる。

なお、明治10年鑄造の一銭硬貨が、1号護岸施設構築土から1点出土している。



第26図 銭 貨

表6 出土遺物観察表 銭 貨

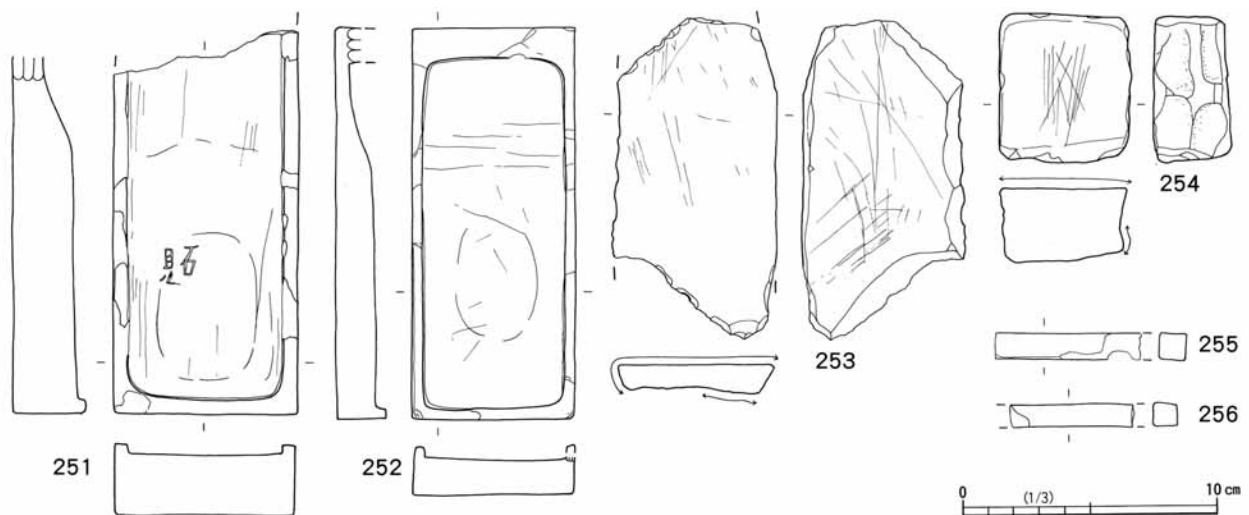
掲載 番号	土 層	グリッド	銭 銘	細 分	材質	法 量 (cm)			重 量 (g)	初鑄年代	推 定 鑄造地	備考	挿図	図版
						外径	穿径	厚						
239	2号護岸 4 b層	Lf 4-4	寛永通寶 (銅一文銭)	古寛永	銅	2.45×2.45	0.6×0.6	0.9	3.0	1636(寛永13)年			26	
240	2号護岸 4 b層	Lf 3-3	寛永通寶 (銅一文銭)	古寛永	銅	2.4×2.4	0.6×0.6	1.1	3.5	1636(寛永13)年				
241	2号護岸 8層	Le 4-2	寛永通寶 (銅一文銭)	古寛永	銅	2.35×2.35	0.6×0.6	0.7	2.0	1636(寛永13)年				
242	2号護岸 9層	Lf 4-3	寛永通寶 (銅一文銭)	古寛永	銅	2.4×2.41	0.6×0.6	1.1	3.4	1636(寛永13)年				
243	2号護岸 6層	Lf 3-2	寛永通寶 (銅一文銭)	文銭	銅	2.5×2.5	0.6×0.6	1.4	4.3	1668(寛文8)年	江戸亀戸	背面に「文」		
244	2号護岸 8層	Lf 2-2	寛永通寶 (銅一文銭)	文銭	銅	2.25×2.25	0.7×0.7	0.7	1.9	1668(寛文8)年	江戸亀戸	背面に「文」		
245	2号護岸 4 b層	Lf 3-3	寛永通寶 (銅一文銭)	新寛永	銅	2.33×2.32	0.6×0.6	0.9	2.5	1697(元禄10)年				
246	2号護岸 5層	Lf 3-1	寛永通寶 (銅一文銭)	新寛永	銅	2.43×2.42	0.6×0.65	0.9	2.7	1697(元禄10)年				
247	2号護岸 6層	Lf 2-1	寛永通寶 (銅一文銭)	新寛永	銅	2.41×2.38	0.7×0.7	0.6	1.7	1697(元禄10)年				
248	2号護岸 6層	Lg 4-1	寛永通寶 (銅一文銭)	新寛永	銅	2.35×2.35	0.6×0.6	0.9	2.5	1697(元禄10)年				
249	2号護岸 8層	Lf 2-2	寛永通寶 (銅一文銭)	新寛永	銅	2.48×2.48	0.6×0.6	1.1	3.4	1697(元禄10)年				
250	2号護岸 4 b層	Lf 2-4	寛永通寶 (真鍮四文銭)	背面11波	真鍮	2.8×2.8	0.6×0.65	1.0	2.5	1769(明和6)年				

9 石製品（第27図，表7，図版9）

硯は4点出土している。251は「硯」の誤記と思われる線刻が残る。砥石は12点が出土している。その内、4点が仕上げ砥で厚さの薄い製品である。石質は頁岩製が3点で、他は粘板岩製である。中砥は3点で、流紋岩や凝灰岩である。粗砥は流紋岩および凝灰岩製で、254以外は大型の置き砥石である。他に茶臼の上臼小片が出土している。

10 硝子製品（第27図，表8）

2点出土している。255・256は黄色を主体に黒色が混じる半透明の棒状製品で、筭と考えられる。硝子の簪・筭といった髪飾りは、鼈甲や銀細工製品に比べ安価で入手しやすかったとされ、本出土品は色調などから鼈甲を模した製品であろう。同一個体の可能性がある。



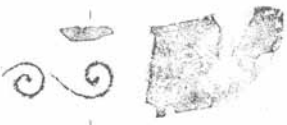
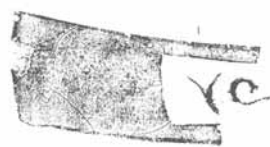
第27図 石製品・硝子製品

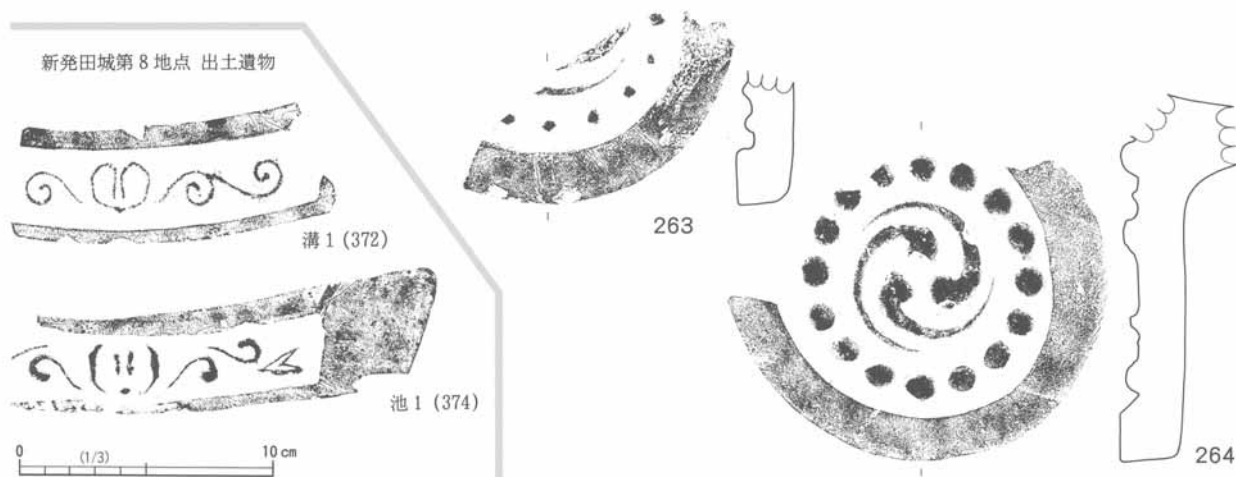
表7 出土遺物観察表 石製品

掲載 番号	土 層	グリッド	器種	法 量 (cm)			重量(g)	観 察 所 見	遺存	挿図	図版
				長	幅	厚					
251	2号護岸4b層	Lf 4-4	硯	<15.1>	7.2	2.8	512.4	横方向の擦痕、表面に「硯」の誤字か？ 粘板岩	2/3以上	27	9
252	2号護岸4b層	Lf 3-4	硯	15.4	6.4	2.0	255.7	縦方向の細かい擦痕、粘板岩	2/3以上		
253	2号護岸6層	Le 3-5	砥石	<12.8>	6.4	1.2	123.4	砥面3面、擦痕、線条痕あり、頁岩、仕上げ砥	完形		
254	2号護岸8層	Lf 2-2	砥石	5.9	5.2	3.1	160.5	砥面6面、擦痕、流紋岩、粗砥	ほぼ完形		

表8 出土遺物観察表 硝子製品

掲載 番号	土 層	グリッド	器種	法 量 (cm)			重量(g)	観 察 所 見	遺存	挿図	図版
				長	幅	厚					
255	2号護岸6層	Lf 4-3	筭	<3.8>	径 0.7		5.8	黄色に黒色の斑模様、半透明、256と同一個体の可能性	破片	27	
256	2号護岸8層	Lf 3-1	筭	<3.3>	径 0.6		4.2	黄色に黒色の斑模様、半透明、255と同一個体の可能性	破片		

	「江戸式」系	「大坂式」系
黒	 257	 260
瓦	 258	 261
赤瓦	 259	 262



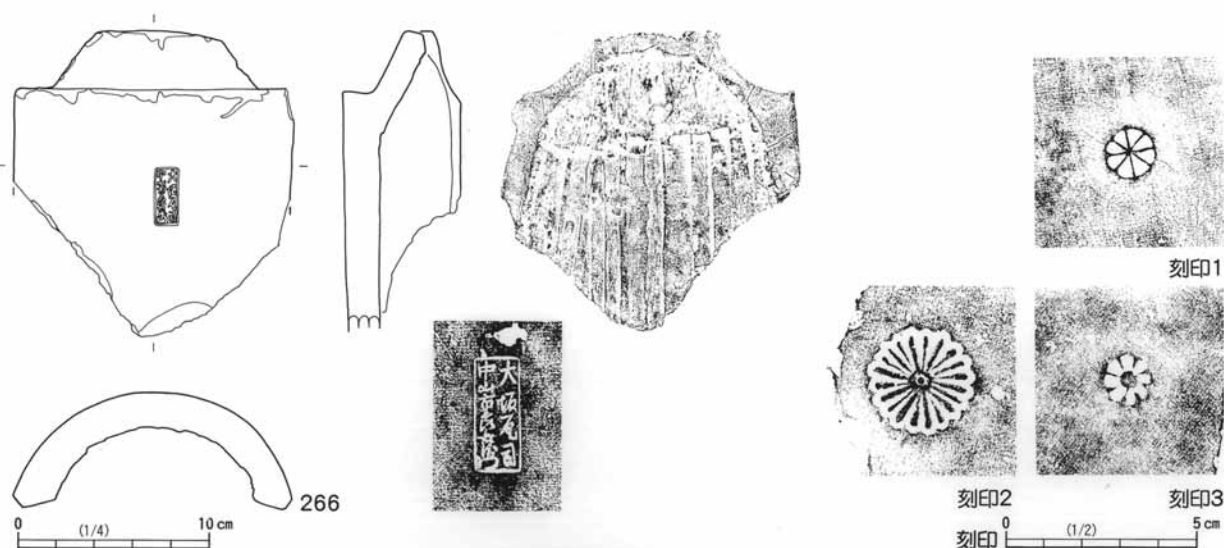
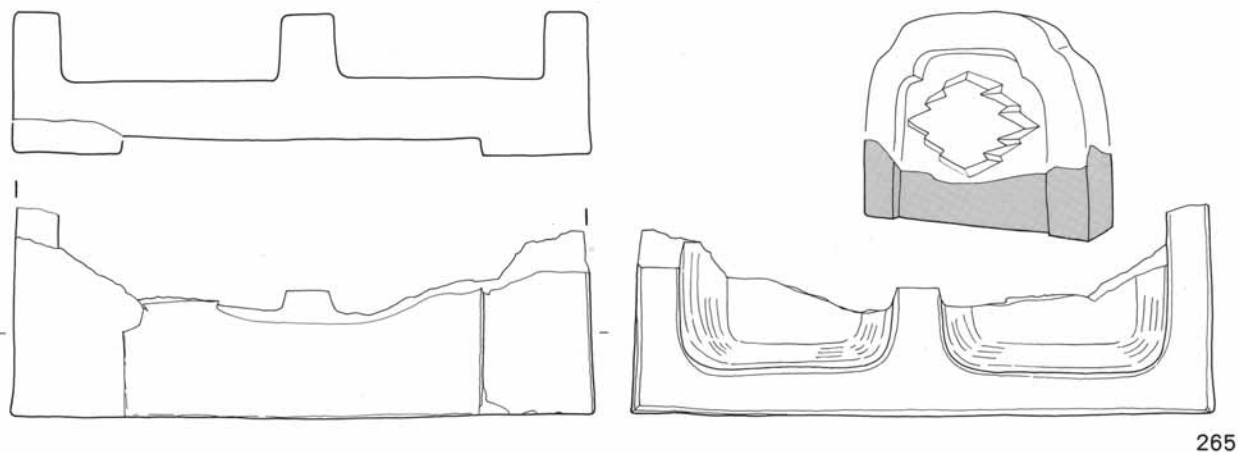
第28図 瓦 (1)

11 瓦 (第28・29図, 表9, 図版9)

本地点の調査では、軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦・隅瓦が一定量出土した。軒棧瓦・棧瓦については確認できていないが、軒平瓦・平瓦と認識している可能性がある。出土遺物は破片資料が多く、全ての瓦について取り扱うことはできないため、今回の調査では役瓦、軒瓦の瓦当文様が残るもの、法量がわかる残りのよいもの、刻印を有する瓦のみを抽出した。なお、瓦の出土量は少なくないが、瓦溜まりといった状況はみられなかった。

軒平瓦 14点が出土している。燻し焼きにされた黒瓦と、施釉された赤瓦が出土した。瓦当に施された文様は、「均整唐草文」で、花状の中心飾り・唐草下上二反転・子葉から構成される「江戸式」（加藤1989, 金子1996）と、Y字状の脇と横長の萼を有する中心飾りを特徴とする「大坂式」（金子1996）に系譜が求められるものに大別でき、各文様形態で黒瓦・赤瓦が出土している。

「江戸式」系の瓦（257～259）は5点が出土している。257は唐草文のみの遺存であるが、第8地点出土資料（372）と同様の文様形態と考えられ、18世紀以降に比定される。258・259は、第1・2唐草と子葉部分が遺存



第29図 瓦（2）

する。同様の文様とみられる第8地点出土資料（374）から、19世紀以降に比定される。

「大坂式」系（260～262）は8点が出土している。260は中心飾りまで確認でき、子葉先端は均等に分かれる。また右外縁幅が狭い。261の子葉の先端は内側に比べて外側が長く、中心飾り周辺についても、260とは若干異なっていると想定される。262は259に比べ薄く施釉される。

軒丸瓦 9点が出土している。すべて黒灰色の燻し瓦である。瓦当文様は、右巻きの三つ巴文のみで構成されたものが、Ⅱ層から1点出土している以外は、すべて左巻きの連珠三つ巴文で連珠数は16である。珠文の大きさと2種に細分される。瓦当径は7.5cm前後のものが占める。

隅瓦 Ⅱ層から1点（265）が出土している。新発田藩主溝口家の五階菱を持った家紋瓦と考えられる。

刻印について 出土した5点の瓦に刻印が確認された。266は陰刻で一重角枠内に「大坂瓦司中山市郎右衛門」と押印される。本地点では2点が出土しているが、同様の刻印が他の調査地点からも複数出土している。丸瓦にみられることが多いが、第8地点では18世紀代の堀から、棧瓦に伴うものも出土している。現時点では赤瓦に刻印されたものは確認されていない。瓦に地名・人名を具体的に入れるようになったのは、19世紀以降とされ（金子1998）、本遺跡出土の瓦の刻印も同様の時期が求められよう。記号による刻印は3点が出土し、すべて菊花文（刻印1～3）である。

新発田城における瓦葺きの建物は、現存する各絵図によると、櫓および櫓門、他に一部の塀などに限られる。明治初年の古写真では、本丸御殿の屋根が柿葺きと認められ、その他の建物についても、瓦葺き以外の板葺き、あるいは茅葺きが主であったものとみられる。

本遺跡で瓦が多量に出土するようになる19世紀代の瓦葺きの状況を示す史料として、新発田藩年代記である『御記録巻之十』によれば、文政11（1828）年、城内二、三曲輪の所々冠木門屋根が板葺では度々破損する為、瓦葺きに統一することを幕府に願い出て許可されている。『御在城御留守行事』では、文政3（1820）年に町屋での瓦葺きの許可願いが出され、『嘉永元年行事』（1848年）には、表御門・中ノ御門・追手御門瓦屋根の修復箇所が多いため、葺替して全部瀬戸瓦に改めることで、今後の修復年数を30年延長できる見積書を係に提出し、瓦葺きに改める決定をするなどの記載がみられる。これらから、瓦の需要の拡大が窺え、またそれに応える供給力が備わっていたものと考えられる。

新発田城出土の瓦には、「江戸式」、「大坂式」の両文様形態において、細部に独自性をもつ意匠が含まれ、黒瓦と赤瓦に同范とみられる資料が出土していることから、瓦工人を招聘するなどして、在地で製作されたものではないかと考えられる。在地での瓦製作を窺わせる史料としては、『弘化四年行事』（1847年）に、三階櫓の屋根葺替えのため、瓦焼きに入用の薪の支出を決めるとの記載がある。

18世紀後半、江戸では防火対策などから大名藩邸の屋根を瓦葺きに改めさせ、町屋に対しても瓦葺きの許可が出されている。こうした都市部での瓦葺きの普及による需要増加に伴った瓦生産者の増加を背景として、棧瓦など高い生産技術とともに「江戸式」の文様形態が地方へ普及したものと捉えられ、同様に「大坂式」の文様形態も、266の刻印が示すような大坂瓦司が在地での瓦製作に関与したものと理解したい。また、隣藩の会津若松城の発掘調査（近藤1998）で、19世紀代の瓦に「江戸式」の文様形態が存在することからも、地方への瓦製作技術の移殖の動きをみることができよう。

表9 出土遺物観察表 瓦

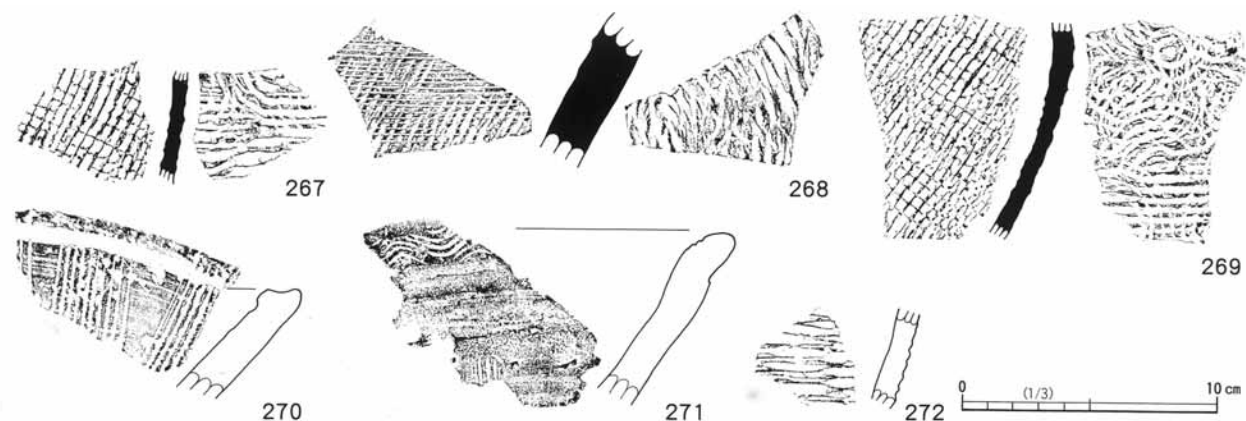
掲載 番号	土 層	グリッド	種 類	色 調	法 量 (cm)			重量 (kg)	技 法 ・ 文 様	胎 土	挿図	図版	
					全長	全幅	厚						
257	2号護岸 6層	Lf 4-4	軒平瓦	黒 瓦	黒灰色	<8.4>	<11.4>		0.34	板作り・型当て・型押し成形 瓦当文様：江戸式系「均整唐草文」	灰白色 砂粒を少量含む	28	9
258	2号護岸 6層	Le 4-5	軒平瓦	黒 瓦	黒灰色	<3.5>	<7.0>		0.13	板作り・型当て・型押し成形 瓦当文様：江戸式系「均整唐草文」	灰色 砂粒を少量含む		
259	2号護岸 1層	Lf 5-4	軒平瓦	赤 瓦	褐色	<3.0>	<8.5>		0.2	板作り・型当て・型押し成形、カキヤブリ痕 瓦当文様：江戸式系「均整唐草文」	暗灰色 砂粒を多量含む		
260	2号護岸 6層	Le 5-5	軒平瓦	黒 瓦	暗灰色	<7.7>	<13.9>		0.4	板作り・型当て・型押し成形 瓦当文様：大坂式系「均整唐草文」	灰色 砂粒を少量含む		
261	2号護岸 4 b層	Lf 3-3	軒平瓦	黒 瓦	黒灰色	<6.0>	<12.4>		0.37	板作り・型当て・型押し成形 瓦当文様：大坂式系「均整唐草文」	灰色 砂粒を少量含む		
262	2号護岸 8層	Lf 2-2	軒平瓦	赤 瓦	暗赤褐色	<4.5>	<10.2>		0.22	板作り・型当て・型押し成形 瓦当文様：大坂式系「均整唐草文」	淡褐色 砂粒を含む		
263	2号護岸 9層	Lf 4-2	軒丸瓦	黒 瓦	黒灰色	瓦当外径(7.5)、内径 (5.5)/瓦当厚2.2			0.15	板作り・型当て・型押し成形 瓦当文様：三つ巴文左巻き、連珠	灰白色 砂粒(細)を含む	29	9
264	2号護岸 9層	Lf 4-2	軒丸瓦	黒 瓦	黒灰色	瓦当外径7.4、内径5.2/ 瓦当厚2.5			0.84	板作り・型当て・型押し成形、カキヤブリ痕 瓦当文様：三つ巴文左巻き、連珠16	灰白色 砂粒含む		
265	Ⅱ層	Lf 4-4	隅瓦	赤 瓦	橙色	11.1	30.7	高7.5	1.62	板作り・型押し成形、家紋瓦の可能性あり	淡橙褐色 砂粒多量含む		
266	2号護岸 6層	Lf 4-2	丸瓦	黒 瓦	黒灰色	全長16.2/玉縁長3.1/胴部 幅14.6/胴部内径10.4/胴部 高6.1/胴部厚1.9			0.63	外面、刻印「大坂瓦司中山市郎衛門」 内面、布目痕・板状工具による叩き痕 接地面形態、二段面取り	灰色 粗砂を含む		
刻印 1	2号護岸 4 b層	Lf 3-4	丸瓦	黒 瓦	黒灰色				0.7	外面、刻印 8弁菊花文、ヘラ状工具による縦方向 のミガキ、内面、コビキ痕、布目痕、抜き取り紐痕	灰白色 粗砂を少量含む		
刻印 2	Ⅱ層	Lf 4-5	平瓦	黒 瓦	灰色				0.12	外面、刻印 20弁菊花文、内面、コビキ痕	灰白色 砂粒を含む		
刻印 3	2号護岸 6層	Lg 3-1	丸瓦	黒 瓦	黒灰色				0.48	外面、刻印 8弁菊花文、縦方向のミガキ 内面、布目痕、接地面形態、一段面取り	灰白色 粗砂を少量含む		

12 近世以前の遺物 （第30図，表10，図版10）

本遺跡では過去の調査で，古代から中世にかけての遺構を検出し，多くの遺物が出土している（第Ⅰ章3）。本地点においても，近世以前の土地利用が想定されるが，これらの時期に属する遺構は検出されていない。削平され消滅した可能性もあるが，今回の調査における出土遺物は，その出土状況から，後世の土の移動とともに混入したものと考えられる。

古代の遺物 須恵器6点，土師器が1点出土している。須恵器は坏蓋の小片と，甕片(267～269)が出土している。甕は外面に平行タタキ目がみられ，自然釉がかかる。内面は同心円当て具痕が残り，267・269は平行当て具痕を併用している。須恵器の胎土は，肉眼観察から在地窯である五頭山麓窯跡群（新発田市・阿賀野市），元山窯跡群（荒川町），下小中山・貝屋窯跡群・ホーロク沢窯群（新発田市）のいずれかの製品と考えられる。土師器は外面にタタキが施された鍋の小片が出土している。

中世の遺物 6点が出土した。270は越前産の播鉢である。播り目間の幅が密で，口縁端部まで延びる。口縁部内面には沈線状の窪みが巡り，16世紀前半に比定される。271は珠洲産の口縁端部に波状文が施される片口鉢で，吉岡氏編年（吉岡1994）のⅥ期（15世紀後半），272および他の遺物は珠洲産の甕片で，Ⅴ期（15世紀前半）に比定される。また，天目茶碗（68）が1点出土しており，藤沢氏の編年（藤沢1996）の後Ⅱ期（15世紀前半）に比定される。



第30図 近世以前の遺物

表10 出土遺物観察表 近世以前の遺物

掲載 番号	土 層	グリッド	種類	器種	法 量 (cm)			技 法	遺存	推定年代	挿図	図版
					口径	底径	器高					
267	2号護岸 6層	Lf 4-5	須恵器	甕			<4.5>	内面 平行アテ具痕→同心円アテ具痕 外面 格子タタキ	破片	9世紀	30	10
268	2号護岸 8層	Lf 2-2	須恵器	甕			<6.2>	内面 同心円アテ具痕 外面 平行タタキ←横方向カキ目	破片	9世紀		
269	2号護岸 6層	Lf 4-2	須恵器	甕			<8.7>	内面 平行アテ具痕→同心円アテ具痕 外面 格子タタキ	破片	9世紀		
270	2号護岸 6層	Lf 4-3	陶器 越前	播鉢			<4.5>	摺目10条1単位 焼成不良	破片	16世紀前半		
271	2号護岸 8層	Lf 3-2	陶器 珠洲	片口鉢			<6.9>	口縁端面に「波状文」が施される。摺目4条1単位	破片	Ⅵ期（15世紀後半）		
272	1号護岸 2層	Lf 5-1	陶器 珠洲	甕			<4.1>	外面タタキ	破片	Ⅴ期（15世紀前半）		10

第Ⅴ章 自然科学分析

新発田城跡第19地点出土金属成分分析

竹原弘展（株式会社 パレオ・ラボ）

はじめに

新発田城跡第19地点より出土した金属製遺物について蛍光X線分析を行い、その材質を検討した。

1 試料と方法

分析対象資料は、新発田城跡第19地点より出土した金属製遺物3点である（表①・第②図・図版1～3）。

表1 分析対象資料一覧

分析 番号	土 層	グリッド	種 類	器 種	法 量 (cm)	重量(g)	備 考
①	3層	LF 3-2	転用素材?	板状金属製品	5×4×(≦0.01)	2.2	鋏もしくは刀子で切り、長方形に成形。
②	Ⅱ層	LF 4-4	刀装具	ハバキ (金着せ部分)	3×1.5×(≦0.01)	1.2	表面に斜方向のヤスリ目。三辺の縁を折り曲げ、うち、短辺の二辺は直交方向に連続する平行沈線を入れる。
③	8層	LF 3-2	転用素材?	板状金属製品	6.7×4.2×0.06	16	長方形に周囲をちぎって成形。表裏面に、細かい凹凸。

分析装置はエネルギー分散型蛍光X線分析装置である（株）堀場製作所製分析顕微鏡XGT-5000 Type IIを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV・1mAのRhターゲット、X線ビーム径が100μmまたは10μm、検出器は高純度Si検出器(Xerophy)で、試料室の大きさは350×400×40mmである。検出可能元素はNa～Uであるが、Na、Mgといった軽元素は蛍光X線分析装置の性質上、検出感度が悪いいため、試料中に少量含む程度ではピークを検出し難く、検出できてもその定量値はかなり誤差が大きい。

本分析での測定条件は、50kV、0.10～0.32mA（自動設定による）、ビーム径100μm、測定時間4500s、パルス処理時間P4（分解能を重視した設定）に設定した。定量分析は標準試料を用いないF P（ファンダメンタル・パラメーター）法による半定量分析を装置付属ソフトで行った。そのため、定量値は誤差を大きめに見積もっておく必要がある。

2 結果

分析により得られたスペクトルおよびF P法による半定量分析結果を図版1～3に示す。分析No.1からは銅(Cu)、亜鉛(Zn)が主に検出され、他に鉛(Pb)、アンチモン(Sb)、ニッケル(Ni)が少量検出された。分析No.2は金(Au)が最も多く検出され、次いで銀(Ag)が多く検出された。他に銅、アンチモンが少量検出された。分析No.3は主に鉛が検出され、他に銅、鉄(Fe)、錫(Sn)、アンチモンが少量検出された。

3 考察

【分析No.1】

材質は黄銅（真鍮）である。黄銅は銅に亜鉛を加えた合金で、例外として正倉院宝物中に「鍮石」の名で数点存在するものの、我が国において一般的に多く使用されるようになるのは近世以降である。青銅と並び銅合金として広く利用され、亜鉛を30%程度含むと金に近い発色を得られる。当資料は薄板状をしており、用途は不明であるが金工素材としての使用等が考えられる。

【分析No.2】

分析の結果、金製品であることが判明した。金は純度が高いと柔らかくなり強度・硬度が低くなるため、一般に金製品は銀等を含む合金として使用されることが多い。金は、銀を多少含んだ合金（エレクトラム）の状態で自然金として採取される。また、近世の金工で銀を含んだ金は「青金」、銅を含んだ金は「赤金」と呼ばれた。

当資料は表面および折りたたまれた縁に加飾されており、何らかの装飾用の金具であると考えられる。分析結果では19～20金に相当するが、他の資料でも言えることだが半定量値であるため、今回得られた値から厳密な組成比を検討するべきではない。いずれにせよ、当資料は青金に分類することができる。

【分析No.3】

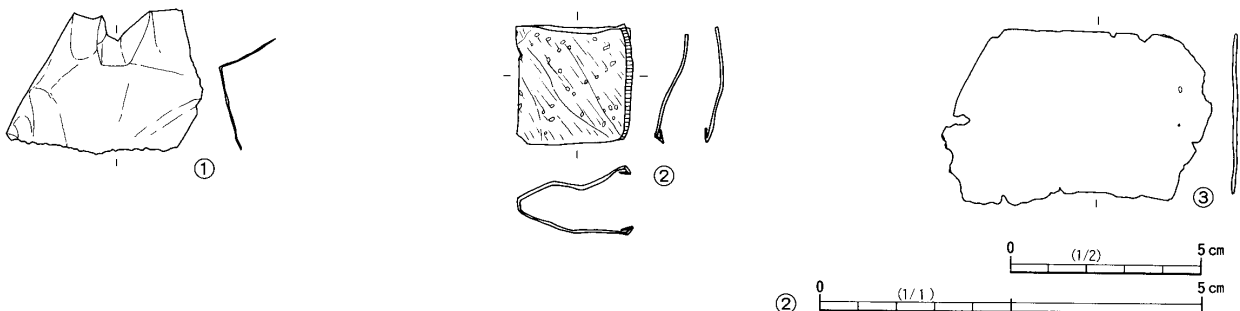
分析の結果、材質は鉛であった。近世において鉛は、鉄砲の弾丸や瓦等としての利用、また銅合金、ガラス、白粉、顔料等の原材料としての用途の他に、「灰吹き」と呼ばれる金、銀の精錬、「南蛮吹き」と呼ばれる粗銅中の銀の分離抽出において重要な役割を持つ金属であった。当資料は厚さ0.6mmの薄板状で用途は不明である。

4 おわりに

新発田城跡第19地点より出土した金属製遺物3点について分析した結果、材質は分析No.1が黄銅、No.2が金、No.3が鉛であることが判明した。

参考文献

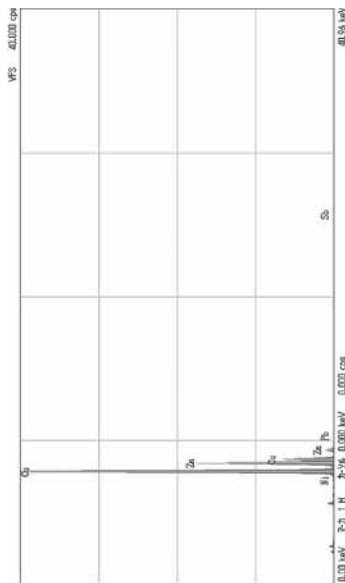
村上隆 2003 「金工技術」『日本の美術第』443号 至文堂



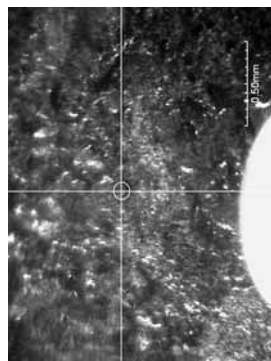
第1図 分析対象遺物



図版 1 新発田城跡出土金属分析No.1

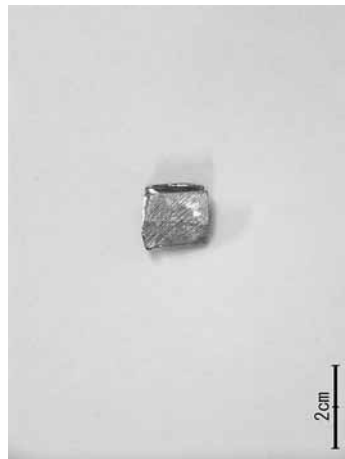


蛍光 X 線スペクトル

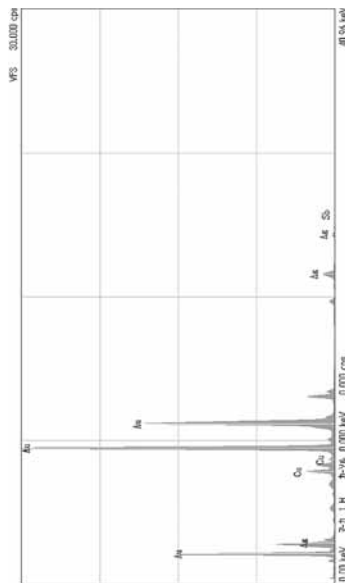


蛍光 X 線分析ポイント

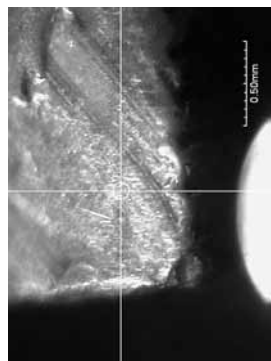
測定時間 : 4500s	ハルス処理時間 : P4				
XGT径 : 100 μ m	X線管電圧 : 50kV				
電流 : 0.10mA					
定量補正法 : スタンダード・レス					
元素	ライン	質量濃度 [%]	2 σ [%]	強度 [cps/mA]	
28	Ni	K	0.04	0.01	6.78
29	Cu	K	73.06	0.10	7811.55
30	Zn	K	26.19	0.08	2948.91
51	Sb	K	0.14	0.08	0.74
82	Pb	L	0.57	0.04	6.62



図版 2 新発田城跡出土金属分析No.2



蛍光 X 線スペクトル

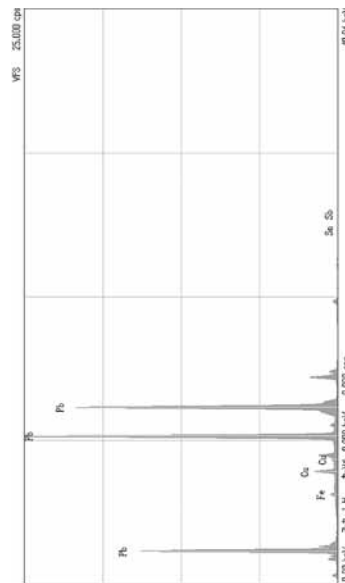


蛍光 X 線分析ポイント

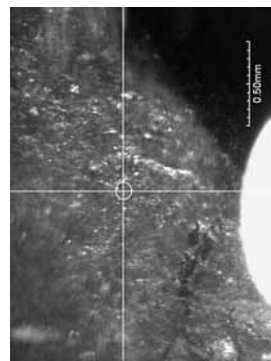
測定時間 : 4500s	ハルス処理時間 : P4				
XGT径 : 100 μ m	X線管電圧 : 50kV				
電流 : 0.32mA					
定量補正法 : スタンダード・レス					
元素	ライン	質量濃度 [%]	2 σ [%]	強度 [cps/mA]	
29	Cu	K	1.26	0.01	124.29
47	Ag	K	16.73	0.12	124.57
51	Sb	K	0.18	0.06	0.60
79	Au	L	81.82	0.13	1895.50



図版 3 新発田城跡出土金属分析No.3



蛍光 X 線スペクトル



蛍光 X 線分析ポイント

測定時間 : 4500s ハルス処理時間 : P4
XGT径 : 100 μ m X線管電圧 : 50kV
電流 : 0.30mA
定量補正法 : スタンダード・レス

元素	ライン	質量濃度 [%]	2 σ [%]	強度 [cps/mA]	
26	Fe	K	0.42	0.02	22.58
29	Cu	K	1.15	0.02	90.91
50	Sn	K	0.41	0.08	1.39
51	Sb	K	0.22	0.08	0.62
82	Pb	L	97.80	0.12	1888.21

第Ⅵ章 ま と め

1 出土した遺物について

今回の調査で出土した遺物は、主に18世紀後葉から19世紀中葉に比定される。碗を中心とした食膳具・調理具・暖房具・照明具・文房具・玩具・化粧道具・神仏具など、生活用具全般が出土している。2号護岸施設構築土層から出土する遺物の割合が高く、全般的に器種が豊富であるほか、碗類・土瓶および遺存率の高い灯火具の多さが特徴的であり、土器で規格をもつ焙烙や、涼炉の出土も注目される。

遺存率が高く、住生活にかかわる多様な器種が、集中して出土する本調査地点からの遺物の様相は、屋敷引き払いなどの大規模な片付け跡である非日常的な廃棄行為（井汲1994）を示唆するものである。さらに、同一器種が多数検出されることから、複数世帯が居住した空間からの廃棄と考えられる。喫茶碗の高台底裏に記された墨書には、私邸的な居住空間で使用されたと考えられる用途を示すものがある。

また、多量に出土した碗は、口径9cm前後の碗が多く、瀬戸美濃産の磁器端反碗とともに、小杉茶碗、灰釉丸碗・端反碗などの京都・信楽産の陶器碗が特に目立ち、多量の土瓶、焙烙と共伴する。口径7cm未満の磁器小碗・坏も数量的に多く、飲酒器として爛徳利との関連が注目されるが、湯呑み碗や煎茶道に使用される清朝磁器を模倣した碗が多く、急須や涼炉、茶臼、茶托（金属製品）の可能性のある遺物の出土からも、喫茶関係の遺物が特に充実しているといえる。こうした喫茶関係の遺物が多く出土する要因としては、人が集って飲茶する場からの廃棄が考えられ、本調査地点の立地等を考慮すれば、喫茶道具が公共施設的な場で使用されたものと思われる。喫茶碗の高台底裏に記された個人名は、こうした場で各々が使用したものといえよう。

出土遺物の生産地組成をみると、18世紀代は磁器だけでなく陶器に関しても肥前産が大半で、瀬戸・美濃産などの出土量が少ない。これは日本海沿岸に広くみられる傾向であるが、19世紀代に入ると、磁器では瀬戸・美濃産が加わる。さらに胎土や釉調、仏飯碗の脚部底面に残る胎土目のような痕跡など、地方窯の製品と思われるものがあり、第8地点の出土遺物で、会津若松市・蚕養窯の製品が確認されていることから、本調査地点でもそうした製品が含まれるものと想定される。

陶器では、出土遺物の帰属年代が地方窯の盛行期にあたり、京都・信楽産とともに、主に東北地方の窯とみられる製品が主体となる。また、新発田藩窯では、『文化六年日記』（1809年）に、小坂にある藩窯の生産高が増し、1年に2000個までの製品を藩入用分として納入するとの記載があり、19世紀に入り窯業が軌道にのっている様子が窺え、産地不明とした製品の中に、本藩窯製品が含まれているものと考えられる。

土器では、本遺跡の他地点でも出土する軟質の土師質土器のほかに、薄手で硬質の土師質土器が、把手付焙烙や、火消し壺などとして使用されたと考えられる蓋付きの鉢、焜炉類とこれに付属するサナ、涼炉などの器種でみられた。これらの土器は、耐久性や法量から遠距離輸送に向かないものであることから、近郊に供給源が存在するのではないかと考えられる。特に把手付焙烙は、底面にケズリ調整が施され、口径が16～17cmと小型で独自性がみられる。小型焙烙と同法量のものが多く出土した土鍋や、土瓶など、底部にススが付着する遺物が多くみられることから、当該地域において、竈・焜炉（七輪）といった小口径の加熱具が、ある程度普及していた可能性があり、焜炉類の出土量もこれを裏付ける。こうした背景の中で、焜炉類とともに小型化した焙烙が当該地域近郊で製作され、使用されたものと考えられる。

2 当該地点の変遷

本調査地点は、二の丸の周囲を巡る外堀西辺、西ノ門（西川門）南側の外堀の西岸壁に相当する。まず、現存する絵図（第31図）を援用しながら、当該地点における土地利用の変遷を述べる。

近世の概況 新発田城の城郭を描いた最も古い絵図である1『正保年間御家中絵図』（正保3・1646年）によれば、西ノ門付近の外堀は、幅9間、深さ1丈と記される。堀の西側は、西ノ門正面から延びる広小路および馬小屋がある。2『一步一間歩詰惣絵図』（天保11・1840年頃）では、堀に接続する水路、小細工所があり、南側に隣接して郡役所、区画の南端には寺社町御役所が存在するなど、二の丸西辺の堀に面した区画は、藩の施設が占める。3『新発田藩絵図』は、製作年代が不明であるが、4『明治初年の新発田藩家中屋敷割図』を含めた絵図の比較から、天保期よりも新しい段階を示していると考えられる。堀の曲線が簡略化され、歪みがみられるが、西ノ門脇櫓、西ノ門、門正面の御作事場など、藩施設には建物が描かれており、本調査地点に相当する部分にも東西に長い建物が描かれる。

近代の概況 4『明治初年の新発田藩家中屋敷割図』では、当該地点は軍務局と記載されている。明治維新後、城内は明治4年から陸軍が進駐し始めることから、藩の施設を軍の施設として使用されたものとみられる。

城内の建物は、城郭棄却令にもとづいて、明治6・7年頃に壊され、替わって陸軍施設を建設し、同7年に新発田歩兵16聯隊が設置される。明治18年には城郭の南西部分に配された旧家臣の家屋敷を買収し、訓練施設（営前練兵場）が造成された。5『新発田営所明細図』（明治29・1896年）・6『北蒲原郡新発田町全図』（大正6・1917年）との照合から、本調査地点は陸軍正面出入り口に直結する主道路に面した部分に相当し、明治29年には、営前練兵場の造成によって、西辺の外堀は埋没しているのがわかる。

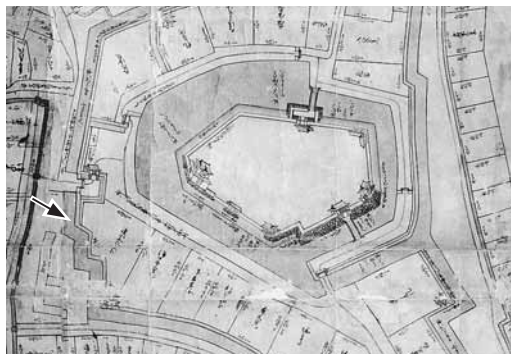
上記の内容をふまえて、発掘調査で検出した2基の護岸施設による堀の3時期（a～c）の変遷（第33図）を軸として、本調査地点の様相を述べる。

a期 堀の確認できた範囲は幅5m、確認面からの深さは80cm、断面形状は箱葉研状で、堀西端に幅2.6mの溝が伴う。堀上端には小規模な杭列a・bが設けられ、瓦の小片が敷かれる。

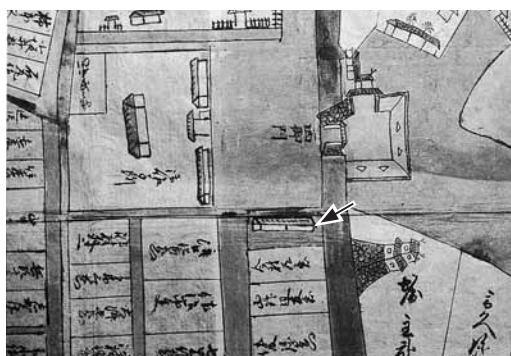
堀上端にみられる杭列・瓦敷は、近世の構築と考えられるが、堀aの西岸壁・底面形状は、堆積土や遺物の年代・出土状況から2号護岸施設構築時に伴う浚渫などによる可能性があり、近世に帰属したとしても、江戸時代後期に浚渫や堀の拡張などが行なわれるなどして、堀構築当初の形状を残しているものではないと思われる。また堀西側の確認面上で、小規模な土坑が集中して検出されるが、構築時期、性格等は不明で、b期の2号護岸施設構築によって廃絶したものと考えられる。

b期 堀西壁に2号護岸施設が構築される。護岸は木組みの工法・配置から、北側と南側とに大別でき、さらに構築材間の新旧関係や遺物の出土状況などから、南北6m前後の長さを構築の単位としたA～C群（第32図）に細分できる。重複する木組の新旧関係から、北側よりA群（木組F・杭列e）→B群（木組C・F、杭列c・d）→C群（木組D）の順で構築されている。護岸施設構築土層は、18世紀後葉～19世紀中葉に比定される多量の遺物を含み、特にB群とした範囲からの出土量が多い。遺物の接合状況は、上層から下層までの層間接合が著しく、一時期に構築土が投入されたものと思われる。出土グリッド間の接合では、A～C群の各群の範囲にまとまる傾向が看取された。

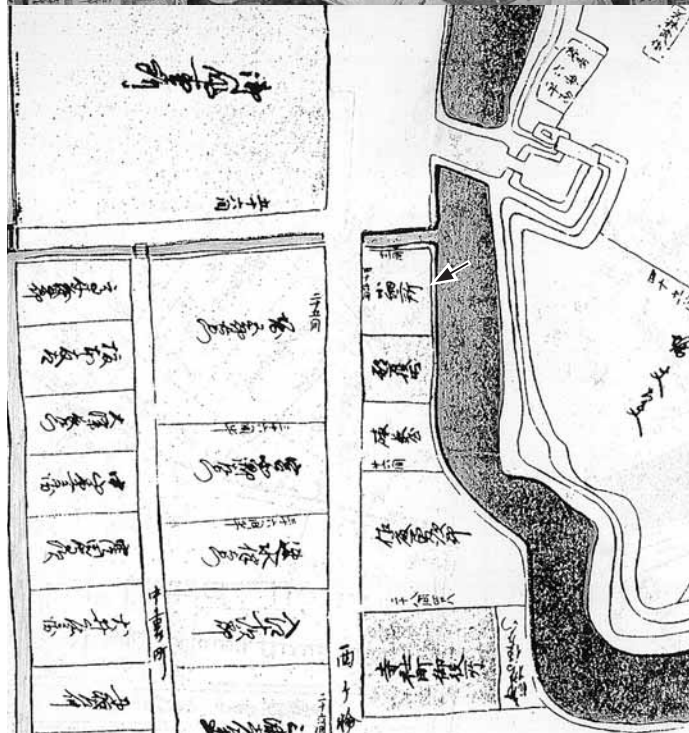
護岸施設北側のA群東端は、南側のB・C群東端に比べて約2m西に配置される。A群の護岸施設構築土は、



1『正保年間御家中絵図』正保3(1646)年



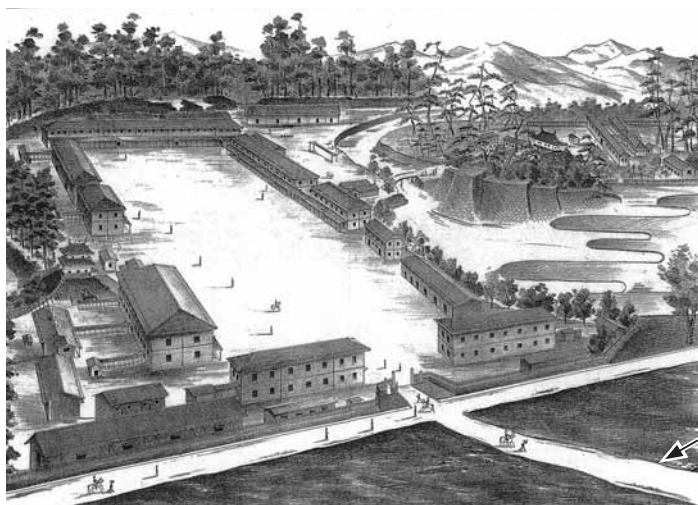
3『新発田藩絵図』



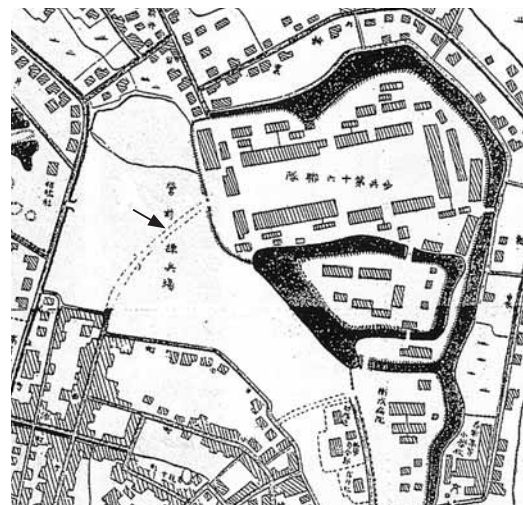
2『一步一間歩詰惣絵図』天保11(1840)年頃



4『明治初年の新発田藩家中屋敷割図』

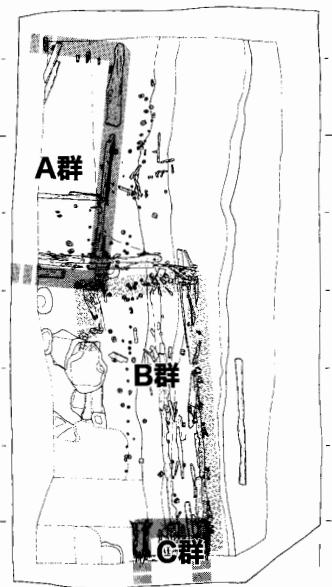


5『新発田営所明細図』明治29(1896)年

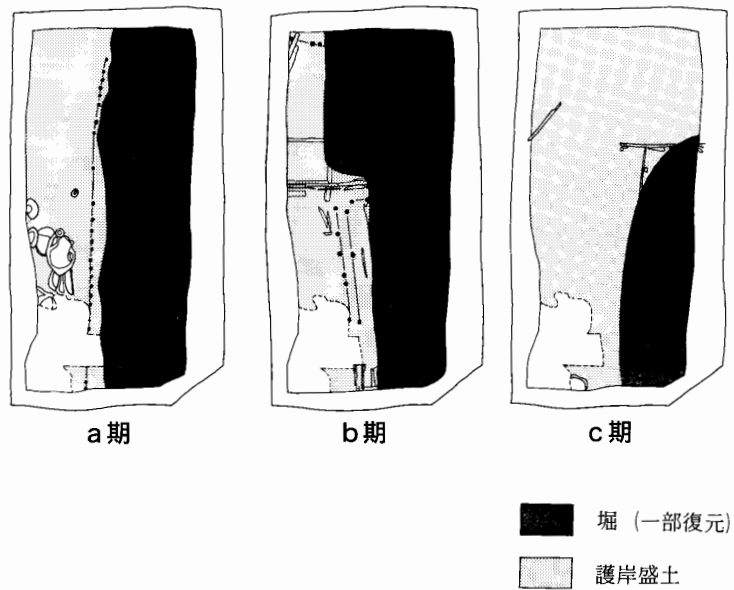


6『北蒲原郡新発田町全図』大正6(1917)年

第31図 新発田城の絵図



第32図 2号護岸施設の構築単位図



第33図 堀の変遷図

後続するc期の1号護岸施設構築の際に影響を受けるなどして、堀bの上端稜線がやや不明瞭な状況であるが、B群北端を補強したものと想定される木組C・杭列dの配置や、調査区の約10m北に設定したトレンチで、木組がB・C群の延長線上で検出されたことから、A群部分が西に窪むように護岸施設が構築されていたものと考えられる。この窪みが何を意図するものなのかは、今回の発掘調査では明らかにしえなかったが、絵図に描かれた堀に接続する水路と関連する可能性があるかもしれない。

2号護岸施設の調査区外へ延びる南側は、本調査区から南へ120mの地点で、平成19年度に確認調査（第21地点）が行われている。調査の結果、木組を伴う護岸施設を検出できないことから、2号護岸施設の構築範囲が二ノ丸外堀西辺の一部に留まることが判明している。また、2号護岸施設の構築土は、確認調査時の土層観察によって、本調査区から西へ10mの地点においても堆積が確認でき、護岸構築と堀周辺の土地造成とが関連して行われたものと思われる。その土地利用変更の契機となるのは、明治4年からの陸軍による新たな利用目的への対応に求められ、2号護岸施設構築土からの出土遺物は、非日常的廃棄行為の様相を示していた。護岸施設の構築行為は、おそらく新発田藩に関わる公的施設や、武家地に居住した複数世帯の屋敷払いに伴って、排出された大量のゴミ廃棄とが関連し、護岸施設の用材には、屋敷建築部材が転用されたものと考えられる。

c期 2号護岸施設により補強され、南北に延びていた堀の一部が、1号護岸施設の構築により途絶し、堀の北端が立ち上がる。1号護岸施設構築土内からは、陶磁器・土器とともに、構築土下部より明治10年の硬貨が出土していることなどから、護岸の構築はそれ以降と考えられる。堀の部分的な埋め戻しは、旧西ノ門が陸軍正面出入口となることから、旧西ノ門前の堀に架かる土橋を、堀を埋めることで拡張整備し、交通の便を良くしたものと考えられる。その後、明治18年に至って営前練兵場の設置により、本調査地点の周辺の堀が完全に埋め戻されたものと想定される。

3 小 結

明治維新後、城内は新政府による城郭棄却令により、櫓・門をはじめとして各建築物が壊された。陸軍の駐屯に伴い、軍施設へ建て替えられて行く中で、本調査地点は、藩の公共施設および家臣の屋敷地からの建築廃材を利用し、多量のゴミの処理と堀の護岸施設の構築を関連させ、堀を継続して機能させていた。しかし、新発田城の大部分の堀が、アジア・太平洋戦争後まで近世の堀の形状を維持していく一方で、陸軍による土地利用の拡大から、外堀の中でもいち早く埋没する経過がたどれ、近世から近代にかけての当該地点での堀の変容が確認できた。

参考文献

- 安芸毬子・大成可乃・大貫浩子・坂野貞子・成瀬晃司・堀内秀樹 1999 『東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(1)』
(『東京大学構内遺跡調査研究年報2』別冊 東京大学埋蔵文化財調査室)
- 安芸毬子 2001 「V-5遊び」『図説 江戸考古学研究事典』 柏書房
- 阿部洋輔・木村宗文 1980 「新発田市域の荘園」『新発田市史』上巻
- 阿部洋輔ほか 1980 「鎌倉・室町期の新発田」『新発田市史』上巻 新発田市
- 井汲隆夫 1994 『南町遺跡』 兵庫県 新宿区南町遺跡調査団
- 伊藤正一 1980 「城と館」『新発田市史』上巻 新発田市
- 江戸遺跡研究会 2001 『図説 江戸考古学研究事典』 柏書房
- 江戸陶磁土器研究グループ 1992 『シンポジウム江戸出土陶磁器・土器の諸問題』Ⅰ 江戸陶磁土器研究グループ
- 江戸陶磁土器研究グループ 1996 『シンポジウム江戸出土陶磁器・土器の諸問題』Ⅱ 江戸陶磁土器研究グループ
- 荻野正博 1980 「加地荘・豊田荘の荘域」『新発田市史』上巻
- 加藤 晃 1989 「江戸時代の瓦における「江戸式」の展開—軒平瓦・軒棧瓦の瓦当文様の変遷—」『史学研究集録』
國學院大學日本史学専攻大学院会
- 金子 智 1996 「江戸遺跡出土資料に見る近世の軒平瓦・軒棧瓦の地方色」『古代』第101号
- 金子 智 1998 「近世瓦の刻印」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』 別冊第43輯第4分冊
- 川上貞雄 1982 『貝屋須恵窯址』 加治川村教育委員会
- 川上貞雄 1999 『志村山須恵窯址』 豊浦町教育委員会
- 菊地康一郎 2003 「本地区出土の焙烙について」『雑司が谷Ⅰ』 豊島区教育委員会
- 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年』
- 熊倉弘基 1981 「歩兵第十六聯隊の設置」『新発田市史』下巻 新発田市
- 桑原正史 1980 「律令時代の阿賀北地方」『新発田市史』上巻
- 古泉 弘 1987 『江戸の考古学』 ニュー・サイエンス社
- 古泉 弘 2001 「煙管」『図説 江戸考古学研究事典』 柏書房
- 小松彰・山田裕二・土田孝雄 1995 『三国街道(中道り)』 新潟県教育委員会
- 小村 弼 1980 「新発田重家と上杉景勝の争覇」・「藩体制の確立」『新発田市史』上巻 新発田市
- 小山正忠・竹原秀雄 1967 『新版標準土色帖』 農林水産技術会議事務局監修
- 近藤真佐夫 1998 『史跡 若松城跡Ⅱ』 会津若松市教育委員会
- 近藤真佐夫 2003 『若松城郭内武家屋敷跡Ⅰ』 会津若松市教育委員会

坂井秀弥ほか 1989 『山三賀Ⅱ遺跡』 新潟県教育委員会・建設省新潟国道工事事務所

新発田古地図等刊行会 1974 『一步一間歩詰惣絵図』

新発田市教育委員会 2004 『新発田城三階櫓・辰巳櫓復元工事及び石垣補強工事報告書』 新発田市

重要文化財新発田城修理委員会 1960 『重要文化財新発田城旧二の丸隅櫓 表門修理工事報告書』 真陽社

関 雅之・本間信昭 1981 『真木山製鉄遺跡』 豊浦町教育委員会

高橋 保ほか 2006 『住吉遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

高橋礼弥 2005 『新発田藩年代記』 新発田藩年代記刊行会

竹内理三編 1987 『角川日本地名大辞典 15 新潟県』 株式会社 角川書店

武田広昭 1980 「諸工業」『新発田市史』上巻

田中耕作 1987 『新発田城跡発掘調査報告書（Ⅰ～Ⅲ区）』 新発田市教育委員会

田中耕作・鶴巻康志ほか 1990 『三光館跡・宝積寺館跡』 新発田市教育委員会

田中耕作ほか 1998 『大真木遺跡発掘調査報告書』 新発田市教育委員会

辻 真人 1992 「焙烙の変遷」『江戸の食文化』 江戸遺跡研究会編, 吉川弘文館

鶴巻康志ほか 1997 『新発田城跡発掘調査報告書Ⅱ』 新発田市教育委員会

鶴巻康志 1998 『市道関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ』 新発田市教育委員会

鶴巻康志 1999 『寺内館跡発掘調査報告書』 新発田市教育委員会

鶴巻康志 2001 「新発田市ホーロク沢窯跡採集の須恵器」『北越考古学』第12号 北越考古学研究会

鶴巻康志ほか 2001 『新発田城跡発掘調査報告書Ⅲ』 新発田市教育委員会

鶴巻康志ほか 2003 『桑ノ口遺跡発掘調査報告書』 新発田市教育委員会

鶴巻康志 2004 『新発田城跡発掘調査報告書Ⅳ』 新発田市教育委員会

鶴巻康志ほか 2005 『荒神裏A遺跡発掘調査報告書』 新発田市教育委員会

戸根与八郎 1973 「新潟県北蒲原郡加治川村下小中山の須恵器窯」『越佐研究』第33集 新潟県人文研究会

戸根与八郎 1986 「真木山窯跡群」『新潟県史』通史編1 原始・古代

中川成夫 1962 『新潟県北蒲原郡における二窯址の調査』 豊浦村教育委員会

長佐古真也 2000 「日常茶飯事のこと」『江戸文化の考古学』 江戸遺跡研究会

植崎彰一編 1986 『開館15周年記念一越前名陶展一』 福井県陶芸館

藤澤良祐 1996 「中世瀬戸窯の動態」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界～その生産と流通～』 (財)瀬戸市埋蔵文化財センター

水澤幸一 2005 「潟街道の遺跡群」『古代の越後と佐渡』 高志書院

水本和美 1998 『陶磁器・土器分類・計算基準』 (豊島区教育委員会『伝中・上富士前Ⅱ』別冊) 豊島区遺跡調査会

水本和美ほか 2003 『雑司が谷Ⅰ』 豊島区教育委員会

宮内信雄 2002 『ニッ割遺跡・中住吉遺跡発掘調査概要報告書』 紫雲寺町教育委員会

宮内信雄ほか 2004 『ニッ割遺跡, 中住吉遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 紫雲寺町教育委員会

柳田俊雄 1990 『蚕養窯跡発掘調査報告書』 会津若松市教育委員会

吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館

四柳嘉章 1997 「新潟県新発田城出土漆器の塗膜分析」『新発田城跡発掘調査報告書Ⅱ』 新発田市教育委員会

四柳嘉章 2001 「新潟県新発田城出土漆器の塗膜分析(2)」『新発田城跡発掘調査報告書Ⅲ』 新発田市教育委員会

渡邊美穂子ほか 2001 『坂ノ沢C遺跡Ⅱ』 新発田市教育委員会



護岸施設 検出状況 (南から)



完掘全景 (北から)



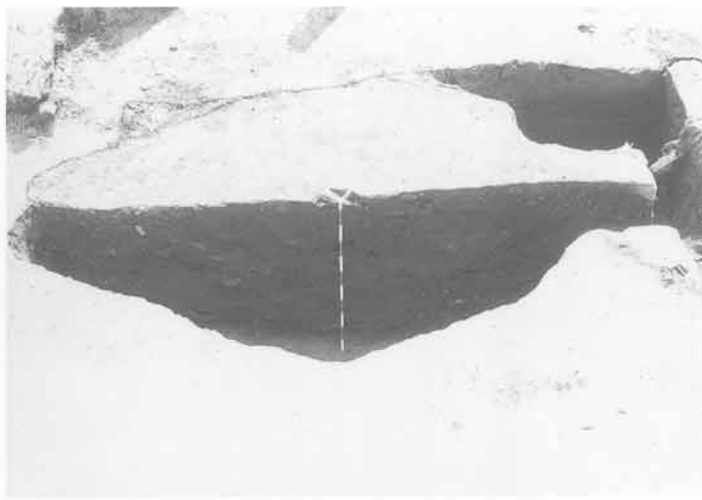
メインセクション東側下層 (北から)



メインセクション上層 (北から)



調査風景（西から）



1号土坑断面（西から）



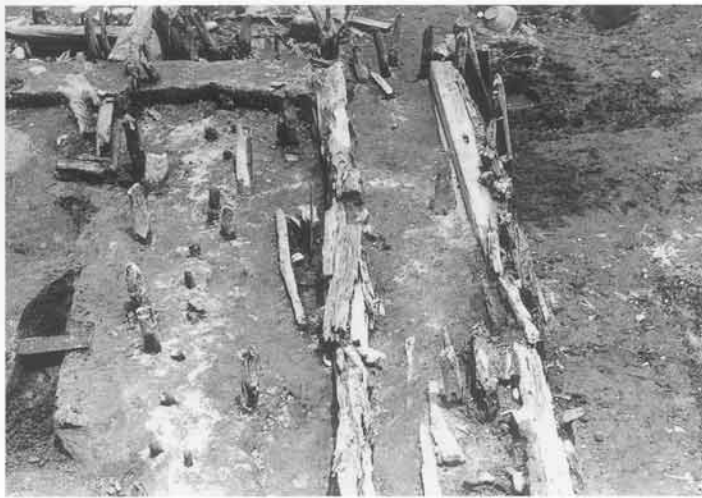
調査区南壁セクション（北から）



護岸施設構築材 検出状況（南から）



瓦出土状況 Lfグリッド（西から）



護岸施設構築材 検出状況（南から）



1～4号土坑・1号溝 完掘（南から）



調査区全景 完掘状況（南から）



184



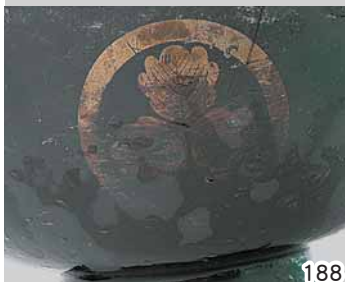
186



185



187



188



189



190



191



193



192



195



194



196



197



198



199



200



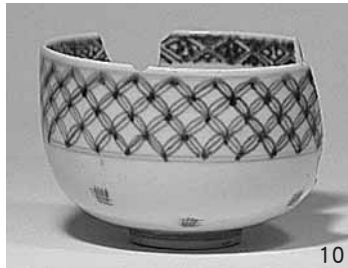
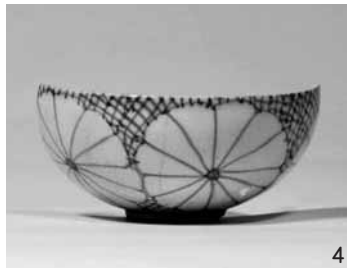
201

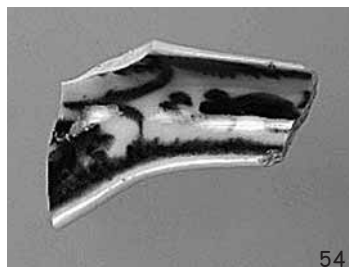
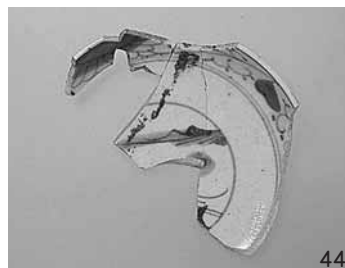
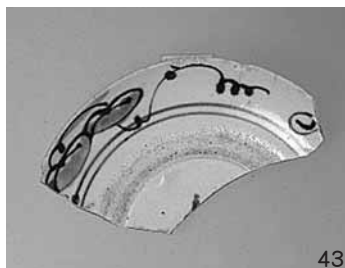
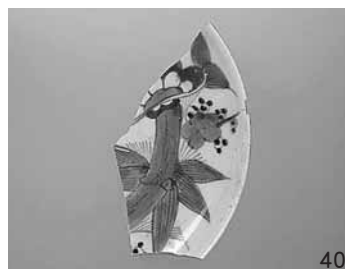
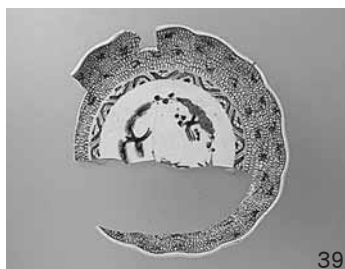


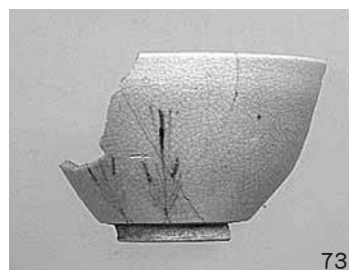
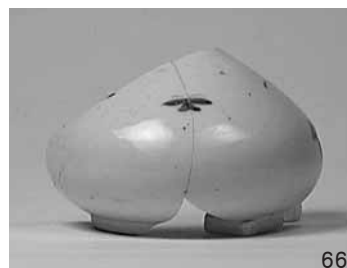
202

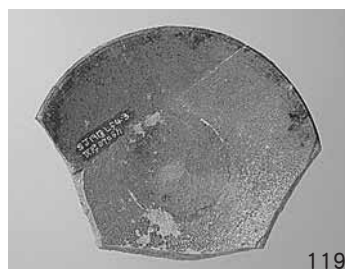
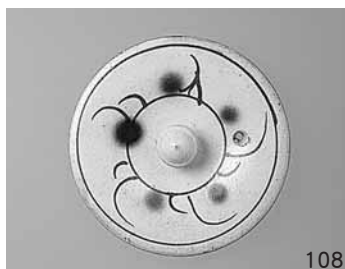
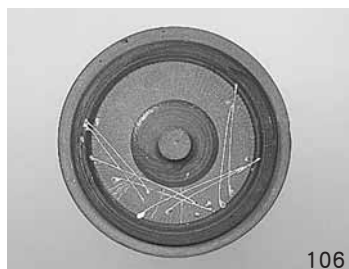
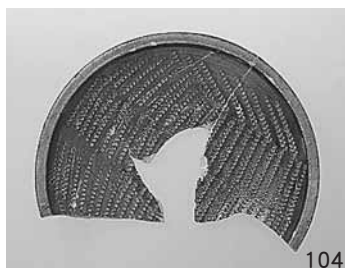


1

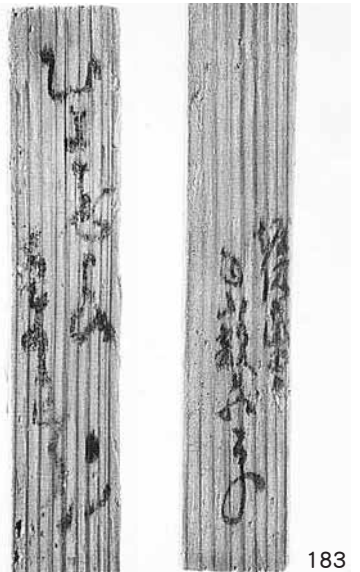
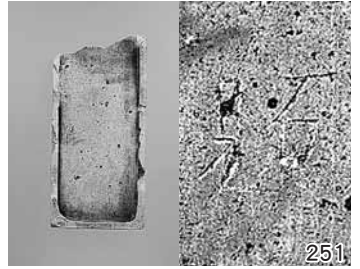
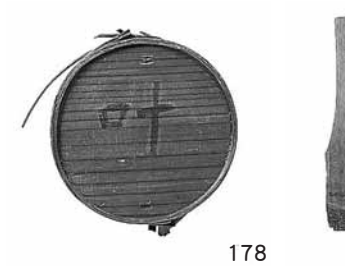
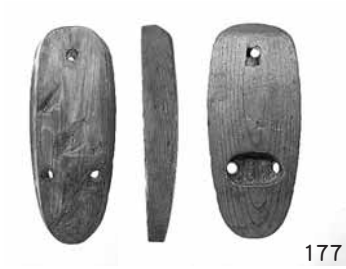
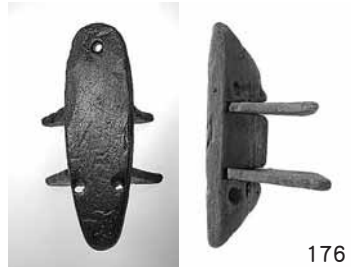
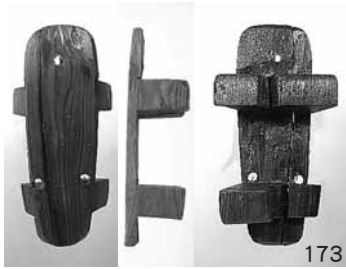


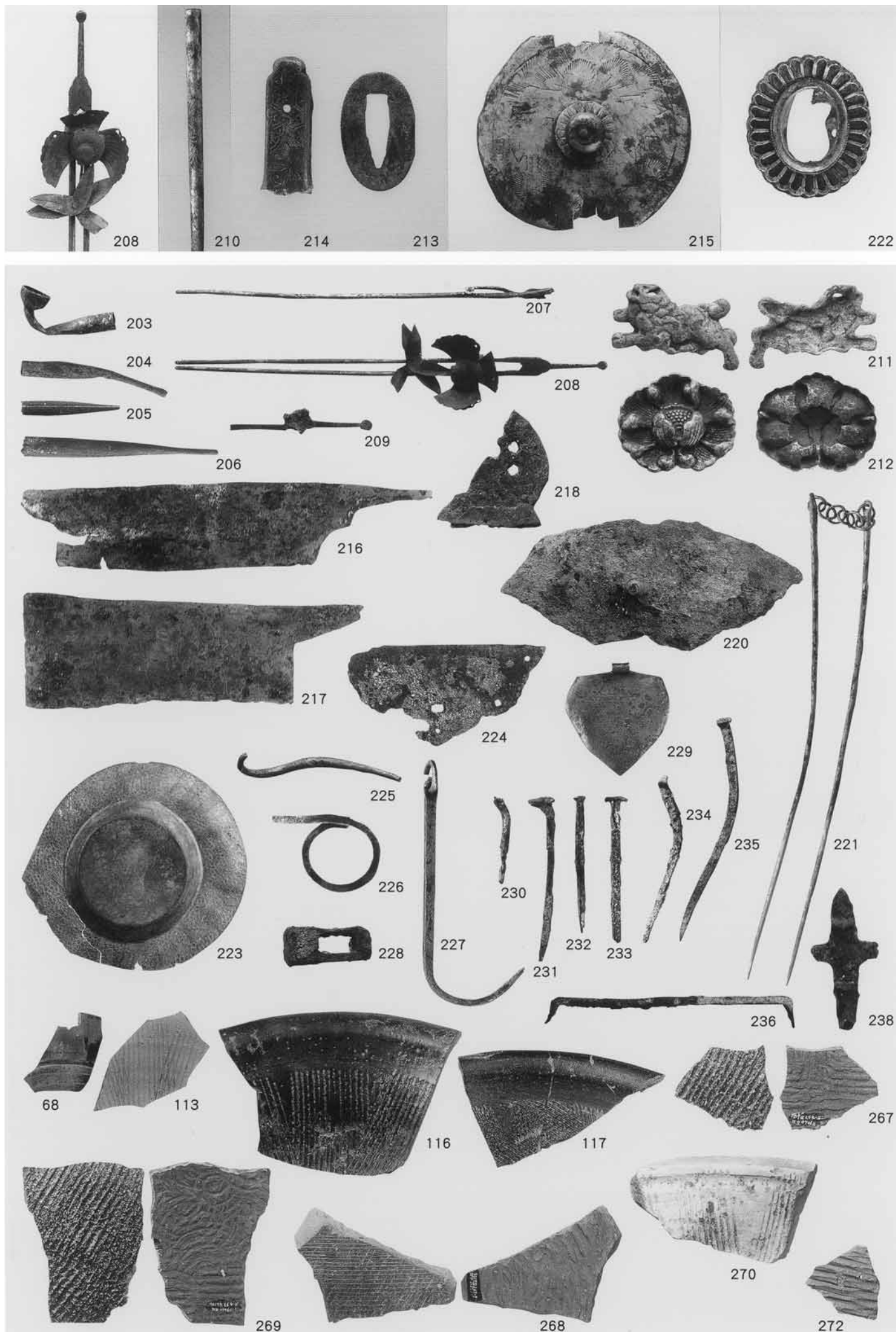












報告書抄録

ふ り が な	しばたじょうあと							
書 名	新発田城跡 発掘調査報告書 V（第19地点）							
副 書 名								
シ リ ー ズ 名	新発田市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第38							
編 著 者 名	伊藤喜代子・鶴巻康志・竹原弘展							
編 集 機 関	新発田市教育委員会（教育部 生涯学習課 埋蔵文化財係）							
所 在 地	〒959 - 8686 新潟県新発田市乙次 2 8 1 番地 2 TEL. 0254-22-9534							
発 行 年 月 日	平成20（2008）年 3 月19日							
体 裁	A 4 版 横組 1 段 本文54頁 写真図版10頁							
所 収 遺 跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
新 発 田 城 跡	新発田市 大手町6丁目 1 番地 1 ほか	15-206	92	37° 57′ 19″	139° 19′ 19″	20070514～ 20070621 (26日間)	138㎡	倉庫建設
遺 跡 名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
新発田城跡 （第19地点）	城 郭	近世～ 近代	堀 護岸施設 2 基・ 土坑 5 基 溝 1 条	近世陶磁器・ 木製品・漆器・金属 製品・銭・石製品・ 硝子製品・瓦ほか			二ノ丸の西側に位置 する外堀に構築され た護岸施設を検出	
要 約								
二ノ丸を巡る外堀の西岸壁で、2基の護岸施設を検出し、近世～近代にかけての堀の3時期の変遷をたどれた。出土遺物は、多岐にわたる器種と出土量の多さから、新発田城の廃城による後片付けとみられ、18世紀後葉～19世紀中葉に比定される。								

新発田城跡 発掘調査報告書 V

(第19地点)

発 行 平成20(2008)年3月19日

新発田市教育委員会

新潟県新発田市乙次281番地2

印 刷 島津印刷 株式会社

本書は、本文・図版とも中性紙を使用しています。